

アメリカのアドバンスト・ プレイスメント・プログラム

— 高大接続の現状と課題 —

高等教育研究叢書

102 2009年3月

小川 佳万・小野寺 香



広島大学

高等教育研究開発センター

アメリカのアドバンスト・プレイスメント・プログラム
－ 高大接続の現状と課題 －

小川 佳万・小野寺 香

広島大学高等教育研究開発センター

はしがき

アメリカのアドバンスト・プレースメント・プログラム (Advanced Placement Program : APプログラム) は、学業成績が優秀な高校生に対して大学1-2年次レベルの科目を履修する機会を与え、その試験結果が良好であれば、大学の単位として認定される全米規模のプログラムである。このAPプログラムは、授業が高校教員によって実践され、試験はカレッジボードによって管理され、単位は大学で認定されるため、高大接続(連携)を考える場合、非常に興味深いプログラムであると言える。また、優秀な高校生への教育、大学での教養教育、教員の力量向上等の問題を考える際にも、それは多くの示唆を日本に提供してくれるユニークなものであると言える。もちろん、日本では前例がなく、かつそれをそのまま日本で導入することは困難であることも確かであるが、日本で高大接続(連携)や個性に応じた教育への関心が高まるにつれて、APプログラムの現状や課題を正確に把握することは今後ますます重要になってくると考えられる。

近年、日本では高大接続(連携)に関する議論がますます盛んになってきている。その際に、このAPプログラムが紹介されることもあるが、その情報があまり浸透しているとは言えないのが現状である。また紹介論文であっても、第一に内容が部分的であって基本的な情報が決定的に不足していること、第二にそれらの情報が古く、近年の変化がカバーされていない、という重要な問題がある。APプログラムという単語を聞いたことのある教育関係者であっても、大学教員が高校に出向いて授業を行う、いわゆる「出前授業」をイメージしていることが筆者の経験から明らかになった。また、直接著者に「高校の教員が担当する授業がなぜ大学の単位になるのか」等、さまざまな疑問を呈する先生方もいた。

本叢書は、APプログラムに関心をもつ研究者や教員が、その全体像を把握でき、かつ彼らのさまざまな疑問に答えられるように正確で有益な情報を提供することを目指したものである。第1章で、APプログラムを理解するための、アメリカの高校教育に関する基本的な情報を提供した後、第2章では、APプログラムがどのように発展してきたのかについて概観する。続く第3章では、高校におけるAPプログラムの授業について資料に基づいて具体的に述べ、第4章でその授業の成果を測るAP試験の内容について言及する。さらに、第5章では、AP試験結果を大学側がどのように単位認定するのかについて詳述し、最後に第6章で、こうしたAPプログラムの主な効果や課題についてまとめる。以上のとおり、本書を通読することによって、読者はAPプログラムに関する基本的かつ最重要事項を網羅できることになる。

なお、本書はAPプログラムに関する最新の動向をできるだけ平易な表現で説明し、正確に伝えることを最大の目的としているため、2000年以降の動向を対象とした。情報の出所は、カレッジボードから出版された報告書やウェブ上の情報の他、AP関連の論文、さらにはアメリ

カの教育分野で定評のある全国紙 *Education Week* や *The Chronicle of Higher Education* の記事である。特にこれらの新聞は、教育に関する最新動向を把握するには適切な情報源であり、本書執筆の上で有益となった。

もう一つの情報源は現地校で収集した資料である。筆者は幸運にもここ数年アメリカの学校をしばしば訪問する機会に恵まれ、小学校から高校まで、公立・私立学校、共学・別学校などの現状や改革動向について調査してきている。しばしば指摘されることであるが、教育制度が州や学区によって少なからぬ違いがあることも具体的にわかってきたため、本書で事例として取り上げるアメリカの高校は、カリフォルニア州ロサンゼルス統合学区 (*Los Angeles Unified School District*) 内の筆者が訪問した高校 4 校とし、そこで収集した資料をもとに明らかにしていくことにする。この点に関連して、東北大学大学院教育学研究科主催の国際シンポジウム「高校教員の日米比較」を 2007 年 3 月に開催し、同学区から高校の先生方をお呼びして、意見交換できたことは、本書の執筆にあたって非常に有益であったことも記しておきたい。

最後に、本書の執筆にあたっては、さまざまな人々のお世話になった。共著者の小野寺香さんは、本人の執筆担当章だけでなく、文献調査にも大いに貢献してくれた。また、校正にあたっては、大学院生の平中里弥さん、高橋文平さんにもお世話になった。本書は小書にすぎないが、AP プログラム、さらには高大接続問題に関心を持つ人々に少しでも役に立つことができれば幸いである。

2008 年 11 月 仙台
著者を代表して 小川佳万

目 次

はしがき	小川 佳万 …………… i
第1章 高校教育とAPプログラム	小川 佳万 …………… 1
第2章 APプログラムの発展と支援	小野寺 香 …………… 17
第3章 AP科目の授業	小川 佳万 …………… 37
第4章 AP試験と結果	小野寺 香 …………… 51
第5章 大学の単位認定	小川 佳万 …………… 69
第6章 APプログラムの効果と課題	小野寺 香 …………… 81

第1章 高校教育と AP プログラム

小川 佳万
(東北大学)

1. はじめに

アメリカのアドバンスト・プレイスメント・プログラム (Advanced Placement Program : AP プログラム) は、学業成績が優秀な高校生に対して大学1-2年次レベルの科目を履修する機会を与え、その試験結果が良好であれば、大学の単位として認定される全米規模のプログラムである。科目が大学教育レベル (一般教育レベル) であり、生徒の試験結果によっては大学側が単位として認定するという意味で、それは疑いなく高等教育の一部分である。ただし、AP プログラムの授業は高校 (High School¹⁾) で、高校生を対象に、高校教員が担当するという意味で高校教育 (後期中等教育) の一部に組み込まれているという面も併せ持っている。しかも、AP 科目の履修は、大学進学の際に有利に働くという意味で、生徒個人にとってきわめて重要な高校教育の一部となる。さらに、同プログラムは、その学習成果を測る試験 (AP 試験) を、大学でも高校でもないカレッジボード (College Board) が管理しているという点もユニークである。つまり、全米の各高校でそれぞれ AP 科目の授業が行われているが、その成果は全国共通の AP 試験によって測られているのである。

本章では、このユニークな AP プログラムを理解する上でその前提となる情報について言及していくことにする。まず、アメリカの教育制度や高校の概要を説明しながら、高校教育課程のなかでの AP 科目の位置づけについて明らかにしていきたい。そして後半では、この AP プログラムを管理しているカレッジボードの概要について言及する。周知のとおり、アメリカの教育制度は州によって、また学区 (School District) によって多様であり、アメリカの典型的な教育制度や高校教育を述べることは困難であるため、主としてカリフォルニア州ロサンゼルス統合学区 (Los Angeles Unified School District) の高校 (公立) を事例として具体的に説明していくことにする。

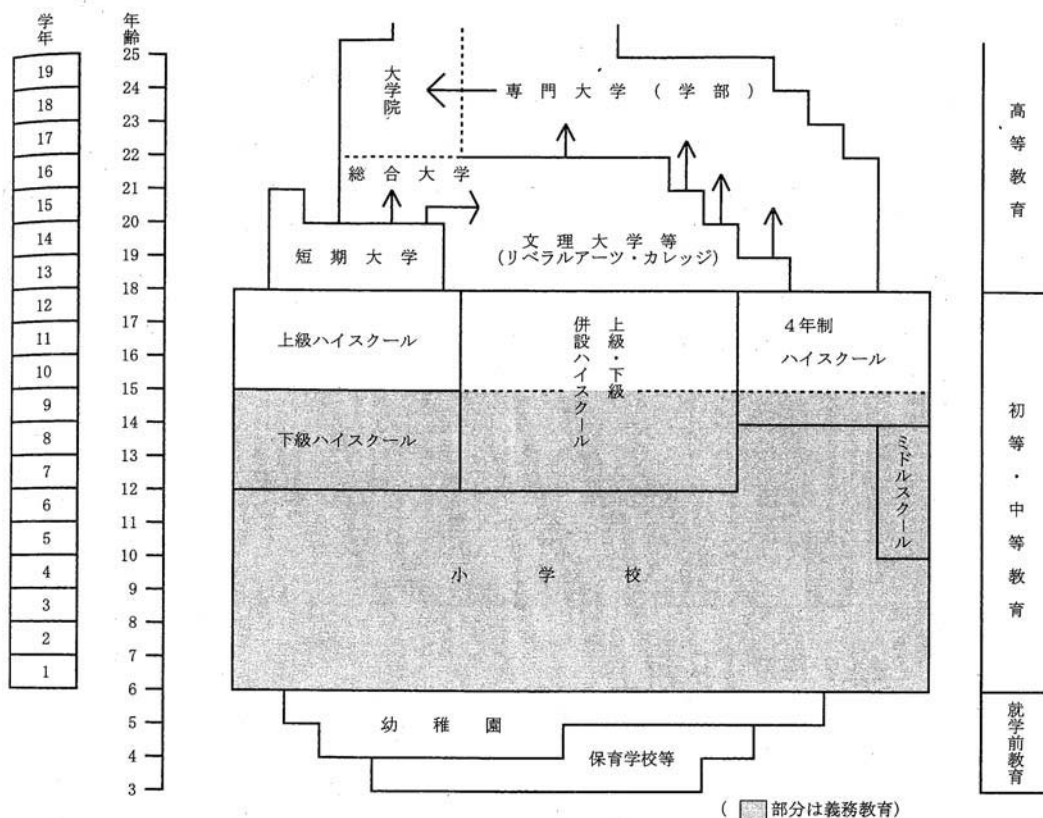
2. アメリカの高校

(1) 教育制度

アメリカにおいて教育に関する権限は州にあり、その州は教育に関する権限事項の多くを学区 (School District) に委譲している。その学区では教育委員会 (Board of Education) が教育に関する意思決定を行っている。日本にも各市町村に教育委員会が存在するため、日本の市

町村（及び教育委員会）の状況からアメリカの学区（及び教育委員会）を類推しがちであるが、アメリカの各学区は財源をもつため（豊かな学区と貧しい学区が必然的に存在している）、学区ごとの独立性が高く、近隣でも異なった政策を実施しているので注意が必要である。つまり、アメリカの教育制度は、州および学区によって異なっているという特徴がある。そうした点を前提としてアメリカの学校教育制度を示したものが、以下の図1-1である。

図1-1 アメリカ合衆国の学校系統図



出所) 文部科学省編『2003 諸外国の教育の動き』2004年。

比較的シンプルに示しているこの図1-1からでもさまざまなことがわかる。例えば、多様なアメリカの学校教育制度においても、初等・中等教育は12年間という点では一致していることである。アメリカでは義務教育段階でも飛び級や原級留置(留年)の措置は珍しくないが、教育制度上は、日本と同様、18歳で中等教育を終えることになる。そして中等教育終了後は、大学(学士課程)、大学院(修士・博士課程)へと接続していく。

ただし、初等・中等教育段階の12年間の区切り方は州（学区）によって多様であり、日本や東アジア諸国で一般的な6-3-3制は、アメリカでは多数派ではない。図1-1では、左から6-3-3制、6-6制、8-4制、4-4-4制の4パターンが示されているが、他にも6-2-4制、5-3-4制が存在している。特に、近年の動向を言えば5-3-4制が増加してきている²。したがって、高校に焦点を合わせれば、3年制と4年制が存在することになるが、ロサンゼルス統合学区では高校（公立）は4年制である。したがって、高大接続を考える際に重要となる学年は高校第4学年（第12学年）となる。ただし、AP科目は高校3年生（第11学年）でも多くが履修しており、AP試験も受けている。これはロサンゼルス統合学区だけの特徴ではなく、全国的な傾向である³。

また、アメリカでは、一般に高校1年生、2年生という呼び方よりも、第9学年生（the 9th grade）や第10学年生のように、第12学年までの通し番号で呼ばれることが多い。これは、人々の移動（引越し）が頻繁であり、地域により、あるいは同一地区でも公立と私立により教育段階の区切り方が異なっていることを考慮した言い方であると思われる。

さらに、図1-1では、義務教育段階を9年間として表示しているが、全米で統一されているわけではなく、9年間から12年間まで州によって異なっていることも注意が必要である。特に、小学校入学前の幼稚園（Kindergarten）の1年間を義務教育にしている州（学区）も存在している。ロサンゼルス統合学区（カリフォルニア州）の場合は最も長いケースであり、高校卒業まで、すなわち18歳までが義務教育段階である。ただし、近年では質保証の観点からカリフォルニア高校卒業試験（California High School Exit Examination）が実施されているため、義務教育段階であっても18歳になれば自動的に高校を卒業できるわけではなく、卒業に必要な230単位を満たしたうえでそのテストに合格していなければ高校を卒業することができない⁴。

（2）高校の年間カレンダー

アメリカの学校は、9月から新学期が始まり、翌年6月に年度が終了することも共通している。そして7月と8月は長い夏休みである。この夏休みは、生徒ばかりか、教員にとっても完全な休暇となり、その代わり給料が支払われないことが一般的である。ただし、ロサンゼルス統合学区の場合は、休暇期間でも給料が支払われている⁵。

そして、この9月から6月にかけての具体的な高校のカレンダーを示したものが表1-1である。この表は、ロサンゼルス統合学区のA高校（公立）の2006-07年度のものであり、アメリカの高校の授業日と休業日の概況を理解するのに役立つ。A高校では、日時が毎年多少前後するにしてもほぼこのカレンダーで運営されている。

まず、このA高校の2006年の新学期は9月5日から始まるが、一週間前の8月29日と30日が「事前登録日（新入生・在校生ともに登校して手続きを行う日）」となっている。したがって教員の1年の仕事の始まり、つまり事務作業や授業準備はこの日からということになる。

表 1-1 A 高校の年間カレンダー (2006-2007)

事前登録日	8月29, 30日
授業開始	9月5日
休講日	10月2日
復員軍人の日	11月10日
感謝祭休業	11月23, 24日
冬季休業	12月18日-1月5日
キング牧師誕生日	1月15日
生徒自由日	2月5日
春学期開始日	2月6日
大統領の日	2月19日
春季休業	4月2-6日
戦役将兵記念日	5月28日
授業最終日	6月21日

出所) A 高校で収集した資料より。

次に注目すべきことは、この表の新学期（秋学期）開始が9月5日であり、春学期開始が2月6日となっていることである。つまり、A 高校は2 学期制を採用していることを意味する。学期は学区で統一されているので学区内の他の高校でも同様である。そして、休業期間を差し引くと、各学期は19 週間の授業日で構成されていることもこの表から明らかになる。つまり、年間38 週ということになる。

また、毎週の授業日は月曜日から金曜日までであり、土曜日と日曜日が休業日となることも学区で統一されている。この表 1-1 に記されている「復員軍人の日」や「感謝祭」等は、国の祝日であり、この学区に限らずどの公立学校も休業日となる（私立学校の場合は必ずしも祝日／休業日になるとは限らない）。それ以外の休業日は、連続したものとして、「冬季休業」と「春季休業」がある。前者は、年末年始の重要な行事を含んでいるため19 日間に及ぶ比較的最長いものとなっている。後者は、前後の土曜日、日曜日を加えて9 日間の休業となっているが、秋学期での中休みとなる「冬季休業」と同様に、春学期も「春季休業」を設定することによって、生徒に「一息つかせる」という意味があるようである。

さらに、この表には示されていないが、年14 日間、具体的には火曜日の午後の教員研修のために学校全体で短縮授業になっている⁶。これはA 高校に限ったことではなくどの高校にも存在するものである。

3. アメリカの教育課程

(1) 選択制と単位制

アメリカの高校を訪問した際に、誰もが最初に感じる日本との大きな相違点は、「1年2組」というようなクラスが存在しないことである。代わりに、各教員がそれぞれの教室を自分の教室として管理し、そこで毎日授業準備や授業を実践している。教室の隅には教員自身の机やコンピュータ等も備え付けられ、答案の採点作業もここで行っている。日本のように職員室が存在しないため、教員は勤務時間のほとんどを自分の教室で過ごすことになる。

ロサンゼルス統合学区の規定では、教員は週 25 時間の授業を行うことが求められているため、授業時間が1日6時限の高校の場合、毎日5時限分の授業を行い、1時限は授業の準備等の時間に充てることになる⁷。授業時間になると、生徒が教員の教室で受講し、終了すると退出することになっている。つまり、教員ではなく、生徒が移動する方式である。

逆に言えば、生徒には日本のような自分達の教室がないため、空いた時間等は、カフェテリアで過ごすことが普通である。また、廊下に個人の荷物を保管できるロッカーが備え付けられているのもアメリカの高校の一般的な特徴である。そして、大学の講義のように生徒自身が授業を選択するため、教室が異学年の生徒で構成されることも珍しくない。クラスが存在しないことに由来する生徒への影響については、プラス面、マイナス面ともにあるが、これがアメリカの高校の大きな特徴の一つであると言えよう。

さらに重要な特徴として指摘できることは、生徒の学力差の問題である。義務教育段階ではない日本の高校は、何らかの選抜試験（入学試験）が存在しているため、各高校内の生徒の学力幅が比較的小さい。他方、アメリカの高校、特に義務教育段階であるロサンゼルス統合学区のような高校では、そうした何らかの選抜試験を経て生徒が入学しているわけではないので彼らの学力差が極めて大きいという特徴がある。また、生徒各人の希望進路も多様であり、就職希望者も大学進学希望者もともに在籍している。さらに大学進学希望者でも、志望大学はさまざまであり、生徒各人は志望校に見合ったレベルの学習をする必要がある。こうした理由からも、高校側は授業科目を選択制にしているのである。

生徒の授業科目の選択に関して重要な役割を果たすのが、各高校に複数勤務しているスクールカウンセラーである。日本の高校のようにクラス担任が存在しないアメリカの高校生にとって、スクールカウンセラーは、悩み事の相談相手という役割だけではなく、学業面を含めた、いわゆる「担任」の役割を担っている。B 高校のケースでみれば、カウンセラー1人が校内の生徒を100人から200人受け持ち（各カウンセラーには、アルファベット順に担当生徒が機械的に割り振られている）、彼らの履修状況をチェックしている。その理由は、彼らが本当に高校卒業や大学進学に必要な授業科目を履修しているかどうかをチェックする人がいないと、総単位数は満たしているにも関わらず卒業できないといったケースが出てくるからである。また多様な授業科目が提供される状況では、生徒各人のレベルにあった授業科目を履修しているかという問題も極めて重要である。同じ名称の科目であってもAやBといった異なるレベルが提供

されており、履修すべき科目を間違えることも考えられるからである。このため、B 高校では科目履修については、カウンセラーと事前に相談し、彼らの承認を得た上で履修することになっている⁸。また、定期的な面談以外にも、カウンセラーが、例えば学業不振の兆候が見られる生徒を発見すれば、その生徒を呼んで原因の究明と改善のためのアドバイスもしている。

このように、生徒自身の選択を基本とするアメリカの高校教育課程であるが、そもそも全米統一の教育課程は存在せず、州が教育課程についてガイドラインを示し、実質的には学区がそれを管理・承認していることもその特徴として挙げられる。したがって公立高校の場合、卒業に必要な単位数は学区ごとに異なり、ロサンゼルス統合学区の場合は、以下の表 1-2 のようになっている。

表 1-2 ロサンゼルス統合学区 高校卒業に必要な単位数

教科	高校卒業に必要な単位
社会 (A)	30 単位
英語 (B)	40 単位
数学 (C)	20 単位
実験科学 (D)	20 単位
外国語 (E)	なし
映像・舞台芸術 (F)	10 単位
応用技術	10 単位
選択 (G)	70 単位
体育	20 単位
保健	5 単位
ライフスキル	5 単位

出所) Los Angeles Unified School District (2003). 2003-2007 Graduation Requirements and Minimum College Admission “A-G” Requirements (部分) .

この表 1-2 のとおり、ロサンゼルス統合学区の場合、高校卒業に必要な総単位数は 230 単位である。ただし、卒業時までには 230 単位そろっていけばよいというわけではなく、第 9 学年の終了時には 55 単位、第 10 学年終了時に 110 単位、第 11 学年終了時には 170 単位を取得していなければ、原級留置（留年）させることになっている⁹。

卒業に関してもう一点注意が必要なことは、230 単位を満たすことに加えて、カリフォルニア高校卒業試験 (California High School Exit Examination) に合格する必要があることである。これは、高校卒業の質保証の観点から「英語 (国語)」と「数学」の基礎的な学力をみる試験であるが、第 10 学年で 1 回、第 11, 12 学年でそれぞれ 3 回の受験が可能である¹⁰。生徒

によっては第 10 学年の段階で早々と合格するケースも出てくるが、なかには第 12 学年での 3 回目の試験でも合格に達しない生徒も出てくる。この場合は、残念ながら卒業できないことになる。

そしてこの表 1-2 のとおり、教科の領域を 11 に分けてそれぞれ必要単位数を設けていることも注目に値する。また、この表をみれば明らかなように、「外国語」が卒業単位としては設けられていないことは日本と大きく異なっている。つまり高校卒業のためだけであれば「外国語」を学ぶ必要がないことになる。ただし、後述するとおり、大学進学との関係で「外国語」は履修しておく必要があるので、実際には多くの生徒が「外国語」も学習している。この点に関連して、教科のなかには (A) とか (B) が付せられているものがあるが、これらのアルファベットは、大学進学の際に必要なってくる教科領域であることを意味する。この点も後述するが、一言で言えば、「応用技術」や「体育」は高校卒業のためには必要であるが、大学進学にあたっては、高校時代の成績平均点 (Grade Point Average: GPA) のなかには含まれないのである¹¹。

教科についてみると、「社会」のなかの具体的な科目として、A 高校の場合、「世界史」、「アメリカ史」、「地理」、「アメリカ民主主義の原理」等 13 科目も提供されている¹²。また、「実験科学」とは日本の「理科」に相当し、具体的な科目としては、「生物」、「地学」、「化学」、「物理」等であり、日本と大差ない。「映像・舞台芸術」はユニークな教科と言えるが、具体的な科目をみると、「デザイン」、「美術」、「フィルム」、「ピアノ」、「ギター」、「演劇」等、日本よりもかなり多様な芸術を選択できるようである。「応用技術」とは「写真」、「デザイン」、「ワープロ」等、コンピュータと関係したものが多く、ここには「自動車整備」や「木工」も含まれている。この教科もかなり多彩であることがわかる。また、「ライフスキル」は「保健」に近く、社会生活上知っておくべきことを学ぶ教科となっている。

さらに、単位数に注目すると、教科としては 40 単位を必要とする「英語 (国語)」が最も重視されていることがわかる。マイノリティが「多数」を占める学校が多いロサンゼルス統合学区において、「英語」重視の姿勢がこの点からも見て取れる。上述したとおり、その一方で「外国語」は卒業単位には含まれていないという点も興味深い。また、「英語 (国語)」に比して「数学」の単位がわずか 20 単位であり、この数字は決して多いものではない。

また、選択制を反映して、「選択」領域が 70 単位も占められていることもその特徴として指摘できる。後述するとおり、大学進学を希望する生徒にとっては、そのための履修条件を満たす必要があり、実際は「英語」や「数学」等を履修することになるが、その一方で、多様な進路希望と多様な学力の生徒が在籍する義務教育段階の高校の場合、この「選択」の単位を「映像・舞台芸術」、「応用技術」や「体育」教科のなかの科目で満たす生徒もいる。もちろん卒業するためには表 1-2 の単位基準を満たしていればどんな科目を選択してもよいのであり、実際には、スクールカウンセラーと将来の進路や本人の学業成績をもとに相談しながら具体的な科目を選択していくことになるのである。

(2) 大学進学のための履修要件

既述のとおり、アメリカの高校教育課程の特徴の一つとして指摘できることは、選択制が基本であるということである。ただし、完全な自由選択制ではなく、高校卒業のためには、各教科で求められる単位数をそれぞれ満たしていかなければならないこともみてきた。この点に関連して、大学進学のためには、この卒業要件とは別に大学側が求める要件も満たしておかなければならないことも注意が必要である。つまり、これは大学に出願するための前提条件となる

表 1-3 大学進学のための系列別履修要件

教科	カリフォルニア大学系列
社会 (A)	2年間履修 (「世界史」 or 「アメリカ史」 or 「アメリカ民主主義の原理」) 4年間履修 (「大学準備英語」も含む) 3年間履修 (「代数1」, 「幾何」, 「代数2」, より多くの履修を推奨) 2年間履修 (より多くの履修を奨励) 2年間同一言語履修 (より多くの履修を奨励) 同じ領域で2セメスター履修 数, 芸, 英, 科, 外, 社のうち上級コース1年間以上の履修
英語 (B)	
数学 (C)	
実験科学 (D)	
外国語 (E)	
映像・舞台芸術 (F)	
選択 (G)	
教科	カリフォルニア州立大学系列
社会 (A)	2年間履修 (「世界史」 or 「アメリカ史」 or 「アメリカ民主主義の原理」) 4年間履修 (「大学準備英語」も含む) 3年間履修 (「代数1」, 「幾何」, 「代数2」, より多くの履修を推奨) 2年間履修 (より多くの履修を奨励) 2年間同一言語履修 同じ領域で2セメスター履修 数, 芸, 英, 科, 外, 社のうち上級コース1年間の履修
英語 (B)	
数学 (C)	
実験科学 (D)	
外国語 (E)	
映像・舞台芸術 (F)	
選択 (G)	
教科	私立大学系列
社会 (A)	「世界史」, 「アメリカ民主主義の原理」, 大学準備選択科目受講を奨励 4年間履修 (「大学準備英語」も含む) 毎年「大学準備数学」の履修 3年間から4年間の履修 3年間から4年間の履修 選択科目として扱う 関心のある分野の大学準備選択科目
英語 (B)	
数学 (C)	
実験科学 (D)	
外国語 (E)	
映像・舞台芸術 (F)	
選択 (G)	

出所) Los Angeles Unified School District (2003). 2003-2007 Graduation Requirements and Minimum College Admission "A-G" Requirements (部分).

ものであり、表 1-3 はロサンゼルス統合学区のあるカリフォルニア州の大学進学のための要件を示したものである。

周知のとおり、カリフォルニア州の高等教育（公立）は 3 タイプ、すなわち大学院教育に力を入れるカリフォルニア大学（University of California: UC）系列、学部教育に力を入れるカリフォルニア州立大学（California State University）系列、地域住民に広く門戸を開いた 2 年制のコミュニティカレッジ（Community College）系列に分類されている。そして私立大学も博士課程に力を入れる大学から 2 年制の大学まで多種多様であるが、州の管轄外という意味で 1 つの系列と考えれば、合計 4 つの系列に分けられる。表 1-3 は、そのうちの 3 つの系列についての履修要件を示したものである。なお、この表に示されていないコミュニティカレッジの場合は、18 歳以上もしくは高校卒業、もしくは高卒資格があれば入学できることになっている。したがって、実質的に履修要件はないことになる。

上記表の教科については、表 1-1 の場合と基本的に同じであるが、教科として記されているのは、アルファベット（A）から（G）のついたものだけであり、「体育」や「保健」は含まれていない。大学入学者選抜では高校での成績証明書も重要な判断材料となるが、その中心は成績平均点（Grade Point Average: GPA）である。この場合の平均点は、（A）領域から（G）領域教科の平均点となる。つまり、高校卒業に必要なであった「体育」や「保健」の成績とは無関係であることになる¹³。

高校卒業のための必要単位数とは異なり、大学進学のための履修要件に関しては、「英語 4 年間の履修」、「数学 3 年間の履修」のように多くの履修を求めていることがわかる。つまり、大学進学を目指す生徒は、こちらの大学進学要件を考慮しながら科目を履修していくことになる。高校卒業要件のなかにあつた「選択科目」の領域も自由選択というよりは、実際はほとんどが「大学準備選択科目」や「上級コース」で埋められることになる。したがって、高校卒業要件の（A）から（G）の教科については、大学進学のための履修要件を満たす過程で自然に単位が満たされることになる。表 1-3 の履修要件を見る限り、「数学」は毎年「大学準備数学」の履修を求め、「実験科学」や「外国語」も 3 年間から 4 年間の履修を求めていることから明らかにおり、3 つの系列で一番要求が高いのは「私立大学」となっている。

「カリフォルニア大学系列」は、日本でも良く知られたカリフォルニア大学バークレー校（University of California Berkeley）やカリフォルニア大学ロサンゼルス校（University of California Los Angeles）等、博士課程を有するいわゆる研究大学である。その一方で、「カリフォルニア州立大学系列」とは、カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校（California State University Los Angeles）等、多くは修士課程まで有するが、学部教育中心の 4 年制大学である。したがって、履修要件を見た場合、例えば「外国語」で、より多くの履修を奨励しているのは「カリフォルニア大学系列」であることがわかる。

しかしながら、こうした履修要件を満たした生徒全員が希望の大学に進学できるわけではないことも注意が必要である。出願にあたっては、履修状況を示した成績証明書に加えて、日本

でも比較的知られた適性試験である SAT (Scholastic Assessment Test) もしくは ACT (American College Test) の成績が必要である。SAT には I と II があり、I は思考力テストで「批判的思考力」、「ライティング」、「数学」から構成され、II はいわゆる科目テストで 20 科目のなかから大学側が指定するものを受験することになる。一方、ACT は「英語」、「数学」、「リーディング」、そして「理科」の 4 つの領域 (2005 年からライティング試験がオプションとして加わる) で構成される選択式試験である。これらの適性試験には長い歴史があり、研究開発も進んでいるため、それぞれの標準化された点数を互換できる仕組みが整っており、大学側も出願にあたっての要求点を示している。例えば、「カリフォルニア大学系列」では、SAT I もしくは ACT と 3 つの SAT II テストの結果を求めている。「カリフォルニア州立大学系列」の場合は、SAT I もしくは ACT だけを提出すればよく、後者はオプションとなっている。この点でも、「カリフォルニア大学系列」の方が、ハードルが高いことがわかる。

そして大学側は、この SAT I や ACT の点数を、高校の GPA ((A) から (G) 領域) と連動させることによって基準点を設定している。カリフォルニア州の公立大学の場合、州民と非州民では入学基準が異なっているが (当然のことながら非州民の方が高く設定されている)、例えば、「カリフォルニア大学系列」では、GPA が 2.80-2.84 の生徒は、SAT の総合点が 4640¹⁴以上必要であることが示されている (GPA 2.80 未満の生徒は SAT 試験結果に関わらず出願資格なし)。SAT ではなく、ACT 受験者の場合も同様に基準点が設けられている。逆に GPA が高く 3.45-3.49 の生徒は、SAT の総合点が 3128 点あれば出願できることになる¹⁵。一方、「カリフォルニア州立大学系列」の場合、GPA 2.0 未満の生徒は同様に出願資格がないことが示されており、SAT の総合点も、上記の「カリフォルニア大学系列」とは異なった算出方法で行っている¹⁶。

そして重要なことは、これらの高校での履修要件、GPA、SAT 等の成績は、大学入学のための必要条件であっても十分条件ではないことである。特に有名大学に進学を希望する生徒は、これら以外にも、優秀さを示す特記事項が必要になる。スポーツや生徒会活動等において顕著な成績を残しているとか、学業面でのコンテストで入賞等があれば大学入学に有利に働くことになる。ただし、多くの生徒がそのようなコンテストに参加できるわけではないため、高校での履修において、上級コースをより多く履修し、高い学力を有していることを示すことも効果的である。そして、それが AP プログラムと大きく関係することになる。

AP 科目は、大学 1-2 年次レベルの水準であり、その科目を履修していることは、すでに大学で教育を受けられる学力水準であることを証明することになる。また、その AP 試験に合格していることは、大学の単位をすでに高校段階で取得したことを意味し、生徒にとっても来たる大学生活において好スタートを切れることを意味する。つまり、大学入学許可に関しても、入学後の単位取得に関しても、AP プログラムは二重の意味で有用なのである。近年、AP プログラムが全米各地で普及し、拡大しているのは以上のような理由による (この点に関しては第 2 章で詳述する)。

(3) 高大接続

AP プログラムは、同一高校内にさまざまな学力の生徒が在籍し、選択制を基本とする教育環境下において、優秀な高校生に大学レベルの授業を提供することを意図したものである。これは、一般に高大接続の一方策であり、高校と大学の教育課程をいかにスムーズに接続させるのかという課題への一つの解決策を示していると言える。こうした取り組みは、もちろん AP プログラムだけではなく、何種類も存在している。

例えば、AP プログラムと同様に、主に優秀な生徒に対するプログラムとしては、国際バカロレア (International Baccalaureate : IB) がある。スイスに本部を置く国際バカロレア機構が授与するディプロマは、大学入学資格として国際的通用度も高く、国際学校を中心に日本でも IB 用の授業が実践されている。このディプロマプログラムに参加するアメリカの生徒数は、2008 年に 4 万 9,091 人を記録し、近年増加傾向がみられる¹⁷。

一方、職業技術教育コースの高大接続を目指したプログラムとしては、テク・プレップ (Tech Prep) がある。これは、キャリア準備教育の一形式であり、この方面の高校で提供される授業科目を履修することによって、高校とコミュニティカレッジの二重の単位を取得することができるものである。2005-06 年度で 1 万 7,000 人以上の高校生が参加している¹⁸。

さらに、州レベルでも同様のプログラムが実施されている。例えば、ワシントン州のランニング・スタート (Running Start) プログラムとカレッジ・イン・ザ・ハイスクール (College in the High School) プログラムが挙げられる¹⁹。前者は、高校生が主にコミュニティカレッジで開講される授業科目を履修し、それによって高校と大学の単位を取得できるプログラムである。2006-07 年度において、1 万 6,540 人が同プログラムに参加しているという。また、後者は、授業が高校で行われることや大学の単位として認定されるという点で AP プログラムに近い。このプログラムを推進しているのは、全米二重登録パートナーシップ連合 (The National Alliance of Concurrent Enrollment Partnership: NACEP) であるが、ワシントン州等で普及しつつある段階であり、まだ全米レベルには至っていない。

AP プログラムは、大学レベルの授業を高校で行い、試験で一定以上の成績を収めれば大学の単位として認定されるという点で、上述のプログラムと似ている部分が多いが、その開始は 1955 年と最も歴史のあるプログラムである。また、年間の受験者は、2005-06 年度において 130 万人以上と他のプログラムと比べて群を抜いている。したがって、現在、教育課程の高大接続を考える場合、その代表として AP プログラムが取り上げられるのは根拠のあることなのである。

4. AP プログラムの目的と管理

(1) AP プログラムの目的

高大接続 (連携) 事業は日本でも近年盛んに実施され、高校生が大学で講義を受けたり、大学の教員が高校で講演をしたりしているが、部分的かつ単発的なレベルの域を超えていないと

いう問題を依然として抱えている²⁰。そうした観点からみれば、50年以上の歴史を有し、全米に普及した AP プログラムは、その授業が高校で行われ、成績評価はカレッジボード、単位認定は大学が行うという点で、高大連携を考える場合、非常に興味深いプログラムであると言える。

そもそもこの AP プログラムは、フォード財団による教育振興基金 (Found for the Advancement of Education) の援助のもと 1950 年代初頭に開始された二つの研究から始まったものである²¹。

一つは「一般教育に関する高校と大学の研究 (School and College Study of General Education)」である。この研究は、アンドーバー (Andover Academy)、エクスター (Exeter Academy)、ローレンスビル (Lawrenceville Academy) の高校 3 校と、ハーバード (Harvard University)、プリンストン (Princeton University)、イエール (Yale University) の大学 3 校によって進められたが、高校後半の 2 年間と大学前半の 2 年間の教育課程について学習内容が重複しており、時間の浪費と生徒の士気低下を問題点として指摘した²²。また、高校 4 年生 (第 12 学年) が大学教育レベルの学習をすることができるようにカリキュラムを調整し、さらに到達度テストで好成績をあげた生徒については、大学での飛び級を可能にすることも勧告している。この研究会に参加したメンバーの校名から明らかなように、彼らは学力の高い生徒の士気を維持させ、学力をさらに高めることに主たる関心があったことがわかる。特に有名大学にとっては、学力の高い生徒が大学での学習準備が整った状態で入学することが理想であり、そのための方策として大学レベルの内容を先取りして学習させることによって知的意欲を低下させないようにすることは望ましいと考えていたのである。

もう一つは「優等生の入学許可に関する高校と大学の研究 (School and College Study of Admission with Advanced Standing)」である。この研究は、高校 12 校と大学 12 校の代表者からなる委員会によって進められたが、オハイオ州にあるケニオン大学 (Kenyon College) がその中心となったので、その提言はケニオン・プラン (Kenyon Plan) と呼ばれている²³。このケニオン・プランも前者の研究と同様に、アメリカの教育制度は学力優秀な生徒の時間を浪費していると指摘し、高校において大学レベルのカリキュラムを開発する必要性を主張した。その後の 1952 年にケニオン・プランのもとで高校 7 校を対象とし、11 科目について AP プログラムを試行した²⁴。こちらの研究も学力の高い生徒に関心を示しているが、特に高大接続問題、つまり高校の教育課程と大学の一般教育レベル課程の連続性に強い関心を示し、課程上の重なりをできるだけ無くそうとした取り組みであったことがわかる。

こうした研究の結果誕生した AP プログラムは、高校における学習内容と大学のそれとの重複を避け、また意欲のある優秀な高校生に対して出来るだけ早い段階でその能力に合ったレベルを学習できるように、高校と大学は連携するべきであるという結論に達したことから生まれたものであった。したがって、同プログラムの対象は優秀な高校生であったことは確認しておく必要がある。余力のある高校生が大学の一般教育レベルの学習をすることは、彼らにとって

時間の有効的な活用であり、大学で本格的に授業を受けるための準備段階にもなる。つまり、AP プログラムは優秀な高校生を対象とした、高校と大学の接続関係を改善するための方策に他ならないのである²⁵。また、二つの研究が高校と大学の協力によって進められたということは注目すべきことである。生徒の能力に応じた教育の実現を目指すには高校教育、あるいは大学教育のいずれか一方から論ずるべきではなく、双方の課程を柔軟にとらえることが必要だからである。

以上の二つのプロジェクトや実験の結果を受けて、1955 年からカレッジボード (College Board : 正式名称は The College Entrance Examination Board) が、AP 試験を開始した。そしてさまざまな部分的改革はありながらも、基本的な仕組みを維持して現在まで継続して実施されてきている。しかも、現在毎年 100 万人の高校生、すなわち 6% の高校生が一つ以上の AP 科目を受講し、約 1 万 5,000 校、すなわち約 60% の高校が一つ以上の AP 科目を提供しているほど全米の学校に浸透してきているのである。

(2) カレッジボード

こうした AP プログラムを管理運営しているのは、カレッジボードという民間の非営利団体である。この団体は、さまざまな民間財団の財政支援を受けながらニューヨーク、ワシントン DC、そしてバージニア州のレストン (Reston) にメインオフィスを構え、全米の各地域に 6 つの地域オフィスがある²⁶。

カレッジボードは 1900 年に設置され 100 年以上の歴史を有しているが、その設置目的は、大学への共通入学試験をつくることにあった。それは、19 世紀後半、南北戦争後のアメリカでは、大学入学基準の設定について論争が続いてきたためである²⁷。こうした論争の過程で標準テストの導入が検討され、その管理責任者としてカレッジボードが設置されたのである。したがって、このカレッジボードは現在さまざまな事業を行っているが、最も知られているものは大学入学者選抜に活用される SAT 試験の管理運営であることは言うまでもない。このテストの受験者は、毎秋、冬、春のテストに年 100 万人を越えるほどの大規模なものである。

ただし、試験の参加者数という点で見れば、SAT よりも大規模なものが AP 試験である。2005 - 06 年度において試験の参加者 (ただし延べ人数) は約 230 万人であり、SAT の倍以上となる。この数字が示すとおり、AP プログラムは、授業を実践する多数の高校を巻き込み、またその試験結果を単位認定する大学にも多大な影響を与えているという点で、SAT 同様こちらもカレッジボードの重要な事業の一つであると言える。

また、同種の試験という点で、大学レベル試験プログラム (College Level Examination Program : CLEP) も重要である。試験結果により大学の単位が取得できるという点では AP プログラムと似ているが、これは社会人や以前大学生であった者が、大学に (再) 入学する際に、学部教育段階での自分の学力レベルを明らかにすることを目的とするテストである。大学教育をあらゆる人々に開放し、しかもアクセスしやすくするという点で非常に重要なテストで

あると言える。

さらに、大学進学者への財政援助に関連したテストにもカレッジボードは関わっている²⁸。全国奨学金資格者試験（Preliminary SAT/National Merit Scholarship Qualifying Test [PSAT/NMSQT]）は、この奨学金を希望する生徒のためのテストであり、これを希望する生徒の受験を義務付けている。

このようにさまざまな事業を実施しているカレッジボードであるが、その重要事項は高校や大学等の教員やアドミニストレーターで構成された理事会が決定している。カレッジボードの会員は、1900年の発足当初12大学にすぎなかったが、1世紀経過した現在では約3,900の学校や大学が会員として名を連ねている。入会には理事会での承認を必要とするが、この会員は大きく3種類に分けられる。圧倒的多数を占める第一のタイプは高校や大学等の機関であり、第二のタイプは高等教育機関を束ねている大学システム、第三のタイプはそれ以外の教育関連団体である。会員として求められる基準がタイプごとに異なり、当然のこととして高校や大学にはSATやAPプログラムの積極的利用が求められている。

さらに、大学進学を目指す高校生が大学選びのために参照する『大学ガイド（College Handbook）』もカレッジボードから発行されている。こちらも、大学に関する情報提供というカレッジボード事業の一つであるが、特に最近では、インターネットでの情報発信にも力を入れてきているため、ネット上でサービスを受けられるようになっている。いずれにせよ、カレッジボードは、毎年700万人の生徒とその保護者、2万3,000の高校、3,500の大学に対して、さまざまなプログラムを通して支援を行っている²⁹。この数字が示すとおり、カレッジボードは高校と大学の接続の領域で極めて重要な役割を果たしている団体であると言えるのである。

5. おわりに

以上本章では、APプログラムを理解する上で必要となるアメリカの高校教育の概要について、主にロサンゼルス統合学区を事例として具体的に説明してきた。また、APプログラムの管理団体であるカレッジボードについても概要を述べてきた。

日米の高校には当然のことながらさまざまな差異が存在するが、APプログラムとの関係で重要な相違点は、高校が3年制ではなく4年制であり、高大接続の一方策であるAPプログラムと直接関係する学年は4年生（第12学年）であることは注意しておく必要がある。

学期もセメスター制が多く、ロサンゼルス統合学区の場合、1セメスターは19週であることが明らかになった。もちろん、学校にはさまざまな行事があるので、19週全てが授業時間というわけではないにしても、それに近い数字が実際の授業週となろう。

また、アメリカの高校は、大学と同様、1年2組というようなクラスが存在せず、生徒各人が授業を選択していくという選択制を基本としている。そして、ロサンゼルス統合学区のように高校卒業までが義務教育段階である場合、公立学校内には学力的に多様な生徒が在籍し、選

択制にせざるを得ないという問題も抱えている。

いずれにせよ、AP 科目はこうした選択科目の一つとして位置づけられていることになる。ただ、受講を希望する生徒がみなこの AP 科目を受けられるわけではなく、カウンセラーとの相談によって許可を受けた者だけが受けられるようになっている。一般的に言えるのは、学業成績が芳しくない場合受講は許可されない。したがって、生徒が AP 科目を履修していることは、その生徒は高校での成績が良好であることを示している。近年の履修者増加には、大学入学選抜においてその履修歴が有利に働いていることがその一つの要因として挙げられる。いずれにせよ、毎年延べ 230 万人が AP 試験を受けている（AP 科目履修のみの生徒数を加えれば、その数はさらに増加する）ことに鑑みれば、高校生にとって AP プログラムはもはや特別な存在ではなくなりつつある。AP プログラムの導入経緯をみれば明らかなおと、元来学力優秀な一部の生徒だけを対象にしたプログラムであったにも関わらず、現在ではかなり拡大していると言える。どのように AP プログラムが拡大してきたのかについては、次章で明らかにしていくことにしたい。

【注】

- 1 アメリカでの後期中等教育段階（主として第 9 学年から第 12 学年まで）の学校名称は、必ずしも〇〇High School で統一されているわけではなく、アカデミー（Academy）やラーニングセンター（Learning Center）、さらに単にスクール（School）等、多種多様である。したがって、当該学校が第 1 学年から第 12 学年のうちどの学年の生徒を教育する機関であるのかをまずは確認する必要がある。本書では、日本人に一番馴染みがあるという理由から、第 9 学年から第 12 学年を対象とする学校の名称を、ハイスクールとカタカナ表記せずに、高校（High School）に統一することにする。
- 2 文部科学省編『2003 諸外国の教育の動き』2004 年。
- 3 College Board (2008). *The 4th Annual AP Report to the Nation*. このレポートでの表をみると、多くは第 11 学年、第 12 学年で AP 試験を受験しているが、第 10 学年にも、甚だしくは第 9 学年でも受験している生徒がいることがわかる。
- 4 B High School (2004). *2004-2005 Student Handbook*.
- 5 B 高校で収集した資料より。
- 6 A 高校で収集した資料より。
- 7 C 高校での校長とのインタビューより。
- 8 B High School (2004). *2004-2005 Student Handbook*.
- 9 Los Angeles Unified School District (2006). *Model of High School Student's Schedule to Meet Graduation Requirements*.
- 10 B High School (2004). *2004-2005 Student Handbook*.
- 11 Ibid.
- 12 A 高校で収集した資料より。
- 13 B High School (2004). *2004-2005 Student Handbook*.

- 14 ただし、この 4640 という数字は SAT の合計点そのものではなく、大学側の計算式（いわゆる傾斜配点）に基づいて算出された点数である。（B High School (2004). *2004-2005 Student Handbook.*）
- 15 Ibid.
- 16 Ibid.
- 17 International Baccalaureate Organization (2008). The International Baccalaureate North America.
<http://www.ibo.org/ibna/actionkits/documents/Introduction_001.pdf>
- 18 河合久「第 9 章 ワシントン州における高大接続プログラム」『今後の後期中等教育の在り方に関する研究』国立教育政策研究所，2007 年，391 頁。
- 19 同上，391－394 頁。
- 20 勝野源頼彦『高大連携とは何か』学事出版，2004 年。
- 21 College Board (2008). The History of the AP Program.
<<http://apcentral.collegeboard.com/apc/public/program/history/8019.html>>
- 22 Ibid.
- 23 川口仁志「米国のアドバンスト・プレースメント・プログラム」『日本比較教育学会紀要』10 号，1984 年，96 頁。
- 24 College Board (2008). The History of the AP Program.
<<http://apcentral.collegeboard.com/apc/public/program/history/8019.html>>
- 25 川口仁志「米国のアドバンスト・プレースメント・プログラム」『日本比較教育学会紀要』10 号，1984 年，100 頁。
- 26 College Board (2008). Office.
<<http://www.collegeboard.com/about/association/offices.html>>
- 27 Brubacher, J.S and Rudy, B. W. (1997). *Higher Education in Transition*. Transaction Publishers. pp.241-263.
- 28 College Board (2008). About Us.
<<http://www.collegeboard.com/about/index.html>>
- 29 Ibid.

第2章 APプログラムの発展と支援

小野寺 香
(東北大学)

1. はじめに

第1章で言及したとおり、APプログラムは一部の優秀な高校生を対象として、彼らの円滑な高大接続を促すことを目的としていた。したがって、カレッジボードがAPプログラムを開始した当初、同プログラムに参加していたのは成績優秀な一部の高校生のみであったと言える。その後このプログラムは、全米各地に順調に普及し、多くの高校が同プログラムに参加するようになっていく。さらに、APプログラムの開始からおおよそ50年を経た現在では、実際極めて多くの生徒が参加している。

APプログラムが拡大していくことは、より多くの高校生が同プログラムにアクセスできることを意味し、プログラムの「民主化」として肯定的に評価できよう。しかしながら、あくまで成績優秀な一部の生徒を対象としたプログラムであるという同プログラムの本来の趣旨を考慮すれば、この拡大を手放しで喜ぶこともできないであろう。実際、APプログラムの質の低下といった問題もしばしば指摘されている。

このようにさまざまな可能性と問題点を抱えているAPプログラムであるが、拡大もしくは普及という方向で発展してきたことは疑いのない事実である。本章ではこうしたAPプログラムの拡大面に焦点をあて、その開始から現在に至るまで、特にその参加者数と科目数の推移から拡大の概況を具体的な数字を通して明らかにする。もちろんAPプログラムが拡大してきた背景には、履修希望者の増加といった生徒側の要因もあるが、管理者であるカレッジボードや連邦政府等の長期にわたる拡大支援策も重要な要因とも言える。この点についても具体的に言及することにした。

2. APプログラム参加者の増加

(1) 参加者数の推移

第1章で言及したとおり、高校と大学の接続について検討したケニオン・プランのもとでAPプログラムの試行が終了すると、カレッジボードは1955年に同プログラムの運営を本格的に開始した。当初それは学業が優秀な一部の高校生のみを対象としていたが、その後プログラムへ参加する生徒数は増加の一途をたどり、APプログラムは現在に至るおおよそ50年間に著しい発展を遂げてきている。

APプログラムの発展については、AP試験に参加する高校数、AP試験の受験者数、そしてAP試験の成績に応じて単位認定等を行う大学数の劇的な増加から見る事ができる。以下の表2-1はこれらを示したものである。

表2-1 AP試験参加数

年度	高校数	生徒数	受験者数	大学数
1955-56	104	1,229	2,199	130
1960-61	1,126	13,283	17,603	617
1965-66	2,518	38,178	50,104	1,076
1970-71	3,342	57,850	74,409	1,382
1975-76	3,937	75,651	98,898	1,580
1980-81	5,253	133,702	178,159	1,955
1985-86	7,201	231,378	319,224	2,125
1990-91	9,786	359,120	535,186	2,587
1995-96	11,712	537,428	843,423	2,895
2000-01	13,680	844,741	1,414,387	3,199
2005-06	16,000	1,339,282	2,312,611	3,638

出所) College Board (2008). Annual AP Program Participation 1956-2007.

<http://apcentral.collegeboard.com/apc/public/repository/2007_Annual_Participation.pdf>

をもとに筆者作成。

この表2-1は、AP科目ではなくAP試験を基準に示した数字であり、その試験に参加した「高校数」、AP試験に参加した「生徒数」とAP試験の「受験者数」、AP試験の結果を単位として認定する「大学数」をそれぞれ5年ごとに示したものである。生徒1人が複数科目のAP試験を受験する場合は珍しくないため、「生徒数」より「受験者数」が多くなっている。言い換えれば、「受験者数」は延べ「生徒数」である。

上記表2-1から、まず各項目の数字の伸びが極めて大きくなっていることがその特徴として挙げられる。「生徒数」に関しては、APプログラムが開始された「1955-56」年度にはわずか1,229人であったが、その数は年々増加し続け、「1980-81」年度までには10万人を超えた。また、その5年後の「1985-86」年度にはさらに約10万人増加し、20万人を超えている。しかも、その後も「生徒数」は増え続けており、「1995-96」年度には50万人を超え、「2005-06」年度までに100万人をも上回ってきている。

一方、AP試験への参加「高校数」の増加も著しい。「1955-56」年度にわずか104校であったが、5年後にはおよそ10倍の1,126校まで増加している。さらに、その5年後の「1965

—66」年度には2,518校となり、5年間でAP試験に参加した「高校数」は2倍以上増加している。そして、早くも「1995—96」年度までにその数は大台の1万校をも超えてきているのである。

さらに、高校側だけではなく、AP試験の成績に基づいて大学の単位として認定する「大学数」も同様に増加してきた。「1955—56」年の時点ではわずか130校のみであった「大学数」が、10年後の「1965—66」年度には早くも1,000校を超えている。そして、その後もAP試験の成績に基づいて単位認定等を行なう「大学数」は着々と増加し続け、20年後の「1985—86」年度には2,000校、さらにその15年後の「2000—01」年度には3,000校を超え、「2005—06」年度の3,600校にまで至っている。この数字は、約4,000校と言われるアメリカの大学数からすれば、そのうちの約9割がAP試験結果に基づいて単位認定等を行っていることを意味する。この点でAPプログラムは高校側だけではなく、大学側への普及も著しいと言える。

このようにAPプログラムは、当初ごく少数の高校と大学から出発しながらも、著しい拡大を遂げてきている。そして、その過程で全米レベルのプログラムへと発展してきたのである。さらに、現在もAPプログラムの参加者は増加し続けており、今後それがどこまで増えるのか注目に値する¹。

(2) ホームスクールとAPプログラム

APプログラムへ参加する生徒の人数がこれまで飛躍的に増加してきたことは、すでに表2-1で示したが、それに伴って新しいタイプの高校生がプログラムに参加してきていることも注目に値する。表2-2は、高校のタイプ別にAP試験受験者数の推移を2000年と2005年とで比較したものである。アメリカでは高校を分類する際、思想・信条の自由と学校教育が争点化することがあるため、「宗教系」を「私立」から独立させて分類することがしばしばみられるが、表2-2もそれに従ったものである。また一般に少数であるために高校の分類に登場してこないのが「ホームスクール」であるが、それでも近年増加率が顕著ということで表では分類されている。この「ホームスクール」は、主に思想・信条的な理由から既存の学校への通学を拒否し、家庭を「学校」とする教育形態である²。こうした教育形態を正規の学校教育と同等に扱うことが可能かどうかについて、また親を「教員」とする点から教員の質に関して、さらに学区の教育課程に従っているとは限らないという点から教育内容の質保証に関して裁判でも争われてきたが、現在多くの州でこの教育形態を正規の学校教育と同等に扱い、公的支援も行われてきている³。

表2-2から明らかなのは、学校のタイプに関わらずAP試験を受験する生徒の数は2000年から2005年にかけて増加していることである。「公立」高校において2000年にAP試験を受験した生徒の数は約102万人であったのが、2005年には約176万人まで増加しており、「公立」高校において顕著なAPプログラムの拡大が見て取れる。ただし、増加の割合という点からすれば「ホームスクール」の方がさらに著しい。2000年にAP試験を受験した「ホームスク

ール」の生徒はわずか410人であったが、2005年にはおよそ3倍となる1,282人にまで増加しているのである。

表2-2 高校のタイプ別にみたAP試験受験者数の推移

高校のタイプ	AP試験を受験した生徒の数	
	2000年	2005年
公立	1,020,015	1,759,296
私立	133,516	176,324
宗教系	71,353	112,835
ホームスクール	410	1,282
その他/無記入	17,028	15,308

出所) *Education Week*, April 26, 2006. More Home Schoolers Taking Advanced Placement Tests.

このようにAP試験を受ける「ホームスクール」の生徒数が増加した主たる要因は、自分達の優秀性を全米共通試験であるAP試験の成績で示すことによって、特に選抜性の高い大学への入学の可能性を高めようと試みていることが挙げられる。「ホームスクール」の生徒は、SAT等の成績を提出することになるにしても、当然のことながらGPAに直接関係する高校での成績証明書を持たない。そのため、彼らが学業面で優れているということをSAT以外で証明するものをもつことは、それだけ大学入学者選抜の際に有利に働くのである⁴。

もう一つの増加要因としては、「ホームスクール」の生徒がAP科目を履修できるような環境が整備されてきたことが挙げられる。AP科目は基本的に高校で行われているため、ホームスクールの生徒がAP試験に向けてその準備学習をしたいと考える場合、AP科目の時間だけ高校に出向く必要がある。ただし、学校での教育を拒否している「ホームスクール」の生徒にとって、これはかなり受け入れ難い問題である。こうした状況の「救世主」となったのが、近年インターネットの普及とともに登場したオンラインコースである。自らもホームスクールを行っているリッチマン夫妻(Susan & Howard Richman)が運営するPAホームスクーラーズ(PA Homeschoolers)は、オンラインコースの利便性を生かして、近年同ホームスクーラーズへの登録者数を急速に伸ばしてきている⁵。そのため、実数は非常に少数であるにしても、ホームスクールの生徒のAP試験受験者数は今後さらに増加していくと考えられる。

(3) オンラインAP科目

もちろん、時間と場所に制限のないオンラインコースの対象がホームスクールの生徒に限定される必要はない。学校に在籍している生徒であっても、学校で開講されていないAP科目の

学習のために、あるいは学校で履修している AP 科目の理解をさらに深めるためにオンライン AP 科目を利用したいと考えても不思議ではない⁶。10 年ほど前までは、ワシントン州シアトルに本社のあるアペックスラーニング (Apex Learning) 社がこの分野を独占していたが、5 年ほど前からオンライン AP 科目の市場は、営利団体と非営利団体をともに巻き込んでかなり成長してきている⁷。

例えば、遠隔地教育で有名なウィスコンシン大学マディソン校は、学区と共同でウィスコンシン AP 遠隔教育コンソーシアム (Wisconsin Advanced Placement Distance Learning Consortium) を設け、州内の高校生が AP 科目を履修することを促している。同州の高校では、AP 科目が提供されていたとしてもその科目数は 1 つか 2 つである学校が多く、また全体の 4 分の 1 の高校では全く提供されていないのが実情であった。このような状況に鑑みて、AP 科目に参加する機会を持たない生徒が選抜性の高い大学への入学を希望する場合、AP 科目の履修歴で不利にならないようにとの配慮から登場したのが、ウィスコンシン AP 遠隔教育コンソーシアムなのである。それは 3 年間で 100 万ドルを費やす巨大なプロジェクトであり、そのうちの約 56 万ドルは連邦教育省から交付され、残りの額はウィスコンシン大学マディソン校とウィスコンシン大学システムが負担することになっている。

一方、ロサンゼルス統合学区の高校生と直接関係すると考えられるのは、UC カレッジプレップオンライン (UC College Prep Online) である。同社はサンタクルーズ (Santa Cruz) に本部を置き、カリフォルニア大学システムと共同で州全体のバーチャルラーニングを実施している。しかも、生徒がオンライン AP 科目をより活用しやすいように、MP3 音楽プレーヤー (iPods 等) にダウンロードできるような工夫も行っているのである。こうした工夫もあって、同社の AP オンライン科目を履修する生徒数は 2005-06 年度には 797 人であったのが 2006-07 年度には 1,872 人まで増加してきている。

このようにオンライン AP 科目は近年急激に成長してきており、AP プログラムのさらなる拡大の可能性はオンラインコースと大いに関係があるとさえ言えそうである。オンラインコースの利点は、学校側が提供できない科目を補うことができることにある。すなわち、規模の小さい高校では人材や資源に制限があるため、AP 科目を十分に提供することは困難であり、一方大きな高校であっても、時間割の都合で生徒は希望する全ての AP 科目を履修できるわけではない。しかし、オンラインコースを活用すれば、時間や場所に制限されることなく自分が希望する AP 科目を全て履修することが可能になるのである。

さらに、環境の整備という点では、AP 独学者用の教材開発も進められてきていることも注目に値する。AP 試験を受験する前提として AP 科目の履修が義務付けられていないため、なかには独学で試験に臨む生徒もいる (この点については第 4 章で詳述する)。したがって、AP プログラムの管理団体であるカレッジボードは、このような生徒も積極的に AP 試験を受験することができるような支援を行っているのである⁸。例えば、過去の AP 試験の問題が収められた CD-ROM を 1 科目につき 49 ドルで販売したり、過去に出題された全ての AP 科目の記述式問

題や、AP 科目を「外国語」、「数学・化学」、「歴史・社会科学」の 3 つの分野に分けて、それぞれの分野の AP 試験に臨む上での注意事項や具体的なアドバイスをウェブ上に掲載している。

3. AP 科目数の増加

(1) 新しく導入された科目

カレッジボードが AP プログラムを開始した 1955 年当時の AP 科目は「作文」、「英文学」、「ラテン語」、「フランス語」、「ドイツ語」、「スペイン語」、「数学」、「生物学」、「化学」、「物理学」、「歴史」の 11 科目であったが⁹、その後カレッジボードは学生のニーズや社会状況に応じて AP 科目を徐々に増加させてきた。例えば、1996 年に「統計学」、1997 年に「環境科学」、2000 年に「人文地理学」、2001 年に「世界史」、2006 年には「イタリア語・文化」が新たに AP 科目として追加されている。また、「中国語・文化」や「日本語・文化」といった AP 科目も 2007 年から提供されており、さらに今後は、「ロシア語・文化」も追加される予定である¹⁰。

「AP 統計学」については、もともと多くの学生が大学でそれを履修していたことから大きな需要が見込まれるものであった¹¹。実際、その人数は年々増加しており、1990 年から 2000 年までの 10 年間で大学において「統計学」のコースを受講する学生数は 45%も増加している¹²。このような状況に鑑みて、カレッジボードは「統計学」を新たな AP 科目として 1996 年に導入したのである。「AP 統計学」のコースは、データの収集、分析、そして分析結果をもとに結論を導くための基本的なスキルを身につけることを目的としており、これらのスキルは社会科学や保健学、そしてビジネス等を専攻する際に必要とされる。また、化学や工学を専攻する場合は、上級レベルの統計学の知識が必要になってくるため、その準備段階としても「AP 統計学」を履修することは有効なのである。このように、「AP 統計学」は多様な学問分野で活かすことが可能な科目であると言える。

次に、「AP 環境科学」は、連邦政府が高校生の数学と理科の学力向上を狙いとする政策を実施する中で、新たな AP 科目として導入された¹³。また、大学における「環境科学」のコースは、地理学や生物学、そして環境学等の複数の学科によって提供されており、多くの分野からもともと注目されていた科目であったことも、「環境科学」が AP 科目として新たに追加された要因である。ただし、このように提供する学科が異なれば、重点を置くトピックもそれぞれ異なってくる。例えば、生物学科においては科学的原理や分析を強調し、研究要素を含む科学的なコースを提供する一方、地理学科では社会学あるいは政治学的側面から環境学を強調するコースを提供している。高校生の数学と理科の学力向上を目指す連邦の動きの中で導入された「AP 環境科学」は、前者の科学的な側面を強調したコースとなっている。

また、「AP 人文地理学」は、人間理解や地理学に関する体系的な内容を学習すると同時に、それらを科学的視点から分析することを目的とした科目である。AP 科目として「人文地理学」を新たに導入した背景には、上述の「環境科学」と同様に、生徒の科学的思考力の発達を目指したことがある。AP プログラムに「人文地理学」を新しく設けることによって、文系科目の

学習においても生徒の科学的思考力を鍛えることがその狙いであった。

さらに、「AP 世界史」が新たに導入された背景には、グローバル化が進行するなかで、世界に目を向け幅広い視野を持つことが高校生に求められるようになったことが挙げられる。また、大学における「世界史」のコースが非常に細分化されていることも AP 科目に「世界史」が追加された要因の一つである。大学における世界史コースは、年代やテーマの違いにより多種多様なものとなっている。そのため、大学へ入学後、このような多様なコースの中から自分の関心に合ったコースを見つけ出すことは学生にとって困難である。こうした問題を解決するため、「AP 世界史」は大学で提供されるさまざまな「世界史」を広く浅くカバーしたものとなっている。学生は、高校で「AP 世界史」を履修することによって、大学入学後すぐに自分が関心を抱く「世界史」のコースを選択できるようになるのである。

そして、2006年に導入された「イタリア語・文化」は、カレッジボードが AP プログラムを開始した 1955 年以来初めて追加した外国語科目であり、その後「中国語・文化」、「日本語・文化」も追加されてきている。この傾向は、高校教育において多文化主義や多言語主義を推進するというカレッジボードの公約¹⁴からすれば当然のことであるとも見て取れる。また、2002年に連邦法である「どの子ども置き去りにしない (No Child Left Behind)」法が成立したことによって、生徒の英語と数学の到達度を高める必要が生じたため、多くの高校が新たな外国語や選択科目を控える傾向にあるが、こうした傾向に一石を投じたいという意味もあるようである¹⁵。

しかし、他の AP 科目とは異なり、外国語の AP 科目を新たに設置するにはいくつかの困難が伴うこととなった。例えば「中国語・文化」に関しては、カレッジボードが 2004 年に行った調査によれば、多くの高校が「中国語・文化」の AP 科目を設けることに関心を示したが、その時点で実際に中国語の科目を提供している高校の数はあまりにも少なかったのである¹⁶。

そこで、カレッジボードは、「中国語・文化」を担当する教員や生徒を対象とした 5 年間のプログラムを計画した¹⁷。第一に、実際に中国から「中国語・文化」の教員を招き、3 年間で期限とし、アメリカの初等中等学校教員として雇うことを許可した。このプログラムによって中国人教員は、母国の言語と文化についての専門的知識をアメリカの生徒や学校に提供し、2009 年までに 250 人の中国人教員が配置される予定である。第二に、中国語の教員養成のプログラムを作成し、そのための奨学金制度も設けた。初等中等学校の中国語教員の免許を取得するための大学のコースに在籍する者は、奨学金を受給できるようにしたのである。また、教員の研修制度も設け、中国語を担当するアメリカ人の教員は、中国文化に関する知識を高めるために、中国での夏期講習に参加できることとなった。2006 年には、60 人の教員がこの研修に参加し、2010 年までに約 500 人の教員が参加する予定である。第三に、生徒を対象としたプログラムとして中国でのサマーキャンプがある。これによって、アメリカの高校生は直接中国の文化に触れ、自らの言語スキルを向上させ、その後の「AP 中国語・文化」の試験で高得点を獲得するための礎に十分なりうるものと期待されている。

(2) 現在の AP 科目

こうして、カレッジボードは近年外国語科目を増加させることによって、現在 37 科目の AP 科目を提供している。以下の表 2-3 は、これら 37 科目の具体的な科目名と、2006 年における AP 試験受験者数、その科目を開設する高校の数を示したものである。「ラテン文学」、「ラテン；ウェルギリウス」の 2 科目、「2-D デザイン」、「3-D デザイン」、「線画」の 3 科目、「情報科学 A」、「情報科学 AB」の 2 科目については、それぞれ AP 試験受験者数、AP 科目を開設する高校の数をまとめて計上している。また、「中国語・文化」と「日本語・文化」の 2 つの科目に関しては 2007 年から導入されたため、その数値は記載されていない。

表 2-3 現在の AP 科目名

科目	参加者数	高校数	科目	参加者数	高校数
英語・作文	256,722	8,168	情報科学 A	19,601	2,491
英文学・作文	281,111	11,904	情報科学 AB		
フランス語	21,572	3,501	微積分 AB	197,181	11,526
フランス文学	2,009	478	微積分 BC	58,603	4,371
ドイツ語	5,139	1,320	統計学	88,237	4,464
スペイン語	101,473	6,322	化学	87,465	6,493
スペイン文学	14,287	1,415	環境科学	44,698	2,225
イタリア語・文化	1,597	311	生物学	131,783	8,111
ラテン文学	8,177	1,153	物理学 B	50,987	4,082
ラテン；ウェルギリウス			物理学 C；電気学・磁気学	10,481	1,401
中国語・文化			物理学 C；力学	24,480	2,619
日本語・文化			マクロ経済学	52,599	2,622
音楽理論	11,809	2,074	ミクロ経済学	33,092	2,189
芸術史	17,977	1,364	アメリカ史	311,000	10,465
2-D デザイン	26,402	3,709	ヨーロッパ史	91,040	4,194
3-D デザイン			世界史	84,143	2,849
線画			比較政治学	12,742	1,041
心理学	101,221	3,860	アメリカ政治学	143,980	5,982
人文地理学	21,003	890			

出所) College Board (2007). *Advanced Placement Report to the Nation 2007*. をもとに筆者作成。

表 2-3 から、AP 科目は「英語・作文」や「微積分 AB」等のいわゆるアカデミック科目のみならず、「音楽理論」や「芸術史」のような芸術科目、「心理学」や「情報科学 A」等幅広い分野にわたっていることがわかる。言語科目だけをみても、「英語」以外に「フランス語」、「ドイツ語」、「スペイン語」、「イタリア語・文化」、「中国語・文化」、「日本語・文化」の六カ国の言語についての AP 科目がある。また、物理学も、「物理学 B」、「物理学 C；電気学・磁気学」、「物理学 C；力学」という三つの分野に分かれており、一つの科目の中でもバラエティに富んだものとなっている。

次に、AP 試験の受験者数に注目すると、2006 年において AP 試験の受験者が最も多かった科目は「アメリカ史」で、31 万 1,000 人も生徒が受験している。続いて二番目に多いのは「英文学・作文」で、28 万 1,111 人となっている。そして、「英語・作文」の 25 万 6,722 人、「微積分 AB」の 19 万 7,181 人、「アメリカ政治学」の 14 万 3,980 人が続いている。このように、AP 試験受験者数が多いのは、アメリカに関連する文系科目であることがわかる。

一方、逆に受験者数が少ない科目は「イタリア語・文化」で、1,597 人しか AP 試験を受験していない。受験者数が最も多い 31 万人の「アメリカ史」と比べると、その差は歴然としている。次に受験者数が少ないのは「フランス文学」で受験者数は 2,009 人である。そしてそれに続くのは「ドイツ語」の 5,139 人、「ラテン；ウェルギリウス」の 8,177 人となっている。このことから、AP 試験の受験者数が少ないのは主に外国語に関する科目であることがわかる。この点は、カレッジボード側の意図が十分に実現されていないと言えよう。

このような傾向は、AP 科目を開設する高校の数についても同様にみることができる。AP 科目を開設している高校数が最も多いのは、「英文学・作文」で 1 万 1,904 校が開設している。続いて多いのは「微積分 AB」の 1 万 1,526 校、「アメリカ史」の 1 万 465 校、「英語・作文」の 8,168 校となっている。一方、AP 科目を開設する高校数が最も少ないのは、「イタリア語・文化」で 311 校、そして「フランス文学」の 478 校、「人文地理学」の 890 校がそれに続いている。外国語科目の場合、その科目を担当できる教員が実際に高校に存在するかどうか重要な決め手となり、その絶対数が不足していることがここから推察できる。

（3）科目別に見た参加者数の増加

1950 年代にカレッジボードが AP プログラムを開始してから現在に至るおよそ 50 年間で、AP プログラムへ参加する生徒の数は劇的に増加してきたことはすでに表 2-1 で示した。ここでは、AP プログラムの全 37 科目の中から主な科目に注目し、その AP 試験受験者数の 2003 年から 2007 年までの間の変化を見ることにする。表 2-4 は、AP プログラムの 37 科目の中から「英文学・作文」、「スペイン語」、「心理学」、「微積分 AB」、「生物学」、「アメリカ史」、「アメリカ政治学」を選び、2003 年から 2007 年までの AP 試験受験者数の推移を示したものである。

表 2-4 からわかることは、2003 年から 2007 年にかけてどの科目についても AP 試験を受

験した生徒数は増加傾向にあることである。「スペイン語」に関しては2006年から2007年にかけて若干の減少が見られるが、その他の科目については一貫して受験者数は増加している。

表2-4 AP試験受験者数の推移

科目	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年
英文学・作文	229,367	239,493	260,958	281,111	298,478
スペイン語	83,811	90,828	98,245	101,473	101,198
心理学	62,666	72,287	87,207	101,221	116,128
微積分 AB	166,821	175,094	185,992	197,181	211,693
生物学	103,944	111,104	121,446	131,783	144,796
アメリカ史	242,699	262,906	285,368	311,000	333,561
アメリカ政治学	104,636	112,894	129,323	143,980	160,978

出所) College Board (2008). *The 4th Annual AP Report to the Nation*. をもとに筆者作成。

例えば、「英文学・作文」を見ると、2003年にAP試験を受験した人数が22万9,367人であったのが、2004年には約1万人増加し、23万9,493人となっている。また、2005年には26万958人の生徒がAP試験を受験し、2006年には28万1,111人、そして2007年には29万8,478人となっている。2003年から2007年までの間に、「英文学・作文」のAP試験を受験した人数はおよそ7万人増えたことになる。

また、「微積分 AB」については、2003年におけるAP試験の受験生徒数は16万6,821人であったが、2004年には17万5,094人、2005年には18万5,992人、2006年には19万7,181人、そして2007年にはその数は21万1,693人となり、その4年間でおよそ4万5,000人増加している。

「アメリカ史」のAP試験の受験者数は、2003年には24万2,699人であったが、2004年には26万2,906人、2005年には28万5,368人と年々増加している。そして、2006年には30万人を超えて31万1,000人となり、2007年には33万3,561人がAP試験を受験している。「アメリカ史」については、2003年から2007年にかけて、1年ごとにおよそ2万人ずつ増加していることがわかる。このように、若干の例外を除いて、APプログラム全体としても科目別にみてもAP試験の受験者数は急増しているのである。

4. APプログラムの拡大支援

(1) カレッジボードによる高校支援

AP科目の履修は、生徒がAP試験や大学教育への準備を行うのに役立つと考えられるが、そ

の実践には当然ながら資金が必要となることも事実である。そのため、高校としては AP 科目の開設を希望するが、資金不足が原因で AP 科目の開設や増加ができない高校も多く存在する。そこで、カレッジボードは AP プログラムの拡大に関心を持つ学校や教員に対して財政面や技術面の支援を行うための二つの競争的な補助金を設けており、その額は 50 万ドル以上にのぼっている¹⁸。

一つ目は AP スタートアップ補助金 (AP Start-Up Grants) であり、これは AP 科目の開設を希望する学校の支援を目的とするプログラムである。また、カレッジボードは財政支援に加えて AP 科目の実践に関するアドバイス等の技術面の支援も行っている。このプログラムの対象となるのは、AP 科目を全く提供していない公立高校であり、毎年 5 校まで支援が受けられる。また、支援を受ける学校は 3 年ごとに選び直されるが、その際カレッジボードは次の条件に該当する高校を優先して選ぶことになる。第一に、全生徒の 50%以上をマイノリティの生徒が占める学校であるかどうかという点である。第二に、低所得層に該当する家庭の生徒や、家族の平均収入が連邦が定める低所得基準 (4 人家族の平均年収 3 万 1,800 ドル¹⁹) 以下の生徒が通う学校であるかどうかという点である²⁰。同プログラムによって補助される額は 1 校あたり最高 3 万ドルであり、それは AP 科目を担当する教員の専門性の向上のためや、教材の購入等に用いられている²¹。

ただし、この AP スタートアップ補助金によって支援を受ける学校は、以下に示す義務を負わなくてはならない。第一に、プログラムの対象となる学校は少なくとも 3 科目の AP 授業を開設しなくてはならず、開設できない場合は支援を受ける資格を剥奪される。第二に、その AP 科目を履修する生徒は AP 試験を必ず受験しなくてはならない。第三に、AP プログラムに携わる事務職員はカレッジボード主催のアドミニストレーター・トレーニングやコーディネーター・トレーニングに参加する必要がある、教員もカレッジボードによる夏期講習に参加する義務を負っている²²。

2009 年の AP スタートアップ補助金申請書²³によれば、このプログラムの実施には四つの段階があることがわかる。第一段階は、学校が同補助金によって支援を受けることができると知らされた直後から始まる (2009 年 3 月)。教員は教員研修 (Professional Development) に参加し、AP 科目のために必要なテキストや教材を明確にする (2009 年 3 月から 8 月)。第二段階は最初の 1 年間であり、教員はコースシラバスをカレッジボードへ提出したり、教科書等の教材を注文したり、生徒や保護者に AP プログラムについての説明を行い、AP 科目に参加する生徒を募ったりする等、3 つの AP 科目を実践するための準備を行う。また、高校で開設する 4 つ目の AP 科目を決定し、その第一段階の準備を行う。第三段階としては、2 年目がその期間に当たる。最初の 3 つの AP 科目は高校で実際に授業を行い、生徒は AP 試験に向けて学習する。また、この段階は 4 つ目の AP 科目の計画段階でもある。最後の第四段階は 3 年目にあたり、4 つ目の AP 科目がこの年に開設される。また、高校は 5 つ目の AP 科目の計画を立てながら、すでに実施されている AP 科目の効率化に努める。AP スタートアップ補助金のプログラ

ムは、これらが一つのサイクルとなったものである。カレッジボードとしては、このプログラムをてこにして各高校で実践される AP 科目数が増加していくことを期待している。

また、カレッジボードによる二つ目の財政支援プログラムとして、AP フェロープログラム (AP Fellows Program) がある²⁴。これは、伝統的に AP プログラムへの参加人数が少ないとされているマイノリティや低所得層の生徒が多く在籍する高校において、AP 科目を設けようとする教員に対して財政支援を行うプログラムである。2009 年、カレッジボードは各 AP フェロー教員に 1,000 ドルを提供することになる。同プログラムによって与えられる補助金は、教員が AP プログラム夏期講習に参加するために必要な費用に充てられるが、AP 科目で用いる教材等を購入することはできないことになっている。夏期講習では、各 AP 科目に関する展望や、カリキュラムの変化についての最新の情報を得られるため、教員にとっては貴重な経験となる。

次に、カレッジボードは AP プログラムの発展に貢献した高校に対して表彰や賞金も贈っており、高校にとってこれに受賞することは名声の獲得とも直接結びつくことになる。まず、表彰としては、カレッジボードが AP プログラムに積極的に取り組んだ高校に対して毎年贈る奨励賞 (The Inspiration Awards) という賞がある²⁵。この賞は、AP 科目の発展に最も力を注いだ高校を表彰し、その取り組みを他の高校にも反映させることを目的として創設された。毎年春、カレッジボードは国内の 3 つの高校に対してこの賞を贈るが、その学校を決定するのは第三者の教育専門家団体であり、公平性を保っている。この奨励賞を受賞した高校では、教員はもちろん、保護者や地域コミュニティとも連携して、AP 科目を発展させるために積極的な活動を行っていることが多い。2007 年の受賞校は、ヴァージニア州のデンバイ高校 (Denbigh High School) と、テキサス州のブロッケンリッジ高校 (G. W. Brackenridge High School)、そしてフロリダ州のストラナハン高校 (Stranahan High School) の 3 校であった²⁶。その具体例としてデンバイ高校を取り上げると、この高校は多様な生徒によって構成されている。全生徒数は 1,640 人で、そのうち 52% が「アフリカ系」生徒、6% が「ヒスパニック」の生徒、そして 6% が「アジア系」生徒となっている。また、全体の 45% の生徒がランチプログラムに該当している²⁷。この高校は中学校と連携することによって、高校に入学予定の生徒に対して入学前に英語や代数等の科目について夏に 5 週間の課外プログラムを提供している。このプログラムは中学校から高校への円滑な移行を促すために、高校生の段階で必要とされる基礎的な学力を十分に養うことを目的に行われている。そのように基礎的な学力を十分に身に付けさせることによって、AP 科目という大学レベルの授業に対応できるような環境を前もって整えたことが評価されたのである。また、AP 科目に必要な研究器材を地元企業が提供する等、コミュニティの協力があつたことも注目に値する。これら 3 つの高校は賞金として 2 万 5,000 ドルを、さらにその他の 5 つの学校が努力賞として賞金 1,000 ドルを獲得している²⁸。このような報酬も、多くの高校が AP プログラムに参加する一つのインセンティブにもなっていると考えられる。

次に、シーメンス賞 (Siemens Awards for AP) という賞も設けられている。これは、カレ

ッジボードがシーメンス社と提携し、数学と理科の分野における生徒の学力を向上させるために設けた賞である。これは数学と理科の分野における AP プログラムへ参加する生徒数を増やし、より多くの生徒がその AP 試験で好成績をあげた高校を各州につき 1 校選んで表彰するものである。そして表彰された高校は、賞金として 1,000 ドルを獲得することになる。

また、カレッジボードは『年次報告書 (Advanced Placement Report to the Nation)』のなかで、州ごとに最も積極的に AP プログラムに取り組んだ高校を報告している。これは、学校にとって名誉なことであり、これも多くの高校が AP プログラムの発展に尽力する要因であると考えられる。

以上のようなカレッジボードによる褒賞制度は、各高校にとって資金獲得というインセンティブとなり、AP プログラムへの参加を促す効果をもつ。また、表彰自体が高校の名声に直結するものであり、多くの高校がプログラムへ積極的に参加する要因となると考えられるのである。

(2) カレッジボードによる生徒支援

カレッジボードによるこうした支援策は生徒個人へも向けられている。より多くの生徒が AP プログラムに参加するためのインセンティブとして、カレッジボードは AP 試験で優秀な成績を収めた者に対して表彰を行い、さらに賞金を与える制度を設けているのである。例えば、AP 試験での成績優秀者に対して、AP 優秀賞 (AP Scholar Awards) とシーメンス賞 (Siemens Awards for AP) という 2 つの表彰を行っている²⁹。

表 2-5 AP 優秀賞とその受賞人数

AP 優秀賞	受賞人数
AP Scholar	135,080
AP Scholar with Honor	55,318
AP Scholar with Distinction	73,925
National AP Scholar	9,603
State AP Scholar	104
DoDEA AP Scholar	2
International AP Scholar	2

出所) College Board (2008). AP Scholar Awards.

<<http://professionals.collegeboard.com/k-12/awards/ap-scholar>>をもとに筆者作成。

まず、AP 優秀賞は、多くの科目の AP 試験で優秀な成績を収めた生徒に対してカレッジボードが毎年 10 月に贈るものである³⁰。これには賞金はないが、受賞した生徒がその旨を大学に

報告すれば、大学はそれを入学者選抜時に優遇する。この賞には7種類あり、その7種類の賞と2007年にそれぞれの賞を受賞した人数を示したのが表2-5である(賞名は訳すと混乱しやすいため以下原語のまま表記する)。

表2-5に示すAP Scholarは、3科目以上のAP試験において、3以上の成績を収めた生徒に贈られる賞である。この賞は受賞人数に制限が設けられていないため、生徒がプログラムへ参加するインセンティブになりやすいと考えられる。2007年にAP Scholarを受賞した生徒は合計13万5,080人であり、全体のAP試験受験者数146万4,254人³¹のおよそ10%の生徒がAP Scholarを受賞していることになる。

次にAP Scholar with Honorは、4科目以上のAP試験で3以上の成績を収め、その平均成績が3.25以上であった生徒に与えられる。これもAP Scholarと同様に、受賞人数に上限はないため、生徒の参加インセンティブとなる。2007年の受賞者は5万5,318人で、AP Scholarを受賞した人数の約半分である。

さらに、AP Scholar with Distinctionは、5科目以上のAP試験で3以上の成績を収め、その平均成績が3.5以上であった生徒に与えられる。この賞も受賞人数に制限はない。AP Scholar with Distinctionを受賞するためにはAP Scholar with Honorよりも好成績が要求されるにも関わらず、その受賞人数は7万3,925人でAP Scholar with Honorよりもおよそ2万人多くなっている。

また、National AP Scholarは、最低8科目のAP試験の成績が4以上であり、全ての平均成績が4以上である生徒に与えられる。これはAP Scholar Awards7種類のなかで最もレベルの高い賞であり、したがってその受賞者も上述の3つの賞に比べて少ない9,603人となっている。State AP Scholarは、各州で最も多くの科目のAP試験において3以上の成績を収め、その平均成績が3.5以上である男子生徒1名と女子生徒1名に与えられる。DoDEA AP Scholarは、国防省教育活動学校(Department of Defense Education Activity (DoDEA) School)³²に通う生徒で、AP試験の平均成績が最も優秀であった男子生徒1名と女子生徒1名に与えられる。最後にInternational AP Scholarは、アメリカ国籍以外の生徒で、AP試験の平均成績が最も優秀な男子と女子それぞれ1名に贈られる。

もう一方のAP数理賞は、特に数学と理科の分野のAP試験において成績が優秀である生徒を表彰するものであり、これを受賞した生徒は2,000ドルあるいは5,000ドルの奨学金も獲得することができる³³。アメリカでは数学と理科の学力を向上させるために、例えば数学や理科のAPプログラムへ積極的に参加することも促している。2005年に連邦政府は、数学と理科のAPプログラムに参加する生徒数を2005年の38万人から2012年までに150万人に増やすことを宣言している³⁴。

2,000ドルの奨学金は、各州において8科目(「生物」、「微積分BC」、「化学」、「情報科学AB」、「環境科学」、「物理学C;力学」、「物理学C;電気学・磁気学」、「統計学」)のAP試験で最も優秀な成績を収めた男子生徒1名と女子生徒1名の計2名が獲得することになっている。さらに、

彼らのなかで成績が最も優秀な男子生徒 1 名と女子生徒 1 名の計 2 名は、それに加えて 5,000 ドルの賞金を得ることができるのである。

(3) 連邦政府による支援

このような AP プログラム拡大支援策は、カレッジボードだけではなく、連邦政府も主に二つの支援策を通して積極的に関わっている。一つは、経済的に困難な生徒を抱える高校を支援するプログラム (Advanced Placement Incentive Program : APIP) である。これは、より多くの低所得層の生徒を AP プログラムに参加させ、大学進学を促すことを目的としたものである。2008 年には同プログラムのために 1,240 万ドルが用意された。当然のことながら、補助金は低所得層の生徒が AP プログラムに参加する機会を拡大させるために用いなくてはならないため、例えば、AP 科目を担当する教員のトレーニング、図書やその他の教材購入等がその用途として考えられる。このプログラムの助成対象は、地方教育局 (Local Education Agencies)、非営利団体、州教育局 (State Education Agencies) 等である。2006 年にバーミンハム教育委員会は同プログラムによって 92 万 1,082 ドルの支援を受け、Tapping Academic Potential (TAP) プロジェクトを行なった。この TAP プロジェクトは、8 つの貧しい高校において AP 科目に参加する生徒を増加させることを目的としたものである。TAP には、担当科目や教育学に関する教員の知識を強化するためのトレーニング、英語と数学の分野におけるカレッジボードのモデルカリキュラムの実施、そして生徒のカウンセリングや個人指導も含まれている。

もう一つは、低所得層の生徒のために州が AP 試験の受験料を肩代わりできるように連邦政府が補助金を交付するプログラム (AP Test Fee Program) である。これによって、州は低所得層の生徒で AP 試験を受けようとする者の受験料を継続して肩代わりすることが可能となる³⁵。第 4 章で詳しく述べるが、AP 試験を受験するには 1 科目ごとに受験料を支払わなければならない。2008 年における受験料は、1 科目あたり 84 ドルであり、受験料の支払いが困難で試験を受けることが出来ない低所得層の生徒も存在する。そのような生徒に代わって州が受験料の一部を支払うことによって、より多くの生徒が AP プログラムに参加できるようにしているのである。

さらに、と連邦政府は、数学と理科の学力を向上させるために、新しく AP プログラムを担当する教員をトレーニングすることや、より多くの生徒を AP プログラムに参加させる計画も立案している。ブッシュ政権の 2007 年度予算では、これらの計画に対して 38 億ドルを投入するよう調整した。大統領による提案では、AP プログラムや国際バカロレア (IB) クラスの数学と理科の教員を新たに 7 万人増加させ、2015 年までにこれらの科目の教員をさらに 3 万人増やすことが計画された。7 万人の新たな AP 教員は、通常の授業科目の上級レベルを教えることを認められていない理科や数学の教員をトレーニングし、あるいは「AP 数学」の教員が「AP 理科」の科目を教えられるように (その逆も同様) トレーニングすることによって増員

させることを計画している。

大統領の発案は、APプログラムとIBに参加する生徒の数を劇的に増加させ、またこれらのテストに合格する生徒の数を2012年までに3倍にし、70万人まで到達させることを目標にしているのである³⁶。ブッシュ政権のAPプログラムへの支援の意図は、教育省副長官であるルース（Tom Luce）によって明らかにされたが、彼はAPプログラムを大学での（そして将来への）成功の鍵であると位置づけているのである³⁷。

（４）その他の支援策

こうした支援策は民間の団体でも行われている。その例を2, 3紹介すると以下ようになる。ダラスの非営利団体であるAPストラテジー社（Advanced Placement Strategies Inc.）は、高校での学習においてAPプログラムをより不可欠なものにするために、AP試験で3以上の成績を収めた生徒に報奨金を与えている。さらに、報奨金の対象は生徒のみならず、AP科目を担当する教員や校長にまで及んでいる。AP科目を担当する教員は、AP試験に合格した生徒1人につき100ドルから500ドルを受け取り、さらに何年間にもわたってその成績が向上すればボーナスとして500ドルから2,000ドルを受ける。そして、校長は学校においてAP科目の発展を支援したことが認められれば1,500ドルから3,000ドルを受け取るようになるのである。

また、テキサスインストゥルメント社（Texas Instruments）は、「数学」、「理科」、「英語」のAP試験に合格した生徒に奨学金を支給し、ビジュアルアートを支援するニューヨーク市の組織であるポロッククラスナー財団（Pollock Krasner Foundation）は「芸術史」のAP試験で合格した生徒に報奨金を与えている³⁸。

さらに、テキサス州では上記のAPストラテジー社に加えて、テキサス教育局も1993年以来、AP試験で3以上の成績を収めた生徒一人当たり100ドルを学校に助成している。そのプログラムは毎年2,700万ドルを用意し、AP試験の受験料の補助も行っている。さらに、テキサス大学では教員のためにAPワークショップやセミナーを設けたり、そのための手当てを補助する独自のインセンティブプログラムを行っている。また、フロリダ州は、AP試験の成績が3以上である生徒一人につき教員に対して50ドルを与えている。成績が優れない学校で働く教員については、一人の生徒でもAP試験で3を収めれば、毎年500ドルのボーナスが与えられることで士気を高めている。

さらに、アラバマ、ジョージア、ケンタッキー、メイン、ネバダ、ウィスコンシンの6州から構成されるNational Governors Association（以下、NGAと略記）は、マイノリティの生徒を含むより多くの生徒がAPプログラムに参加できるようにすることを目的とするプログラムを実施している。具体的には、AP科目を担当する教員のトレーニングや生徒の勧誘、中学校のカリキュラムを強化することに焦点をあてる。またAPプログラムを拡大させるために、例えばアラバマ州は、教員のトレーニングを実施し、提供するAP科目を増加させるために100

万ドルも投資している。一方、ウィスコンシン州では、新たに AP 科目を設けた学校には生徒一人につき 300 ドルを助成するという政策も実施しているのである³⁹。

5. おわりに

以上本章をとおして、AP プログラム拡大の実相を具体的な数字に基づいて言及してきた。本章をまとめると以下のとおりになる。

第一に、AP プログラムはその開始から現在に至るまで著しい発展を遂げており、それはプログラムに参加する生徒数、高校数、大学数の劇的な増加から見る事ができる。若干の例外を除いて、AP プログラム全体としても科目別にみても AP 試験受験者の数は急増していることがわかる。

第二に、AP プログラムの拡大には、生徒側の知的関心の高まりという要因以外に、大学入学者選抜において AP 履修歴が有利に働くという生徒側の意図もあることが確認できた。この点は否定されるべきことではなく、少しでも AP プログラムを拡大させようとオンラインコースまで登場させる要因にもなっている。

第三に、このような AP プログラム発展には、カレッジボード、連邦政府や民間団体によるさまざまな支援策に支えられていることも明らかになった。露骨な「アメ」政策に感じられるものも含まれるものの、これらの支援策は着実に AP プログラムの拡大に結びついているようである。つまり AP プログラムは生徒あるいは社会的ニーズに応じながら拡大してきたと言える。ただし、マイノリティの参加が増加したとは言え、彼らに十分な機会が与えられているとは言い難い。この点については第 6 章で詳述することにする。

【注】

- ¹ 表 2-1 には示されていないが、表の最後の年度の翌「2006-07」年度の「生徒数」は 146 万 4,254 人、「高校数」は 16,464 校、「大学数」は 3,743 校であり、この数字は、アメリカにおいて 66%の高校が AP 試験に参加し、90%以上の 4 年制大学が AP 試験の結果に基づいて単位認定等を行っていることを意味している。(College Board (2008). AP Program. <<http://professionals.collegeboard.com/k-12/assessment/ap>>)
- ² 下村一彦「米国におけるホームスクール関連法制の現状と課題」『教育制度学研究』13 号、2006 年、217-222 頁。
- ³ 長嶺宏作「アメリカにおけるホームスクール運動の成長と変容—ホームスクール支援団体の理念と活動分析を中心として」『比較教育学研究』29 号、東信堂、2003 年、114-129 頁。
下村一彦「米国におけるホームスクールへの公的支援制度—アラスカ州 Family Partnership Charter School を事例に」『教育制度学研究』11 号、2004 年、172-185 頁。

- ⁴ *Education Week*, April 26, 2006. More Home Schoolers Taking Advanced Placement Tests.
- ⁵ Ibid.
- ⁶ *Education Week*, April 4, 2007. Students Opting for AP Courses Online.
- ⁷ Ibid.
- ⁸ College Board (2008). Preparing.
<<http://www.collegeboard.com/student/testing/ap/prep.html>>
- ⁹ College Board (2008). The History of the AP Program.
<<http://apcentral.collegeboard.com/apc/public/courses/21502.html?type=print>>
- ¹⁰ *Education Week*, December 8, 2004. College Board to Add Japanese to Language Offerings.
- ¹¹ College Board (2008). STATISTICS Course Description.
<http://apcentral.collegeboard.com/apc/public/repository/ap08_statistics_coursedes.pdf>
- ¹² *Chronicle of Higher Education*, July 12, 2002. Report of Grade Inflation May Be Inflated, Study Finds.
- ¹³ College Board (2008). ENVIRONMENTAL SCIENCE Course Description.
<http://apcentral.collegeboard.com/apc/public/repository/ap07_envsci_coursedes.pdf>
- ¹⁴ College Board (2007). *Advanced Placement Report to the Nation 2007*.
- ¹⁵ *Education Week*, December 8, 2004. College Board to Add Japanese to Language Offerings.
- ¹⁶ College Board (2007). *Advanced Placement Report to the Nation 2007*.
- ¹⁷ Ibid.
- ¹⁸ College Board (2008). AP Grants.
<<http://professionals.collegeboard.com/k-12/awards/ap-grants>>
- ¹⁹ U.S. Department of Education (2008). Federal TRIO Programs 2008 Annual Low Income Level.
<<http://www.ed.gov/about/offices/list/ope/trio/incomelevels.html>>
- ²⁰ College Board (2008). 2009 COLLEGE BOARD AP START-UP GRANT.
<<http://fs18.formsite.com/EquityAccess/form855633340/index.html>>
- ²¹ College Board (2008). AP START-UP GRANTS.
<<http://professionals.collegeboard.com/k-12/awards/ap-grants/start-up>>
- ²² College Board (2008). 2009 COLLEGE BOARD AP START-UP GRANT.
<<http://fs18.formsite.com/EquityAccess/form855633340/index.html>>
- ²³ Ibid.
- ²⁴ College Board (2008). AP Fellows Program.
<<http://professionals.collegeboard.com/k-12/awards/ap-grants/fellows>>
- ²⁵ College Board (2008). Inspiration Awards.
<<http://professionals.collegeboard.com/k-12/awards/inspiration>>
- ²⁶ College Board (2008). Press Releases.
<<http://www.collegeboard.com/press/releases/155799.html>>
- ²⁷ Ibid.
- ²⁸ Ibid.
- ²⁹ College Board (2008). Awards, Grants, & Financial Aid.
<<http://professionals.collegeboard.com/k-12/awards>>

- ³⁰ College Board (2008). AP Scholar Awards.
<<http://professionals.collegeboard.com/k-12/awards/ap-scholar>>
- ³¹ Ibid.
- ³² DoDEA school とは、軍隊のメンバーや国防省 (Department of Defense) 一般職員の子弟を対象とする学校である。アメリカ国内では7州 (アラバマ, ジョージア, ケンタッキー, ニューヨーク, ノースカロライナ, サウスカロライナ, バージニア), グアムとプエルトリコ, そして12ヶ国 (バーレーン, ベルギー, イギリス, ドイツ, イタリア, 日本, 韓国, オランダ, ポルトガル, スペイン, トルコ, キューバ) に設置されている。(DEPARTMENT OF DEFENSE EDUCATION ACTIVITY (2008). DoDEA Facts.
<<http://www.dodea.edu/home/about.cfm?cId=facts>>)
- ³³ College Board (2008). Siemens Awards for AP.
<<http://professionals.collegeboard.com/k-12/awards/siemens-ap>>
- ³⁴ *The Chronicle of Higher Education*, February 17, 2006. Advanced Placement Test Scores Drop Slightly, Report Says.
- ³⁵ U.S. Department of Education (2008). NO CHILD LEFT BEHIND.
<<http://www.ed.gov/about/inits/ed/competitiveness/expanding-apip.pdf>>
- ³⁶ *Education Week*, February 8, 2006. Bush Proposes Math and Science Initiatives.
- ³⁷ *Education Week*, February 15, 2006. More Students Taking AP Courses-and Tests.
- ³⁸ *Education Week*, July 9, 2003. Program Doles Out Cash to Students Who Pass AP Exams.
- ³⁹ *Education Week*, May 9, 2007. Rigorous Courses, Fresh Enrollment.

第3章 AP科目の授業

小川 佳万
(東北大学)

1. はじめに

第2章で言及したとおり、APプログラムの参加者数（AP試験受験者数）は開始から現在に至る約50年間ほぼ順調に増加してきた。特に2000年以降の増加は著しく、これには生徒側のニーズの高まりに加えて、カレッジボードや連邦政府、さらには民間財団もそれぞれインセンティブプログラムを実施してきたことがその要因として挙げられることにも言及した。そして、こうした外部からの制度的なサポートに支えられて今後もAPプログラムが拡大していく可能性は十分考えられるが、そのサポートを効果的に生かすためには、プログラムの中身にあたる日常の授業実践の充実が不可欠であることは言うまでもない。

ところで、APプログラムが効果的に行われているかどうかは、一般に全米統一試験であるAP試験結果に基づいて評価されるが、そもそも日々実践されるAP科目については何かガイドラインのようなものはないのであろうか。それとも教員の裁量に完全に任されているのであろうか。また、AP科目を実践する教員には何か特別な資格が必要なのであろうか。

本章では、こうした疑問に答えるため、AP科目の授業についてできるだけ具体的に明らかにすることにした。まず高校の授業一般について説明し、次に高校教育課程のなかのAP科目について具体的に説明を加え、最後にAP科目を実践する教員の資格等について論を進めていくことにする。特に本章では、AP科目が授業のなかでどう位置付けられているのかについて具体的に示す必要もあるため、ロサンゼルス統合学区の訪問校での聞き取り調査とそこで収集した資料に基づいて明らかにしていくことにする。

2. 高校の授業

(1) ロサンゼルスB高校の一日

はじめに、高校生は学校でどのような1日を送っているのかについて、ロサンゼルス統合学区のB高校を事例として以下で具体的に述べていくことにする。以下の表3-1はそのB高校のタイムスケジュールである。

表3-1 B高校のタイムスケジュール

時限	予鈴	開始	終了
始業ベル	7:50		
1時限	7:59	8:00	8:56
2時限	8:58	8:59	10:02
栄養補給		10:02	10:22
黙読の時間	10:28	10:29	10:49
3時限		10:49	11:41
4時限	11:47	11:48	12:40
5時限	12:46	12:47	13:39
昼食		13:39	14:09
6時限	14:15	14:16	15:08

出所) B High School (2004). *2004-2005 Student Handbook*. (24時間標記に修正)

表3-1が示しているとおおり、B高校の1日は7時50分から始まっているという点で、日本の多くの高校よりも若干早い。1時限が8時開始であるが、学区内のC高校は7時30分から始まり、他州では7時丁度に1時限が始まる高校も存在していた。また終了時間は、B高校の場合15時8分であり、特に早いわけではない。学区内には16時台に終了する高校も存在していたが、他は15時台であり、他州では14時ごろ終了している高校も存在していた。

B高校は1日6時限であったが、学区内には1日7時限の高校も存在する。日本の学校に慣れた人間からみると奇異に映るのは、B高校の1時限の授業が56分に設定されていることである。また、学校によっては1時限と2時限の授業時間が数分異なっているところもあった。もちろん1時限60分と設定されている高校も存在したが、その場合でも例えば8時36分から2時限開始というように、タイムスケジュールは分単位になっている。休憩時間も10分間ではなく、6分間や7分間となっている。

このように学区内の高校であっても時限数や1時限の時間数等が異なっているのは、この領域は基本的に学校の裁量事項だからである。この学区では年間の授業時間数等の大枠は定められているが、その時間数を満たすのであれば、1時限の時間を56分にしようが、60分にしようが、あるいはそれ以上に設定しようが学校側の自由ということになる¹。

また、日本の学校では、9時45分のように5分単位で運営されることが多いが、アメリカの場合は、1分単位で運営されていることがわかる。時間を1分ごとに細かく設定するのは、学校の時間管理を厳格にするためである²。つまり、10時から授業が始まるというよりも、10時2分から授業が始まるほうが、生徒が1分間を無駄にすることがなくなるという理由によるのである。そして教員は、授業時間を短くすることも長くすることもなく、例えば8時56分に

授業を終了することが求められるのである。これも各教員に時間を厳守させるためであると言う。

さらに、2 時限終了後に「栄養補給」の時間が設けられていることも日本とは大きく異なる点である。これは朝食を抜く生徒も多く、B 高校の場合 13 時 39 分まで「昼食」の時間がないため、午前の授業の途中で、休憩を兼ねた軽い食事の時間を設けないと空腹で授業に集中できなくなるためである。1 時限と 2 時限の休憩はわずか 3 分間しかないが、この「栄養補給」の時間は 20 分間設けられている。こうした「栄養補給」の時間の設定や、何時限後に昼食の時間とするのかについても学校の裁量範囲内である。つまり、同一学区内の高校であってもまちまちということになる。

そして、「黙読の時間」が設定されていることも B 高校の特徴の一つである。B 高校では本に親しませる時間を特別に設定することによって、英語（国語）の学力を向上させようとしているようである。この時間は、生徒はみな静かに着席して本を黙読していなければならないのである。

昼食後は、6 時限の授業を行い、15 時 8 分に下校となる。日本のようにその後クラブ活動を 1,2 時間行うということではなく、基本的に全員下校することもアメリカの一般的な特徴として挙げられる。日本のクラブ活動は、アメリカの文脈で言えば、学校領域外の活動であると理解されているのである。

なお、この表は通常期のタイムスケジュールであり、学校行事がある日等では短縮のタイムスケジュールで運営される。

（2）時間割

アメリカの高校では 1 年 2 組というようなクラスが存在しないため、日本の各教室に貼られているような時間割表は存在しない。これは第 1 章で説明したように、生徒は自分が選択した科目を履修しに教員の教室に出向くという方式をとっているからである。学校全体の授業管理、例えば 2 時限に誰がどんな授業を行っているのかについての把握等は校長や副校長によって行われている。言い換えれば、校長はセメスターごとの教員のスケジュールをまとめた書類を保持していることになる。

この教員のスケジュール表は非常に単純である。教員の名前の横に 1 時限から 6 時限までの時間にどの科目の授業をしているのかが一覧表になっているだけである。第 1 章でロサンゼルス高校はセメスター制を採用し、19 週で構成されると述べたが、この 19 週（学校行事等があるため実際にはそれより少ない数になる）中を通して、例えば A 先生の 1 時限の授業は毎日同じ科目であるということである。わかりやすく言えば、月曜日から金曜日まで A 先生の「英文学」の授業は、常に A 先生の教室で 1 時限目に行われているということである。日本の場合、例えば「英会話」の授業が週 6 時間あったとしても、曜日ごとに時限を変えてアクセントをつけているが、アメリカの高校は固定しているという点で大きく異なっている。生徒側にとって

みれば、今学期の5時限はずっと「世界史」ということで固定されることになる。

また、ロサンゼルス統合学区では、教員は週に25時間の授業実践が求められているため、単純化して言えば、1日6時限のうち、5時限授業を行い、残りの1時限は授業の準備や事務作業の時間に充てることになる。

授業は選択制であるため、受講者数は授業ごとに異なっている。D校での資料から、20人台の授業が多いことが明らかになったが、10人台から40人台までかなり幅がある。各授業は25人以下を標準としているという校長の話とは異なり、実際の授業の受講者はそれよりも多くなっているのが実情のようである。

なお、授業では教科書が使用されるが、その教科書は無償で学校から貸し出される³。生徒は指定された教科書を教科書が保管された部屋に出向いて手続きを行い、当該セメスターが終了するまで借用することになる。それを破損した場合や失くした場合は相当金を支払うことになっている。

3. 高校における AP 科目

(1) AP 科目

アメリカの高校は、前節で示したようなタイムスケジュールで毎日運営されるが、AP科目は、基本的に通常の授業時間内に開講されていることは注意すべきことである。つまり、土曜日や日曜日といった休日や、特別に7時限目や8時限目を設定してAP科目を実施しているわけではないのである。したがって、1時限を56分に設定している学校では、AP科目も毎回56分で行われている。そして1科目週5時限分行われていることも一般の科目と同様である。

ただし、これらのAP科目は誰もが履修できるわけではない。カウンセラーとの相談によって許可された生徒のみが受講を許可されることも注意が必要である。履修を許可されるかどうかについては、各高校で一応ガイドラインを設定しているが⁴、最終的な判断は「担任」としてのカウンセラーに任されている。一般的には優秀な生徒のみの履修であるが、どの程度優秀なのかについては個々のケースによって判断が分かれる場合もある。

また、現在AP科目は全部で37科目であるが、各高校が37科目も提供しているわけではないことも留意する必要がある。当然のことながら、AP科目を担える教員が存在するかどうかはAP科目開設の最大のポイントとなる。例えばA高校で開講されているAP科目には以下の表3-2のようなものがある。

この表3-2は2006-07年度のものであるが、A高校では37科目中18科目提供していることがわかる。2008年に全米のAP科目を提供している高校の1校あたりの平均開講数が9科目である⁵ことを考えると、この数字はかなり多いものとなる。

ただし、教員側スケジュール表から明らかになるが、こうした科目は複数回提供されていることが多い。例えば表の「AP スペイン語」は受講希望者が多く、同一教員が複数回同じ科目を教えているし、他の教員も同じ「AP スペイン語」を担当しているのである。

表3-2 A高校でのAP授業科目

英語	AP 英語・作文
外国語	AP フランス文学 AP フランス語 AP ドイツ語 AP イタリア語・文化 AP スペイン文学 AP スペイン語
数学	AP 統計学 AP 微積分 AB/BC
理科	AP 生物学 AP 化学 AP 物理学 AB AP 物理学 BC
社会	AP 政治/家政学 AP ヨーロッパ史
映像/舞台芸術	AP 芸術史 AP スタジオアート AP 音楽理論

出所) A高校で収集した資料より。

また、AP科目が開講される授業時間は1日のうち1時限のものもあれば6時限のものもあり、それが同じ時限に集中しているということはない。言い換えれば、AP科目受講希望者ができるだけ履修できるように授業時間を分散させていると考えられる。

実際に生徒が各AP科目を何人受講しているかについては、D高校のケースから明らかになるが、多くが20人から40人であり、一般の科目と大差がない。ここから、同一名称のAP科目を何回提供するかについては、AP科目の(カウンセラーの許可を得た)履修希望者がどのくらいいるのかによって調節していると考えられる。

これらの点から、AP科目は一般の授業科目のなかに完全に組み込まれていることがわかる。それは生徒にとって特別に設定されたものというよりは、さまざまな選択科目のなかの一つであることを意味するのである。

(2) AP科目の開設審査

では、AP科目の開設を希望する高校は自由に科目を開設できるかというところではない。

まずは、事前の事務手続きが必要となる。基本的には AP 科目開設にあたってのカレッジボードとの間の事務手続きであるが、校内では AP プログラムの成功の鍵を握る AP コーディネーターの選定作業がある。AP コーディネーターは、各高校における AP プログラムの管理運営の責任者であり、カレッジボードとの事務連絡責任者である。例えば、AP 試験の申し込みや AP 科目に必要な教材の購入等を担当する。こうした責任者には、事務職員、カウンセラー、あるいは AP 科目を担当しない教員から選ばれることになる。逆に言えば利害関係の対立を避けるために、AP 科目を担当する教員は AP コーディネーターにはなることができないのである⁶。

もう一つ重要な点としては、AP 科目開設審査 (AP Course Audit) 制度を受ける必要があることである。これは AP プログラムの質を保証するために 2007 年から導入されたものである⁷。この制度によって、各高校は、AP 科目を開設する際にそれを担当する教員がシラバスを審査委員会 (audit) に提出して審査を受け (無料)、AP 科目開設の許可を得なければならない。その審査制度プロセスは、次のとおりである。

まず、高校の教員によって提出されたシラバスは、AP 科目審査官によって審査される。審査官は、それが AP 科目開設審査制度の定める AP 科目のカリキュラムの基準を満たしているかどうかを審査し、そこで許可が得られれば、AP 科目を開設することができる。高校がこの許可を受けているかどうかは生徒の大学進学に影響を与えることになる。毎年大学側は、各高校で実施されている (許可された) AP 科目名を示したリストを受け取るため、そのリストに載っていない場合、生徒の成績証明書欄にいくらその AP 科目履修が記載されていても評価されないことになるからである。

一方、AP 科目を担当する教員によって提出されたシラバスが審査制度の定める基準を満たしていないと判断された場合は、上級審査官によって再審査が行なわれる。そして、その上級審査官もシラバスが基準に達していないと判断すれば、そのシラバスを AP 科目として認めない根拠を、シラバスを作成した高校教員に示す。それを受けた教員は、シラバスを作成し直して審査委員会へ再び提出することになる。

また、シラバスを再提出してもなお、審査官がそれを AP 科目として認定することができないと判断した場合、カレッジボードの代表はその高校教員を呼び出し、シラバスの改善についての具体的なアドバイスを行う。そして、教員はそのアドバイスに基づき、再びシラバスを修正して提出することになる。

ただし、AP 科目のシラバスを提出できる機会は 3 回までとされている。つまり、3 回目にシラバスを提出してもそれを審査官が AP 科目として認可しない場合は、そのコースはその学期に AP 科目として開設することはできず、来学期に新たにシラバスを作成し、提出しなくてはならないのである⁸。ちなみに、2007 年には 800 人の大学教員が AP 科目のシラバスの審査を行い、AP 科目として認められたものは申請シラバス全体の 3 分の 2 であった。これはかなり厳しい数字であると思われるが、こうした審査制度によって、大学のアドミッションオフィサ

一は、生徒の成績証明書に記載される AP 科目履修歴を、大学教員に認められたシラバスに沿って行なわれた授業であると信頼できることになるのである⁹。

こうしたシラバスを審査する審査官は、在職 3 年以上の大学教員であるか、AP 科目を担当した経験のある 5 年以内の退職教員でなければならぬ。また、上級審査官には、在職 3 年以上の大学教員か、AP 科目を担当した経験のある 3 年以内の退職教員か、もしくは修士号を取得した教育専門家等である必要がある。いずれにせよ、AP 科目を担当する現職教員が審査官となることはできない。審査官は、公平な審査が行えるようにオンライン研修が求められている。そこでは、シラバスを審査する際の明確な基準を適用できるように研修によって識別力を磨くことになる¹⁰。

審査委員会へ提出する AP 科目のシラバスは科目によって内容が異なっている。例えば、生物学の AP 科目を開設するためには、その講義内容のみならず、実験の構成内容も記したものを提出する必要がある、それが AP 科目として大学教育レベルの質を維持しているかが審査される¹¹。カレッジボードは、AP 科目で使用すべきテキストやその他の教材を定めたり、教授法を指示したりしてはいないが、授業内容が大学の単位としてふさわしいレベルの内容であるかどうかに関心を示し、そのチェックを審査委員会が行っている。AP 科目のカリキュラム設計と実践は、担当する教員の裁量による部分が大きいのである。

ここで注意が必要なことは、AP 科目審査制度に参加しない高校も AP 試験を実施できることである¹²。さらに言えば、高校で開講されていない科目の試験を受験することは生徒個人の自由であり、逆に AP 科目を高校で履修していても AP 試験を必ずしも受ける必要がないのである。これは生徒の受験料の負担という面からも考慮されている¹³。それでも AP 科目の履修希望者が多いのは、受講自体は無料であるという点と、生徒の成績証明書に AP 科目の履修歴があるだけでも大学入学選抜の際に有利になることがあるからである¹⁴。

このように、AP 科目開設審査制度を設けることによって、AP 科目の質を一定レベルに保つことに貢献できると考えられる。しかし、実際の AP 科目がシラバスに沿って行なわれているかどうかまではチェックすることができない。この問題を解決するため、カレッジボードは 2008 年から大学教員に高校を訪問させてもいる¹⁵。

(3) AP 科目のガイドライン

既述のとおり、大学 1-2 年次レベルの内容を扱う AP 科目は、高校の教員によって実践される。授業実践にあたり、AP 科目を担当する教員はそのカリキュラム設計から始めるが、その際に参考となるのが AP 科目ガイド (AP Course Descriptions) である。このガイドは、AP プログラムに含まれる全ての科目の AP 科目のアウトラインや、AP 科目に参加する生徒の到達目標等を示したもので、カレッジボードのウェブページからも閲覧が可能である。

ただし、これはあくまでもアウトラインに過ぎず、教員が AP 科目の授業を組み立てるにあたって必ずしもそれに従わなくてはならないわけではない。しかし、このガイドは、AP 試験

の内容も考慮した AP 科目のアウトラインが示されているため、AP 科目を担当する教員にとっては有用なものとなる。ここに示される内容は科目ごとに異なるため、以下では「AP 生物学」を例にその内容を示していくことにする。

表 3-3 AP 科目ガイドの例 (生物学)

I. 分子と細胞 (25%)	A. 生命の化学 (7%)	水 エネルギーの自発的変換 酵素
	B. 細胞 (10%)	原核生物と真核生物の細胞 細胞膜 細胞内組織
	C. 細胞エネルギー (8%)	発酵と細胞の呼吸 光合成
II. 遺伝と進化 (25%)	A. 遺伝 (8%)	減数分裂と配偶子形成 真核生物の染色体 遺伝のパターン
	B. 分子の遺伝的特徴 (9%)	RNA と DNA の構造と機能 突然変異 ウィルスの構造と複製
	C. 進化論生物学 (8%)	進化論の根拠 進化論のメカニズム
III. 生物と集団 (50%)	A. 生物の多様性 (8%)	進化論的パターン 生命の多様性に関する研究 進化論的關係
	B. 植物と動物の構造と機能 (32%)	生殖作用, 成長, 発育 環境に対する反応
	C. 生態学 (10%)	集団の発達 コミュニティと生態系 全体的な問題点

出所) College Board (2008). BIOLOGY Course Description.

<http://apcentral.collegeboard.com/apc/public/repository/ap07_bio_coursedescrip.pdf>をもとに筆者作成。

まず、「AP 生物学」科目の内容は三つの分野に分けられ、それぞれの重点領域は異なっている。すなわち、「分子と細胞 (Molecules and Cells)」が 25%、「遺伝と進化論 (Heredity and

Evolution)」が25%、「生物と集団 (Organisms and Population)」が50%であり、これらの内容をさらに詳しく示したのが表3-3である。

表3-3から、AP科目ガイドは「AP生物学」で教えるべき内容を詳細にカテゴリー化し、その割合まで明確に示していることがわかる。例えば、「分子と細胞」は、全体の25%を占めており、それはさらに3種類の下位内容から構成されている。一つ目は「生命の化学」で、その割合は7%となっている。これには、「水」、「エネルギーの自発的変換」、「酵素」といった内容が含まれる。二つ目は「細胞」で、その割合は10%である。これに含まれる内容には、「原核生物と真核生物の細胞」、「細胞膜」、「細胞内組織」がある。三つ目は「細胞エネルギー」で、その割合は8%である。これに含まれる内容は、「発酵と細胞の呼吸」、「光合成」がある。また、「生物と集団」は全体の50%を占めており、その内訳は「生物の多様性」が8%、「植物と動物の構造と機能」が32%、そして「生態学」が10%となっている。ここで、「植物と動物の構造と機能」の32%は他のカテゴリーと比較して高くなっており、「AP生物学」の中で最も重要度の高い内容であることがわかる。「植物と動物の構造と機能」の内容としては、「生殖作用」、「成長」、「発育」や、「生物の環境に対する反応」等が含まれる。

表3-3に示した「AP生物学」科目の内容とその割合は、AP試験にも反映されている。第4章でも言及することになるが、AP試験には多肢選択式の問題と記述式の問題が含まれ、「生物学」の場合、多肢選択式の問題は全体で100問となっており、出題内容の割合は表に示したとおりの割合で出題されることになる。一方、記述式の問題については、「分子と細胞」から1題、「遺伝と進化」から1題、「生物と集団」から2題出題される。このような記述式の問題には、理論的思考力や、データ分析能力を測定するものも含まれており、この点でAP科目における実験の重要度は高いと考えられる。

この点に関連して、「AP生物学」では、必ず実験を行わなくてはならない¹⁶。ガイドでは12種類の実験を行なうことを勧めており、それぞれの実験について主な内容を示している。表3-4は、そのうち7種類の実験について示したものである。

表3-4から、「AP生物学」では、「酵素の触媒反応」、「植物の色素と光合成」、「動物の行動」、「生物の遺伝」等といった幅広い分野に関する実験を行うことが求められていることがわかる。また、「動物の行動」や「溶解酸素と植物の光合成量」のように、一つのテーマにおいて複数の実験を行なうものも中には含まれている。さらに、「拡散と浸透」と「蒸散」のように内容が関連しており、知識を応用することができるものもある。

また、ガイドには、それぞれの実験を行うにあたって事前に生徒が身につけておくべき知識と実験を通して生徒が学ぶべき内容も示されている。例えば、「植物の色素と光合成」については、生徒は実験を行なう前に、光合成のプロセス、植物の色素の機能、光の波長や強さと光合成の関係等についての知識を身につけている必要があるとしている。また、この実験を通して生徒は、温度、光の強さ、光の波長を変化させ、さまざまな条件の下で実験を行い、それぞれの光合成量を比較し、その量が条件によって異なる理由を説明することができるようになるこ

とが目標として示されている。また、「動物の行動」では、生徒は実験を行なうにあたり、生物の分布と、生物の単なる運動（kinesis）と走性（taxis）の違いを理解することが求められる。そして、実験を通して、定位行動や競争的行動等の動物の行動の側面を示し、それぞれの行動の適応性を理解することが目標とされている。これらの実験を行なうことによって、データを分析する力も AP 試験で測定されるのである。

表 3-4 「AP 生物学」で行なう実験の内容

実験の種類	主な内容
拡散と浸透	細胞膜のシステムをモデルとして、拡散と浸透のプロセスについて学ぶ。また、植物の組織と関連して、水に溶かす物質の濃度を変化させることによって、水の性質を学ぶ。
酵素の触媒反応	酵素の触媒反応によって過酸化水素が水と酸素へ分解するのを観察する。また、さまざまな条件のもとで実験を行い、発生した酸素の量を測定し、それぞれの反応の大きさを測定する。
植物の色素と光合成	植物の色素細胞を分離させ、ばらばらになった葉緑体の中で起きる光合成の割合を測定する。
生物の遺伝	さまざまな遺伝子を持つショウジョウバエを交配し、その結果を分析する。ショウジョウバエ以外の生物を対象に実験を行なうことも可能である。
蒸散	「拡散と浸透」で学んだ水の性質を、植物内の水の動きに応用させて学習する。また、異なる条件の下で蒸散量を測定する。
動物の行動	A では、ダンゴムシが環境の変化にどう対応するか観察する。B では、ショウジョウバエの交尾を観察する。
溶解酸素と植物の光合成量	A では、さまざまな温度の水に溶ける酸素濃度を分析する。B では、光の強さが光合成量にどれくらい影響を与えるか分析する。

出所) College Board (2008). BIOLOGY Course Description.

<http://apcentral.collegeboard.com/apc/public/repository/ap07_bio_coursedescrip.pdf>をもとに筆者作成。

このように、「AP 生物学」には講義と実験が含まれている。その授業時間数についてカレッジボードは、1 セメスターにつき講義は 40 から 50 時間、実験については 30 から 40 時間行うことを求めている。また、「AP 生物学」の授業で用いる教科書は特に指定はされていないが、大学の生物学専攻で使用されるものを用いるべきであるとし、推奨する本を具体的に示している¹⁷。これは、大学の授業としての AP 科目という位置づけを明確にするためである。

4. AP の授業を实践する教員

(1) 教員に求められる資質

繰り返しになるが、AP プログラムは、大学 1-2 年次レベルの学習内容を高校生に高校のキャンパスにおいて高校の教員が教授するものである¹⁸。したがって、AP 科目を実施するうえで

高校の教員が果たす役割は極めて大きく、その成否には優秀な教員の存在がカギとなることは明らかである。

カレッジボードは、AP 科目の実践に関して教員の創意工夫を強く求めている。それは、生徒の学習は出来上がったカリキュラムによってよりもむしろ、情熱的な教員によって促進されるものであると考えているからである¹⁹。つまり、AP 科目を履修することによって生徒がその学力を向上させ、AP 試験で好成績をあげることによって志望大学へと円滑に移行できるかどうかは、教員の力量が強く影響を与えるとみなしているのである。

では、AP 科目を担当する教員には、具体的にどのような資質が求められるのだろうか。カレッジボードは『教員スタンダード (Teacher Standards) 2005』²⁰のなかで、AP 科目を担当する教員に対して、次の2つの専門性を求めている。

一つは、担当教科に関する専門的知識である。AP 科目は大学レベルの内容を高校生に提供するものであるため、教員にも豊富な知識が要求される。このことを踏まえ、カレッジボードは AP 教員について、関連分野の上級学位（修士学位以上）を保持しており、担当科目について非常に精通した知識を有することが望ましいとしている。実際に、AP 科目を担当する教員のうち、69.7%の教員が修士学位を取得している²¹。ただし、それは絶対的な条件というわけではなく、上級学位を持っていないと AP 科目を担当できないというわけでもない。

もう一つは、教育学の知識である。教育学の知識を備えた教員は、カリキュラムを独自に開発したり、教授法を工夫したりして、生徒の学習意欲を向上させるノウハウを身につけている。したがって、そのような教員に教えられる生徒は試験の成績が良く、大学への接続を円滑に行うことができているという²²。特に、現在のように AP プログラムが拡大し、プログラムへ参加する生徒が多様化している状況においては、生徒の個性に応じた教授法がいっそう重要となる。したがって、生徒のタイプに応じて教授法を調整し、生徒自らが積極的に大学レベルの学習を行うような指導ができる教員が求められているのである。

以上のように、AP 科目を担当する教員には高い専門性が求められていることがわかったが、新たな資格が求められているわけではないことも明らかとなった。新たな資格を保持していなくても、AP 科目を担当する教員を核として質の高い教員が多くなれば、高校全体としての質の向上へとつながる。なぜなら、AP 科目を運営する教員は AP 科目のみを担当するわけではなく、それ以外の通常の科目も担当しているため、それらの授業の質も向上させることが可能となるからである。このように、高校で AP 科目を開設し、それを担当する質の高い教員を養成することができれば、高校にとって大きなメリットとなる。

それでは、AP 科目を実践する教員に対して求められる高い質とは、どのように培われるのだろうか。もちろん、担当科目に関する専門学術雑誌を読むことによって担当科目に関する最新情報を得る等、教員自身の不断努力や教員としての経験は必要であるが、これらの他にカレッジボードは、AP 科目を担当する教員としての質を向上させるためのさまざまなサポート活動を行っているのである。

(2) 教員のトレーニング

AP 科目を実践する教員には高い専門性が求められることはすでに示したが、これらの教員の専門性を向上させたるために、カレッジボードはさまざまなプログラムを設けている。また、AP 科目を担当する教員に対して、それらのプログラムへ積極的に参加することも促している。以下では、それらのプログラムの中でも、特に AP 科目を実践する教員のためのワークショップと、夏期講習に関する具体的な内容を紹介することにした。

前者のワークショップは次のようなものである。カレッジボードは、AP プログラムで提供している科目を、「英語」、「数学・情報科学」、「芸術」、「理科」、「社会科学・歴史」、「言語」、そして「学際的科目」の7つの分野に分けて、それぞれの AP 科目を担当する教員の専門性を高めるためのワークショップを設けている²³。このワークショップには、AP 科目を円滑に進行させるためのテクニックや、その際に用いるべき効果的な方法についての専門家による講義と、ワークショップに参加する教員同士で行う実践の仕方についてのディスカッションが含まれている。ディスカッションでは、参加教員自身が実際に AP 科目の授業で用いている資料の紹介等を行い、教員は AP 科目の授業実践に関する有意義な情報を共有することができるのである。また、他の高校において同じ AP 科目を担当する教員が行っている効果的な教授法について意見交換を行うことによって、よりよい教授法を生み出す効果も期待できるのである。

このワークショップが行われる日程や場所は科目によって異なっている。例えば、2009 年における「英語・作文」のワークショップは、2月7日の午前8時から午後3時まで、カリフォルニア州ハリウッドにあるバーンスタイン高校 (Bernstein High School) において実施される。費用は、カレッジボードの会員は 150 ドルであるが、非会員の場合は 175 ドルとなる²⁴。この日程以外にも、年間を通してワークショップは科目ごとに何回も実施されているが、地理的要因によりワークショップに参加できない教員もいることが考えられる。このような教員に配慮し、カレッジボードはオンラインでワークショップの内容を閲覧できる環境を整えている。オンラインによる参加の場合、その料金はカレッジボード会員が 45 ドル、非会員が 55 ドルとなっている。

カレッジボードは AP 科目を担当する教員の専門性を高めるために、夏期講習も行っている。夏期講習は 30 時間以上行われ、こちらの日程についても科目によって異なっている。例えば、2009 年における「AP 生物学」の夏期講習については 6 月 22 日午前 8 時に開始して 6 月 25 日午後 4 時に終了する予定である。場所は、カリフォルニア州ベルモント (Belmont) にあるパシフィック AP 研究所 (Pacific AP Institute) である。参加料金は、30 時間の講習で 700 ドルである。ただし、実験に関する講習についても受講する場合や、締め切り (3 月 31 日) 後に申し込みをする場合は、50 ドルの追加料金を払う必要がある²⁵。このように、資格等の形式よりも、研修の充実によって、AP 科目を担当する教員の質を向上させようとするカレッジボードの戦略がここから見て取れるのである。

5. おわりに

以上本章では、AP科目の具体的内容と、それを担う教員研修についてみてきた。AP科目は普通の授業科目のなかに組み込まれていて、特別な日を設定して授業をしているわけではないこと、またそれを担当する教員は、特に大学から教員が出向しているわけではなく、当該高校に勤務する高校教員であることもわかった。

現在 AP プログラムは全米に浸透し、多くの生徒が参加している。さらに、カレッジボードや連邦政府、そしてその他のさまざまな機関が AP プログラムをより発展させるための支援策を講じていることに鑑みると、同プログラムへ参加する生徒の数はこれから更に増加することが考えられる。それぞれの高校で開設する AP 科目の数も増えるであろう。しかし、AP プログラムを拡大し、その科目数を増加させていけば、当然のことながら質の問題に突き当たる。

その対策の一つとしてカレッジボードが講じていることは、AP 科目のシラバスを提出させ、審査することである。この審査をパスすることによってその AP 科目は公的に承認されたことになり、生徒の成績証明書での AP 履修歴も意味をもつようになるのである。

もちろん、シラバスよりも重要な点は、AP 科目を担当する教員の質である。カレッジボードは、彼らの専門性を高めるために、ワークショップや夏期講習の機会を多く設け、さらにワークショップに関しては、参加できない人にもオンラインでその内容を閲覧できるよう有料で公開している。これらによって教員の質を少しでも向上させ、それが AP 科目の授業実践を改善させ、さらには高校教育全体を向上させることになるとカレッジボードは考えているのである。

ただし、審査制度によって認定された AP 科目を開設していない高校でも、AP 試験を実施することが可能であるという点は重要である。その AP 試験については次章でみていくことにする。

【注】

- 1 A, B, C, D 高校でのインタビュー調査より。
- 2 C 高校校長へのインタビュー調査より。
- 3 B High School (2004). *2004-2005 Student Handbook*.
- 4 A 高校で収集した資料より。
- 5 College Board (2008). *The 4th Annual AP Report to the Nation*.
- 6 College Board (2008). Offering AP.
<<http://professionals.collegeboard.com/k-12/assessment/ap/offer>>
- 7 College Board (2007). *Advanced Placement Report to the Nation 2007*.
- 8 College Board (2008). Review Process.
<http://apcentral.collegeboard.com/apc/public/courses/teachers_corner/51268.html>

- ⁹ *The Chronicle of Higher Education*, November 16, 2007. Two-Thirds of AP Courses Pass Official Muster.
- ¹⁰ College Board (2008). Review Process.
<http://apcentral.collegeboard.com/apc/public/courses/teachers_corner/51268.html>
- ¹¹ *Education Week*, November 29, 2006. College Board Readies Plans For AP Audits.
- ¹² *Education Week*, July 27, 2005. To Maintain Rigor, College Board to Audit All AP Courses.
- ¹³ Ibid.
- ¹⁴ *Education Week*, November 29, 2006. College Board Readies Plans For AP Audits.
- ¹⁵ Ibid.
- ¹⁶ College Board (2008). BIOLOGY Course Description.
<http://apcentral.collegeboard.com/apc/public/repository/ap07_bio_coursedesc.pdf>
- ¹⁷ Ibid.
- ¹⁸ 川口仁志「米国のアドバンスト・プレースメント・プログラム」『日本比較教育学会紀要』10号, 1984年, 96頁。
- ¹⁹ College Board (2008). 2005 AP Teacher Standards.
<http://apcentral.collegeboard.com/apc/public/repository/ap05_teacherstandards_46509.pdf>
- ²⁰ Ibid.
- ²¹ Ibid.
- ²² Ibid.
- ²³ College Board (2008). Workshop and Summer Institutes.
<<http://professionals.collegeboard.com/prof-dev/workshops>>
- ²⁴ College Board (2008). AP Central-Institutes & Workshops.
<<http://apcentral.collegeboard.com/apc/Pageflows/InstitutesAndWorkshops/VwDetailEvent.do?eventid=5299>>
- ²⁵ PACIFIC AP INSTITUTE (2008). Registration Fees. <<http://www.pacificap.org/cost.htm>>

第4章 AP試験と結果

小野寺 香
(東北大学)

1. はじめに

高校で AP 科目を履修した生徒たちにとって次に待っているものは AP 試験である。どんな試験であれ、試験を受けること自体は誰にとっても緊張を強いられ、気持ちのいいものではない。ただし、この試験は、単に自分の力が大学レベルに達しているのかどうか明らかになるだけではなく、大学入学者選抜時において、また大学入学後の単位認定という点においてその後に大きく影響するとりわけ重要な試験となる。特に AP 試験の成績によって大学の単位が認定されれば、生徒にとっては時間的にも経済的にも節約することができる。また、カレッジボードにとっても AP 試験の結果は高校生の学力の把握や AP プログラムの改善に役立つ有益なデータを提供してくれる大事なものとなる。

この AP 試験は毎年 5 月に実施される。第 2 章で言及したように、現在 AP プログラムへの参加形態は多様化しているが、どのようなプロセスを経ようとも、その成果を測定するのは全国共通の AP 試験であるという点で公平性を保っている。本章では、生徒にとってもカレッジボードにとっても重要なこの AP 試験について、そのプロセスや試験内容等を詳細に言及していくことにする。

2. AP 試験の流れ

(1) 受験の手続き

AP 試験を受けるにあたり、高校で AP 科目を履修することがその前提条件とはなっていないことは注意する必要がある。したがって、ホームスクールの生徒や AP 科目を開設していない高校に在籍する生徒でも AP 試験を受けることは可能である。ただし、AP 試験の申し込みについては学校単位で行われており、保護者や生徒が直接カレッジボードに申請することはできないため、例えばホームスクールの生徒や AP 科目を開設していない高校に通う生徒の場合は、近隣の高校を通して申し込むことになる¹。学校によっては外部者の AP 試験の代理申請を受け付けないところもあるので、そのような場合はその手続きを行ってもらえる高校を各自で探す必要がある。また、AP 試験の受験者の少ない学校は、近隣の学校と共同で試験を実施することもある²。AP 試験の申込みの最終締め切りは 4 月 10 日であり、この日を過ぎると申し込む際に 50 ドル余分に支払わなくてはならなくなる。また、4 月 17 日以降は申し込みを一切受け

付けないので注意が必要である³。

高校で AP 試験を実施するにあたって重要な役割を果たすのが、AP コーディネーターである。第 3 章で言及したとおり、AP コーディネーターは高校における AP プログラムの責任者であり、AP 試験の申込み、AP 試験監督官の手配、受験料の徴収等を行っている。また、ホームスクールの生徒や AP 科目を開設していない高校に通う生徒に対して AP 試験の日時や場所等の必要な情報の提供や、受験料の徴収も行う。その際、管理費として通常よりも高い受験料を彼らに対して要求することもできる⁴。

2008 年における AP 試験の受験料は 1 科目につき 84 ドルであり、そのうち 8 ドルは管理費として各高校に納められたが、2009 年には 86 ドルへと変更される予定である⁵。当然のことながらこの額は決して安いものではない。

AP 試験当日、受験者が筆記用具以外に用意するものは、時計（受験会場に時計がない場合があるため）、電卓（「数学」や「化学」、「物理学」、「統計学」の AP 試験を受験する際に必要となる）、ID カード（在籍高校が AP 試験を実施しない生徒は必要）となっている。AP 試験の解答用紙には、受験予定の大学名も記入できる。その場合、生徒の AP 試験の成績は、記入された大学へ郵送されることになるが、AP 試験受験の際に解答用紙に書かなかった大学へ成績を後で送付することも可能である（ただしその場合は有料となる）⁶。

（2）受験料減額措置

第 3 章で言及したように、高校で開設する AP 科目を履修するにあたって特別に授業料が課されることはないが、AP 試験には 1 科目ごとに 84 ドルの受験料を支払わなければならない。しかし、これが負担となって AP 試験を受けられない生徒も出てくる。そのため、カレッジボードは主にランチプログラム（National School Lunch Act）に準拠して、特に経済的に困難であると判断される生徒については、1 科目につき 22 ドルの受験料減額措置を講じている。またそのような生徒に関しては、高校側も管理費としての 8 ドルを徴収しない。したがって、2009 年においてそれに該当する生徒は 1 科目につき 56 ドルの受験料を支払うことで AP 試験を受験することができることになる⁷。

生徒が受験料の減額措置を受けるためには、在学する高校の AP コーディネーターが次の二つの手続きを行う必要がある。まず、受験料減額措置の対象となる生徒の答案用紙にオプション 1 かオプション 2 のマーク欄を埋める。オプション 1 に該当するのは、家族収入が貧困収入レベル（poverty income level）の 185%を超えない生徒である。そしてオプション 2 に該当する生徒は、家族収入が貧困収入レベルの 185%は超えるが 200%は超えないことを意味する。次に、受験料減額の対象となる生徒が受験する AP 試験の数を示し、カレッジボードへ事前に報告する必要がある。

ただし、高校が AP 受験料減額措置の対象となる生徒を決定する際にランチプログラム以外の基準を用いることを希望する場合は、以下に示す基準が連邦教育省（U. S. Department of

Education) によって認められている。

- ・ 家族が社会保障法タイトルIVパート A のもとで援助を受けている生徒。
- ・ 社会保障法タイトル XIX の低所得者医療扶助制度のもとで医療補助を受けている生徒。
- ・ 連邦調査局 (U. S. Census Bureau) が決定した貧困レベル (poverty level) の 150% を家族収入が超えない生徒。

表 4-1 は、連邦調査局が決定した貧困レベルの 150%にあたる家族年収を、家族の人数ごとに示したものである。

表 4-1 貧困レベルの 150%にあたる年収額

家族の人数	家族の年収	家族の収入 (アラスカ州)	家族の収入 (ハワイ州)
1 人	1 万 5,315 ドル	1 万 9,155 ドル	1 万 7,625 ドル
2 人	2 万 535 ドル	2 万 5,680 ドル	2 万 3,625 ドル
3 人	2 万 5,755 ドル	3 万 2,205 ドル	2 万 9,625 ドル
4 人	3 万 975 ドル	3 万 8,730 ドル	3 万 5,625 ドル
5 人	3 万 6,195 ドル	4 万 5,255 ドル	4 万 1,625 ドル
6 人	4 万 1,415 ドル	5 万 1,780 ドル	4 万 7,625 ドル
7 人	4 万 6,635 ドル	5 万 8,305 ドル	5 万 3,625 ドル
8 人	5 万 1,855 ドル	6 万 4,830 ドル	5 万 9,625 ドル

出所) College Board (2008). Advanced Placement Program (AP) 2008 Fee Reduction Policy.

<<http://professionals.collegeboard.com/profdownload/2008-Fee-Reduction-Policy.pdf>>をもとに筆者作成。

上記表 4-1 では、8 人以下の家族についてのみ、その貧困レベルの 150%にあたる年収を示しているが、家族の人数が 8 人を超える場合、1 人増えるごとにアラスカについては 6,525 ドルを、ハワイについては 6,000 ドルを、その他の州については 5,220 ドルを追加していけば、その額が貧困レベルの 150%にあたる⁸⁾。

また、アメリカ国内のほとんどの州で、このようなカレッジボードによる受験料減額を補うための補助金を設けている。その補助金のシステムは州ごとに異なるが、それに関する情報は毎年春に各高校の AP コーディネーターに通知される。また、カレッジボードのウェブサイトでも閲覧可能である。例えばカリフォルニア州教育局 (California Department of Education) では、次の二つのカテゴリーに該当する高校生に対して、AP 受験料の補助金を交付している。一つ目は、カレッジボードによる AP 受験料減額の対象となっている生徒に対してである。彼らに対して、カリフォルニア州は AP 試験 1 科目ごとに最大 49 ドルを補助している。二つ目は家族の収入が貧困線の 185%は超えるが 200%には満たない生徒に対してである。カリフォ

ルニア州は、これらの生徒に対して AP 試験 1 科目ごとに最大 71 ドルを補助している⁹。

さらに、連邦政府は毎年 AP プログラムに関する補助金として、AP 試験受験料減額プログラム (Advanced Placement Test Fee Program) を各州に交付している。これは、低所得層の多くの生徒を AP プログラムに参加させるために補助金を交付している州の財源を補うものである¹⁰。このような連邦による補助金の効果は大きく、これによって AP プログラムへ参加する低所得層の生徒数は年々増加してきた。表 4-2 は、AP 試験を受けた公立高校に通う低所得層の生徒数の推移を表したものである。

表 4-2 AP 試験を受けた公立高校に通う低所得層の生徒数

年度	AP 試験を受けた低所得層の生徒数
1999	87,149
2000	92,083
2001	105,138
2002	132,459
2003	157,334
2004	187,691

出所) U.S. Department of Education (2008). ESEA: Advanced Placement – FY 2006.
<<http://www.ed.gov/about/reports/annual/2006plan/edlite-g2eseaadvancedplace.html>>

表 4-2 から、公立高校において AP 試験を受ける低所得者層の生徒数が、一貫して増加傾向にあることがわかる。1999 年には AP 試験を受験する低所得層の生徒の数は 8 万 7,149 人であったが、2001 年には 10 万人を超えている。また、2002 年には 13 万人まで達し、2004 年には 18 万 7,691 人の生徒が AP 試験を受験している。1999 年から 2004 年までの 5 年間で、AP 試験を受験する低所得層の生徒の数は 2 倍以上増加しているのである。このように、カレッジボード、州、そして連邦政府は AP 試験の受験料を減額することによって、低所得層の生徒にもその機会を提供するという重要な役割を果たしているのである。

(3) AP 試験のスケジュール

AP 試験は、毎年 5 月に全国一斉に実施される。全部で 37 の AP 科目があるが、カレッジボードは 2 週間かけて、それら全ての科目について試験を実施する。ただし、「2-D デザイン」、「3-D デザイン」、「線画」の 3 科目はスタジオアートとしてまとめて同じ時間内に試験が行われる。2008 年の AP 試験は 5 月 5 日から 5 月 16 日までの 2 週間にわたって実施された。その具体的なスケジュールを示したのが表 4-3 である。

表 4-3 AP 試験のスケジュール (2008 年)

	午前の部 (8 時)	午後の部 (12 時)	午後の部 (14 時)
5 月 5 日 (月)	アメリカ政治学	比較政治学 フランス語	
5 月 6 日 (火)	情報科学 A 情報科学 AB スペイン語	統計学	
5 月 7 日 (水)	微積分 AB 微積分 BC	中国語・文化	
5 月 8 日 (木)	英文学・作文 ドイツ語	日本語・文化 フランス文学	
5 月 9 日 (金)	アメリカ史	ヨーロッパ史 スタジオアート	
5 月 12 日 (月)	生物学 音楽理論	物理学 B 物理学 C ; 力学	物理学 C: 電気学・磁気学
5 月 13 日 (火)	環境科学 化学	心理学	
5 月 14 日 (水)	イタリア語・文化 英語・作文	芸術史	
5 月 15 日 (木)	マクロ経済学 世界史	ミクロ経済学	
5 月 16 日 (金)	人文地理学 スペイン文学	ラテン文学 ラテン; ウェルギリウス	

出所) College Board (2008). Exam Calendar and Fees.

<<http://apcentral.collegeboard.com/apc/public/exam/calendar/index.html>>をもとに筆者作成。

表 4-3 から、1 日に行われる AP 試験の科目数は 3 つから 5 つとなっていることがわかる。また、同じ分野の科目は同じ日に実施されていることもわかる。例えば 5 月 7 日の午前中には「微積分 AB」と「微積分 BC」の AP 試験が行われ、5 月 9 日の午前には「アメリカ史」、午後には「ヨーロッパ史」の試験が実施された。また、5 月 12 日の午後には、「物理学 B」、「物理学 C: 力学」、「物理学 C: 電気学・磁気学」の試験が行われている。AP 試験の開始時刻は、午前の部については 8 時からとなっている。午後の部についてはほとんどの科目が 12 時に開始し、「物理学 C: 電気学・磁気学」に関しては 14 時から開始する。このように AP 試験の開始時刻のみ明確に設定されているのは、試験時間が各科目によって異なっているからである。概

して言えば、AP 試験の時間は 2 時間から 3 時間とかなり長いものとなっている。

原則として、受験者はあらかじめ定められた AP 試験の日程で受験するが、やむを得ない事情があれば、後日行われる追試験を受けることができる。その場合は追加料金として 40 ドルを支払う必要がある。ただし、追加料金を支払わずに追試験を受けられる場合もあり、それは AP 試験の日程が州テストや IB の試験日程と重なった場合、緊急の怪我や病気にかかった場合、選挙や自然災害によって学校が閉校となった場合、そして受験予定の複数の AP 科目の試験日程が重複した場合である。一方、追加料金 40 ドルを支払う必要があるのは、州テストや IB 以外の試験の日程と AP 試験の日程が重複した場合、申し込みの過程でミスが生じた場合、地方の決定により学校が閉校する場合である。ただし、そのような場合でも、AP 受験料減額措置の対象となっている生徒に関しては、追加料金の 40 ドルを負担する必要はない。

2008 年度の AP 追試験は、5 月 20 日から 22 日までの 3 日間で実施された。その具体的なスケジュールを示したのが表 4-4 である。

表 4-4 AP 追試験のスケジュール (2008 年)

	午前の部 (8 時)	午後の部 (12 時)	午後の部 (14 時)
5 月 20 日(水)	ドイツ語 マクロ経済学 音楽理論 統計学 アメリカ政治学 アメリカ史	比較政治学 英語・作文 環境科学 フランス語 ミクロ経済学 世界史	
5 月 21 日(木)	微積分 AB 微積分 BC 情報科学 A 情報科学 AB フランス文学	化学 中国語・文化 ヨーロッパ史 人文地理学 スペイン語	
5 月 22 日(金)	英文学・作文 イタリア語・文化 日本語・文化 物理学 B 心理学	芸術史 生物学 ラテン文学 ラテン；ウェルギリウス 物理学 C；力学 スペイン文学	物理学 C：電気学・磁気学

出所) College Board (2008). Late-Testing Schedule.

<<http://professionals.collegeboard.com/testing/ap/coordinate/late/schedule>>をもとに筆者作成。

表 4-4 から、AP 追試験は非常にタイトなスケジュールで実施されていることがわかる。通常スケジュールでは、1 日に 3 から 5 科目の AP 試験が行われていたのに対し、追試験では 1 日につき 10 科目あるいは 12 科目が実施されている。ただし、試験の開始時刻については通常スケジュールと同様で、午前の部は 8 時に開始する。午後はほとんどの科目の試験は 12 時に開始し、「物理 C：電気学・磁気学」に関しては 14 時に試験が開始するようにスケジュールが組まれている。

AP 試験を実施する場所についてはそれぞれの高校が決定し、高校の教室や図書館、あるいはカフェテリアで行われる場合がほとんどである。しかし、高校によっては、例えばコミュニティセンター、教会、ホテル、公共図書館、あるいは近隣の大学を利用する場合もある。

3. AP 試験の管理

(1) AP 試験の作題者

AP 試験の内容は、筆記試験とポートフォリオの二つに大別される。筆記試験については、「2-D デザイン」、「3-D デザイン」、「線画」の 3 科目を除く全ての科目の AP 試験が該当し、基本的に多肢選択式の問題と記述式の問題を含んでいる。ただし、言語科目の AP 試験については筆記試験に加えてスピーキング、「音楽理論」の AP 試験については音を聞き取って歌うテストも行われる。

多肢選択式の問題は、ほとんどが 5 択あるいは 4 択であり、大学教員が作題している。一方、記述式の問題は AP 開発委員会 (AP Development Committees) のメンバーが作題している。この AP 開発委員会は、通常 6 人から 8 人の高校教員と大学教員から構成された組織である。またこの委員会は、記述式問題の作成のみならず、多肢選択問題と記述問題を合わせた AP 試験全体をチェックし、それが AP 科目の目的に沿っていて一貫性のあるものとなっているかどうかの審査も行う。

一方、ポートフォリオによって評価を行う AP 科目は、「2-D デザイン」、「3-D デザイン」、「線画」の 3 科目である。ポートフォリオを提出する際の基準は、AP 開発委員会が決定している。このように、筆記試験であれポートフォリオであれ、全ての AP 試験は大学の教員と AP 科目を担当する高校の教員が連携して綿密に作題していく。そのため、AP 試験は高校生が大学レベルの学力を有しているか否かを判定することが可能であると言えるのである¹¹。

(2) AP 試験の採点と評価

筆記試験を行う AP 試験に関して、多肢選択式問題の採点はコンピュータによって行われる。その配点は 1 問 1 点となっているが、総合点に関しては、5 択の問題については正答数から誤答数の 4 分の 1 を引いて算出している。

$$(\text{正答数}) - 0.25 \times (\text{誤答数}) = \text{総合得点}$$

ここで誤答数の 4 分の 1 を減ずるのは、おざなりに選択した場合を考慮し平均して 0 になる

ようにするためである。選択肢が5つあるとき、その中から適当に解答を選べば5分の1が正答で、5分の4が誤答である（例えば100題ならば20正答、80誤答）。これを上のように計算すれば、 $20 - 0.25 \times 80 = 0$ で、0点になる。この方法は、「当てずっぽうに選んでも20点はもらえる」という受験生の考えを改めさせ、自信をもって解ける問題だけを答えさせるという優れた面をもっている¹²。同様に、4択の問題の総合点数の算出にあたっては、正答数から誤答数の3分の1を引いている。こうして、適当に解答した問題が、多肢選択式問題の総合得点に影響を与えないようにしているのである。

一方、記述問題等は、AP採点官（AP Reading）が採点を行っている。このAP採点官とは、およそ1万人の大学教員とAP科目を担当する高校教員から構成されており、彼らは性別、人種、教員としての経験年数等のバランスを考慮して選出される。彼らは、500万以上のエッセイ、広範囲にわたる問題、テープに録音された解答、そしてスタジオアートのポートフォリオを評価するために、毎年6月に集合する。そのチーフ（Chief Leaders）は、AP試験の採点に関する経験が豊富な大学の教員が務め、AP試験の採点が公平で一貫性を保つことに責任を負う。また、採点官のメンバーの選出や採点基準の改善、採点プロセスの監督、試験の素点をAP試験成績（1から5までの5段階評価）へ換算する尺度の決定も行う。

採点基準については、まずはAP開発委員会がそれぞれの科目の記述式問題に関する採点基準のガイドラインを作成する。その後、採点指揮者とAPの専門家（AP Content Experts）が集まり、ランダムに選んだ生徒の解答を実際に採点することによってガイドラインの改善を行い、最終的に決定する。AP試験の素点を1から5までの5段階評価に換える尺度については、毎年、記述問題の採点が終わると、その年の試験に関する統計的データを表し、どのくらいの素点がAP試験の成績の1から5に相当するかということを決定する。AP試験の成績を決定する際に、多肢選択式の問題と記述式の問題におかれる比重は科目によって異なるが、多くの場合はほぼ等しくなっている。多肢選択式問題の中には、その年と翌年の点数の統計的標準化を行うために、毎年出題されるものもある。

カレッジボードはAP試験の成績に関して次のような見方をしている。まず、AP試験の結果が5であれば、それは大学における成績で言えばAに該当し、同様に4はA-、B+、あるいはBに該当し、そして3はB-、C+、あるいはCに該当する¹³。つまり、カレッジボードはAP試験で3以上の成績を収めた生徒については、大学レベルに達していると判断しているのである。しかし、第5章で言及するが、基本的にAPプログラムに対する各大学の方針は大学ごとに決定されるため、単位を認定するAP科目や成績は大学によって異なるのである。

4. AP試験の問題

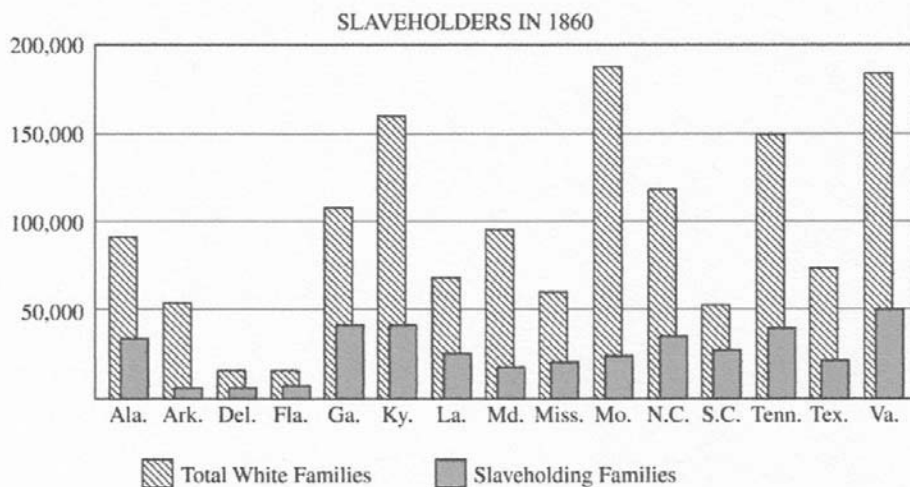
（1）「APアメリカ史」の試験

ほとんどの科目のAP試験は、多肢選択式と記述式の問題から構成される筆記試験であるということは既に示したが、実際に出題される試験は具体的にどのようなものであろうか。ここ

では、2007年に受験者の数が最も多かった「アメリカ史」について具体的にみていくことにする。

「AP アメリカ史」試験の問題例（多肢選択式）

1. Alexander Hamilton's economic program was designed primarily to
- (A) prepare the United States for war in the event Britain failed to vacate its posts in the Northwest
 - (B) provide a platform for the fledgling Federalist Party's 1792 campaign
 - (C) establish the financial stability and credit of the new government
 - (D) ensure northern dominance over the southern states in order to abolish slavery
 - (E) win broad political support for his own candidacy in 1792



4. The graph above refutes which of the following statements?
- (A) There were more Black people than White people in the antebellum South
 - (B) Most southern families held slaves
 - (C) Most southern families lived in rural areas
 - (D) The southern population was much smaller than that of the North
 - (E) Slaveholders were an extremely powerful group

出所) College Board (2008). UNITED STATES HISTORY Course Description.

<http://apcentral.collegeboard.com/apc/public/repository/ap07_ushist_coursedes.pdf>

「AP アメリカ史」の試験の出題範囲は、ヨーロッパ人による植民から現在に至るまでのアメリカの政治組織やその動向、公共政策、社会的経済的变化、そして外交関係等にわたっているが、主に 19 世紀から 20 世紀に関する問題が多く出題される傾向にある。試験時間は、全体で 3 時間 5 分である。そのうち多肢選択式の問題にあてられるのは 55 分間で、80 題の問題が出題される。

上記の例から明らかなおりに、「AP アメリカ史」試験の多肢選択式の問題は 5 択となっており、問題 1 のように知識を問うものが多いが、中には問題 4 のように、グラフをみて正しくデータを読み取り、分析する能力を測定する問題も含まれている。「AP アメリカ史」試験の成績が 3 であるためには、多肢選択式問題の 60% の問題に正しく解答しなくてはならない。

一方、記述式問題の時間は 130 分間で、その内容はパート A からパート C までの 3 部分に分かれている。パート A は文書を題材としたエッセイ問題 (document-based essay question : DBQ) で、全ての生徒が解答しなくてはならない。パート A では、生徒がエッセイを書くにあたって参考となる A から J の 10 の文書が示されており、生徒はこれらの文書に示された内容と、自分自身が持っている知識を総合して首尾一貫したエッセイを書く。DBQ の解答時間は 45 分間である。パート A の具体的な問題は、以下のとおりである。

「AP アメリカ史」試験の問題例 (記述式問題パート A)

1. フランクリン・D・ルーズベルト政権が打ち出した大恐慌に対する政策を分析せよ。これらの政策は、どのような点で効果があったか。また、ルーズベルト政権は連邦政府の役割をどのように変えたか。以下に示す A から J の文書の内容と、1929 年から 1941 年までの時代に関して自分が有する知識を活用して解答せよ。

出所) College Board (2008). UNITED STATES HISTORY Course Description.

<http://apcentral.collegeboard.com/apc/public/repository/ap07_ushist_coursedescript.pdf>をもとに筆者作成。

問題の指示にもあるように、パート A の問題には A から J の文書が示されてある。それには、ルーズベルト政権に関する社説や当時の時代背景を説明するラジオ放送の内容等がある。受験者は、これらの文書から読み取ることができるさまざまな情報を取り入れながら答案を作成していくのである。

一方、パート B とパート C には、それぞれ 2 つの問題が含まれている。受験者は 70 分の間にパートごとに一題ずつ選択して解答する。その具体的な内容として、パート C の問題を示す。以下のとおり、ここでは問題 4 か問題 5 のどちらか一方に解答すればよいことになる。また、パート C では、パート A のようにエッセイを書くのに参考となる文書は示されないため、自分の持っている知識を総動員して解答することになる。

「AP アメリカ史」試験の成績に占める多肢選択式問題と記述式問題の点数の比重は 50% ず

つである。また、記述式問題についてはパート A の DBQ は 45% を占め、パート B とパート C の二つのエッセイは合わせて 55% である。

「AP アメリカ史」試験の問題例（記述式問題パート C）

4. 南北戦争が政治的・経済的發展に与えた影響を、南部、北部、西部の三つの地域の中から二つを選んで説明せよ。時代は、1865 年から 1900 年までの間に焦点をあてて解答せよ。
5. 人種関係、女性の役割、消費者運動の三つの中から二つに着目して 1920 年代と 1950 年代のアメリカ社会を比較せよ。

出所) College Board. (2008). UNITED STATES HISTORY Course Description.

<http://apcentral.collegeboard.com/apc/public/repository/ap07_ushist_coursedescript.pdf>をもとに
筆者作成。

(2) 「AP 微積分」の試験

AP プログラムの数学科目には「微積分 AB」と「微積分 BC」があるが、「微積分 BC」は「微積分 AB」の応用科目である。それらの試験は、「アメリカ史」の試験と同様に、「微積分 AB」と「微積分 BC」の AP 試験も 2 つのセクションから構成されている。セクション I は、さまざまなトピックに関する多肢選択式の問題となっており、セクション II は、問題解決能力を測る記述式の問題となっている。試験時間は、全体で 3 時間 15 分である。そのうち、多肢選択式の問題は 105 分間で 45 問が出題される。多肢選択式の問題はパート A とパート B に分かれており、パート A では 55 分間に 28 問が出題される。ここでは電卓を使用することはできない。一方、パート B では 50 分間に 17 問が出題され、電卓の使用が認められている。

また、記述式の問題もパート A とパート B の 2 つに分かれている。試験時間は全体で 90 分間となっており、合計 6 題が出題される。パート A では 45 分間に 3 問が出題され、電卓の使用が認められている。パート B も 45 分間に 3 問が出題されるが、電卓の使用は認められない。また、試験開始から 45 分が経過し、パート B の問題を解くべき時間になってからもパート A の問題を解答することは認められるが、その際に電卓を使用することはできない。

AP 試験の成績は、多肢選択式問題と記述式問題に同じ比重が置かれる。また、「微積分 AB」の AP 試験に関しては、その AP 試験の得点以外にサブスコア (subscore grade) も取得できる。それは「微積分 BC」の試験を受けた生徒の「微積分 BC」試験における「AB」の内容にあたる部分 (試験のおよそ 60%) の成績に基づいて決定されることになる。

(3) 「AP 日本語・文化」の試験

「AP 日本語・文化」の試験は、日本の文化に関する知識やリスニング力、プレゼンテーション力等を含む日本語でのコミュニケーション能力を測ることを目的としている。試験は全てコンピュータによって管理される。つまり、生徒はスクリーン上で日本語を読み、ヘッドフォ

ンを通して聞き、キーボードで書き、マイクロフォンに向かって話すのである。受験者は試験中にメモを取るために紙を用いることはできる。これは採点には影響を与えないが、試験の終了と同時に試験監督によって回収される。試験時間は、全体で 2 時間 15 分である。試験内容は、セクション I とセクション II の 2 つに分かれている。セクション I には、日本語のリスニング力を測定するパート A と、リーディング力を測定するパート B がある。また、セクション II は、ライティング力を測定するパート A と、スピーキング力を測定するパート B に分かれている。表 4-5 は、試験内容をパートごとに示したものである。

表 4-5 「AP 日本語・文化」の試験内容

セクション		問題の内容	問題数	比重	試験時間
セクション I	パート A : リスニング	日本語による公共アナウンスやラジオ放送、会話などを聞き、その後質問に答える。	30 から 35 題	25%	20 分
	パート B : リーディング	日本語で書かれた E メールや手紙、旅行冊子などを読み、その後質問に答える。	35 から 40 題	25%	60 分
セクション II	パート A : ライティング	日本人と会話をしている場面を想定し、制限時間内に日本語で返事を書く。	6 題	12.5%	10 分
		何か二つの物事を比較し、その類似点や相違点などを日本語で説明する。	1 題	12.5%	20 分
	パート B : スピーキング	日本人と会話をする場面を想定し、制限時間内に日本語で返答する。	4 題	12.5%	3 分
		日本の文化について独自の意見を述べるプレゼンテーションを行う。	1 題	12.5%	7 分

出所) College Board (2008). JAPANESE LANGUAGE AND CULTURE Course Description.

<http://apcentral.collegeboard.com/apc/public/repository/ap08_japanese_coursedescrip.pdf>をもとに筆者作成。

セクション I に含まれるパート A では、受験者は日本語で話される公共アナウンスやラジオ放送の一部を聞き、それに関する質問に対する答えとして正しいものを四つの選択肢の中から 1 つ選んで解答する。リスニングの問題は、30 から 35 題が出題され、試験時間は 20 分となっている。パート B では、日本語で書かれた E メールや手紙を読み、それからその内容に関する質問に答える。解答は、四つの選択肢の中から正しいものを 1 つ選ぶ形式となっている。リーディングの問題は、35 から 40 題出題され、試験時間は 60 分間である。セクション I の試験時間は 1 時間 30 分で、合計 70 問が出題される。また、AP 試験の成績を決定する際に置かれる比重は、パート A もパート B もそれぞれ 25% となっている。

セクションⅡは、全体的に生徒が主体となって日本語を書いたり話したりする能力を測定する。したがって、セクションⅠのように複数の選択肢の中から一つ選ぶ形式ではなく、自由に書き、話す内容となっている。また、セクションⅡでは、それぞれのパートごとに大きく2つの問題が含まれている。パートAでは、まず、日本人と会話をしている場面を想定し、相手からの質問に日本語で答える問題がある。受験者は、相手の質問の意図を理解し、適切な返事をするのが求められる。問題は6題で、解答の制限時間は1題につき90秒となっている。問題の例は以下に示す。

「AP 日本語・文化」試験の問題例 (セクションⅡパート A)

1. Respond.

それでは、よろしくお願ひします。最初の質問です。大学を卒業してから、どんな仕事をしたいと考えていますか？

2. Respond.

そうですね。では、次の質問です。大学は何を専門に勉強しようと思っひていますか？

3. Describe a specific example.

わかりました。次の質問ですが、社会に出てからあなたがやりたい仕事のために今、どんなことをしていますか？

4. Explain your opinion.

わかりました。次の質問にいきましょう。もし、大学に入る前に1年間休みがとれるとしたら、どんなことをしたいですか？

5. Justify your opinion.

あなたは、高校生が卒業した後、すぐに大学に入ったほうがいいと思ひますか。それとも大学に入る前に1年間休んだほうがいいと思ひますか？

6. Ask a specific question.

ありがとうございました！ところで、日本の大学について何か質問がありますか？

出所) College Board (2008). JAPANESE LANGUAGE AND CULTURE Course Description.
<http://apcentral.collegeboard.com/apc/public/repository/ap08_japanese_coursedes.pdf>

次に、パート A に含まれるもう一つの問題は、2つの物事を比較し、その類似点や相違点等を日本語で説明するというものがある。例えば、日本語を学習することと他の科目を学習することを比較し、そこから見出されるものについて日本語で書くといった内容である。解答する際、個人的経験に基づいてそれぞれの面を少なくとも3つ挙げ、日本語と他の科目を学ぶことの類似点や相違点を明確にする必要がある。また、自分が好きな方を述べてその理由も示さなくてはならない。字数は300字から400字以上で、制限時間は20分となっている。パート A に含まれるライティングの問題は現在7題であるが、2009年から4題に減少する。この変更は、「中国語・文化」のAP試験についても同様であり、ライティングの問題数が7から4に減少する¹⁴。

一方、パート B では、日本人と会話をする場面を想定して相手との会話を行う。受験者が解答するのは4題で、録音の制限時間は20秒である。合計時間は3分となっている。以下に示す問題の例は、店長である山田さんとパートの仕事について話している場面であり、受験者は山田さんとの会話がスムーズに進むような返答を行うよう心がける必要がある。

「AP 日本語・文化」試験の問題例（セクションIIパートB）

山田：初めまして、ファミリーマーケットの山田です。

20秒

山田：今こちらでさがしているのは週末も来られる人なのですが、来られる曜日と時間を教えてください。

20秒

山田：どこかスーパーマーケットのような所で働いたことがありますか。アルバイトの経験を話してください。

20秒

山田：そうですね。それではこのスーパーマーケットの仕事について何か質問をしてください。

20秒

出所) College Board (2008). JAPANESE LANGUAGE AND CULTURE Course Description.

<http://apcentral.collegeboard.com/apc/public/repository/ap08_japanese_coursedescript.pdf>

次に、パート B に含まれるもう一つの課題は、与えられたトピックについてプレゼンテーションを行うことである。時間は全体で7分間である。まず、自分がプレゼンを行うトピックを与えられた後に4分間でプレゼンの準備を行い、その後の2分間でその内容の録音をする。トピックの具体的な例としては、日本の食文化について独自の意見を述べるというものがある。その際、日本の食文化の例を最低5つ挙げてプレゼンテーションを行う必要がある¹⁵。

5. 試験結果

(1) 学年別受験者の割合

AP 試験の成績は大学での単位として認定されるということを考慮すれば、当然高校の最終学年（第 12 学年）の生徒を対象としていると考えられる。ところが実際にはそれ以前の学年でもかなりの生徒が AP 試験を受けている。以下の表 4-6 は、AP 受験者を学年ごとにその割合を示したものである。

表 4-6 学年別 AP 受験者の割合

	第 9 学年	第 10 学年	第 11 学年	第 12 学年	その他
人文地理学	43.3%	18.0%	13.4%	21.5%	3.9%
ヨーロッパ史	0.4%	50.4%	16.1%	29.5%	3.6%
英語・作文	0.0%	1.5%	81.2%	13.4%	3.8%
生物学	0.9%	9.2%	37.4%	48.7%	3.8%
微積分 AB	0.1%	1.3%	18.3%	76.7%	3.7%
化学	0.1%	5.7%	51.7%	38.9%	3.7%

出所) College Board (2008). *The 4th Annual AP Report to the Nation*. をもとに筆者作成。

表 4-6 から、AP 受験者は第 11 学年と第 12 学年の生徒が占める割合が大きいということが第一にわかる。これは、AP プログラムは大学レベルの科目であり、高校で学ぶべき内容を十分に身につけている生徒が参加するものであることに鑑みれば当然の結果であると言えよう。例えば、「微積分 AB」をみると、AP 試験を受験した生徒のうちの 76.7% が第 12 学年の生徒である。さらに、受験者の 18.3% が第 11 学年の生徒であり、全受験者の 95% を 12 学年と 11 学年の生徒で占めていることになる。また、「英語・作文」では 11 学年の生徒の割合が 81.2% と圧倒的に多く、さらに 12 学年の生徒が 13.4% を占めている。したがって、「微積分 AB」と同様に、AP 試験の全受験者のうちおよそ 95% を 12 学年の生徒と 11 学年の生徒が占めている。また、その割合の大きさに程度の違いはあるものの、「生物学」や「化学」についても AP 試験受験者の大部分が 11 学年と 12 学年の生徒となっている。

一方、第 9 学年や第 10 学年の生徒が多く AP 試験を受験している科目もある。特に「人文地理学」の AP 試験受験者をみると、その 43.3% が第 9 学年の生徒となっている。そして、第 10 学年の生徒は 18% を占めているので、AP 試験受験者のおよそ 60% が第 9 学年の生徒と第 10 学年の生徒となっている。また、「ヨーロッパ史」に関しては、第 10 学年の生徒だけで 50.4% を占めている。第 11 学年や第 12 学年で「ヨーロッパ史」の AP 試験を受けている生徒もいるが、その割合は 16.1% と 29.5% で、全体のおよそ 45% でしかない。このように、現在は第 11 学年や第 12 学年のみならず、第 10 学年や第 9 学年の生徒が受験している AP 科目もある。こ

これは、単にプログラムが拡大してきたことによる自然現象ではなく、より多くの AP 試験を受験するためには、少しずつ早い段階から受験しておいた方が良いという生徒の心理が働いているものと考えられる。

(2) 点数の分布

このように、AP 試験の大学入学者選抜への影響等から AP 試験の受験者が増加の一途をたどっているが、生徒の関心の的である AP 試験の成績はどのような状況なのであろうか。そこで、AP 試験の成績の分布をみることにする。表 4-7 は、受験者の多い 10 科目を選び、AP 試験の成績の人数の分布をあらわしたものである（人種別の分布は第 6 章で詳しく検討する）。

表 4-7 AP 試験成績の分布

科目/成績	1	2	3	4	5
アメリカ史	20.6%	26.2%	22.2%	19.9%	11.1%
英文学・作文	8.7%	30.2%	33.3%	20.9%	7.0%
英語・作文	10.9%	30.3%	31.4%	18.3%	9.2%
微積分 AB	25.7%	15.4%	19.1%	18.7%	21.0%
アメリカ政治学	16.1%	32.1%	26.9%	18.9%	6.0%
生物学	15.9%	23.2%	21.2%	20.3%	19.3%
心理学	20.8%	13.7%	20.5%	26.2%	18.8%
スペイン語	27.4%	22.4%	19.6%	20.1%	10.4%
ヨーロッパ史	22.9%	11.2%	35.9%	18.9%	11.1%
統計学	24.1%	17.1%	25.4%	21.5%	11.9%

出所) College Board (2008). *The 4th Annual AP Report to the Nation*. をもとに筆者作成。

表 4-7 において、科目による成績の分布に極端な偏りはみられないが、多少の偏りがあることがわかる。「微積分 AB」、「生物学」、「心理学」といった理系科目は比較的優秀者（成績が 4 と 5 の生徒）の割合が高い。ただ、その一方「微積分 AB」は成績が 1 の生徒の割合も高く、できる・できないがはっきり分かれる科目であることもわかる。

次に「英文学・作文」や「英語・作文」、「スペイン語」といった語学科目の優秀者の割合は比較的小さく、成績が 2 と 3 の生徒の割合が非常に大きいことがわかる。特に「スペイン語」は 1 と 2 の成績取得者が約 50%にも上っていて、生徒の数を絞るか授業方法を改善するかの必要がありそうな科目であることがわかる。

AP 試験の成績に応じた単位認定は大学ごとに異なっているが、カレッジボードは 3 以上の成績を収めれば大学レベルに達していると判断している。この指針からすれば、かなりの生徒

が AP 試験を受けたにも関わらず、単位認定されないことになる。特に受験者数が一番多い「アメリカ史」の成績分布は比較的均等に分かれているが、成績が 1 と 2 の割合が比較的大きく、大学の単位として認定されない生徒を大量に生み出していることがわかる。

全体として、成績優秀者だけがこうした AP 試験に参加しているとすれば、もう少し成績が優秀な方（4 と 5）に偏っても良さそうであるが、どの科目も成績分布が 1 から 5 まで万遍なく存在している。こうした傾向は、AP プログラムに参加する生徒の質という問題以外にも、授業方法の改善やテスト問題の妥当性等さまざまな点で検討の余地を残す結果であると言えるのである。

6. おわりに

以上本章で AP 試験の具体的な手続きと内容について明らかにしてきた。そのポイントを整理すると、以下の 3 点に集約できる。

第一に、AP 試験は全国共通の試験であり、かなり厳格に行われていることがわかった。試験の作題から採点まで高校教員と大学教員の協力によってなされており、この点で高大連携の緊密化が見て取れる。そして大学教員も AP 試験に関わっているという点で大学側の単位認定の信頼性を担保していると言えるのである。

第二に、AP 試験時間は 2 時間から 3 時間と比較的長く、試験問題は選択式と記述式をバランスよく配置していることが試験問題の検討から明らかとなった。採点方法も、適当な解答が試験成績に影響を与えないように工夫がなされ、客観性と妥当性のために努力されたものであることもわかった。

第三に、AP 試験の受験者は最終学年である第 12 学年だけではなく、第 11 学年も多く受験していることがわかった。これは大学入学者選抜における合格の可能性を高めるために、入学願書を提出する第 12 学年以前に成績結果を成績証明書に反映させたいと生徒が考えるからである。ただし、AP 試験結果から明らかなどおり、単位として認定されない 5 段階評価の 1, 2 を取得する生徒も多く存在するため、必ずしも生徒の意図どおりの結果にはなっていないようである。カレッジボードは、3 以上の成績を収めた生徒は大学レベルの学力を有すると説明しているが、大学ごとに行われる実際の単位認定の方法については次章で言及していくことにする。

【注】

¹ College Board (2008). Homeschooled Students.
<<http://professionals.collegeboard.com/testing/ap/grades/prepare/homeschool>>

- 2 金子忠史「優秀児の教育—アメリカの特別進級プログラム（AP）について」『学校教育研究所年報』42号, 1998年, 43頁。
- 3 College Board (2008). Exam Ordering Deadlines.
<<http://professionals.collegeboard.com/testing/ap/coordinate/order/deadlines>>
- 4 College Board (2008). Homeschooled Students.
<<http://professionals.collegeboard.com/testing/ap/grades/prepare/homeschool>>
- 5 College Board (2008). AP course, exam, and service enhancements.
<<http://professionals.collegeboard.com/testing/ap/about/changes>>
- 6 College Board (2008). Grade Reporting Services.
<http://www.collegeboard.com/student/testing/ap/exgrd_rep.html>
- 7 College Board (2008). Exam Fees and Reductions: 2009.
<<http://apcentral.collegeboard.com/apc/public/exam/calendar/190165.html>>
- 8 College Board (2008). Advanced Placement Program(AP) 2008 Fee Reduction Policy.
<<http://professionals.collegeboard.com/profdownload/2008-Fee-Reduction-Policy.pdf>>
- 9 College Board (2008). 2007-08 Details by States: AP Exam Fee Assistance.
<<http://professionals.collegeboard.com/testing/ap/coordinate/fee-assistance/state>>
- 10 U.S. Department of Education (2008). ADVANCED PLACEMENT TEST FEE PROGRAM.
<<http://www.ed.gov/programs/apfee/index.html>>
- 11 College Board (2008). Course and Exam Development.
<<http://apcentral.collegeboard.com/apc/public/courses/2024.html>>
- 12 小林道三「アメリカの数学教育（1）—Advanced Placement Program—」『中央大学論集』14号, 1993年, 27頁。
- 13 College Board (2008). *The 4th Annual AP Report to the Nation*.
- 14 Ibid.
- 15 College Board (2008). JAPANESE LANGUAGE AND CULTURE Course Description.
<http://apcentral.collegeboard.com/apc/public/repository/ap08_japanese_coursedesc.pdf>

第5章 大学の単位認定

小川 佳万
(東北大学)

1. はじめに

カレッジボードは、生徒が AP 科目を学習した成果を測定するために、毎年 5 月に全国共通の AP 試験を実施している。そして大学側は、その成績に基づき、彼らが入学後単位を認定する。カレッジボード側は、AP 試験の成績が 5 の生徒については大学の成績において A、成績が 4 の生徒は A-、B+、あるいは B に該当し、そして 3 は B-、C+、あるいは C に該当するとみなしている¹。しかし、これはあくまでもカレッジボードの示す基準であり、AP 試験の結果に対する大学側の対応はさまざまである。

では、こうしたカレッジボードの基準に対して大学側は具体的にどのように対応しているのだろうか。前章では、AP 試験問題や手続きについて具体的にみてきたが、本章ではその成績に基づいた大学側の単位認定の問題について言及していきたい。特に本書での主な対象がロサンゼルス統合学区の高校であるため、本章で取り上げる大学も彼らの多くが進学することになるカリフォルニア州の大学とする。具体的な事例としては、「カリフォルニア大学系列 (UC)」からカリフォルニア大学ロサンゼルス校、「カリフォルニア州立大学 (CSU) 系列」からはカリフォルニア州立大学ロサンゼルス校 (ただし規程はカリフォルニア州立大学で共通)、私立大学からはスタンフォード大学を取り上げることにする。

2. カリフォルニア大学の例

(1) 学士教育課程

AP 試験の成績に関する大学の対応はさまざまであるが、具体的にどのように単位認定しているのだろうか。こうした疑問点を明らかにするため、ここではカリフォルニア大学ロサンゼルス校文理学部 (UCLA College of Letters and Science) を例にして検討することにする。同文理学部は約 2 万 2,700 人の学生と、約 900 人の教員を擁しており、大学のなかでも最も規模の大きい学部である。同学部の学科については、人文、物理化学、社会科学、生命科学の 4 つの分野から構成されるが、一般教育レベルでの必要単位数とその科目は表 5-1 に示すとおりである (訳すと混乱しやすいところが出てくるため原語のまま記すことにする)。この表は、AP 科目の単位認定と関係があるため、少し詳しく説明していくことにする。

表 5-1 UCLA 文理学部における必修科目

University Requirement	Entry-Level Writing または English as a Second Language	
	American History and Institutions	
College Requirement	Writing Requirement	Writing I
		Writing II
	Quantitative Reasoning	
	Foreign Language	
	General Education	Foundation of Arts and Humanities (最低 15 単位)
		Foundation of Society and Culture (最低 15 単位)
Foundation of Scientific Inquiry (最低 18 単位)		

出所) UCLA (2008). UCLA General Catalog 2007-2008.

<<http://www.registrar.ucla.edu/catalog/catalog07-08-38.html#pgfId-81142>> をもとに筆者作成。

表 5-1 の「University Requirement」は、UCLA が全学部生に求める必修科目であり、それには 2 つの科目（「Entry-Level Writing」あるいは「English as a Second Language」のうちのどちらか一方と、「American History and Institutions」）の履修が挙げられている。

まず、「Entry-Level Writing」とは、大学生としてのライティングの力を身に付けるための科目である。UCLA で学ぶにあたってその力は非常に重要であるため、「Entry-Level Writing」の単位は UCLA へ入学する前か、あるいは入学後 1 年以内に取得することが義務付けられている。また、この「Entry-Level Writing」の単位を取得することは、UCLA が提供する他の英語のコースを履修するための前提条件となっているため、この単位を取得しなければ他の英語のコースの履修をすることはできない。

UCLA へ入学する前にその単位を取得するには、UCLA が指定する試験において一定基準以上の成績を収めることが必要である。その試験には、例えば国際バカロレア (IB), SAT, UCLA が独自に作成するテスト (University of California Analytical Writing Placement Examination) 等があるが、この中には AP 試験も含まれている。規定によれば、「英語・作文」の AP 試験の成績が 3 以上であれば、高校在学中に「Entry-Level Writing」の単位を取得することができることになる。

もう一方の「English as a Second Language」は、母語が英語以外である新入生を対象とする科目であり、「English as a Second Language Placement Examination」の結果に基づいてその単位を取得できることになっている。

「American History and Institutions」は、連邦政府や州政府の組織や、アメリカの歴史に関する理解を深めるための科目である。そして、この単位の取得にも AP 試験の結果を用い

ることが可能であり、「アメリカ政治学」あるいは「アメリカ史」の AP 試験の成績が 3 以上であればその単位が認定される。

次に、「College Requirement (Letters and Science)」は、文理学部 が設ける必修科目である。これには「Writing Requirement」, 「Quantitative Reasoning」, 「Foreign Language」, 「General Education」が含まれる。

まず、「Writing Requirement」には「Writing I」と「Writing II」があるが、単位の取得に AP 試験の結果を用いることが出来るのは前者のみであり、「英語・作文」の AP 試験の成績が 4 以上であればその単位が認定される。「Writing II」に関しては、必ず大学で履修しなければならないことになっている。

「Quantitative Reasoning」の単位取得にも AP 試験の成績を活用することができ、「情報科学 AB」, 「微積分 AB」, 「微積分 BC」, 「統計学」の AP 試験において 3 以上の成績を取れば、その単位として認定される。「Quantitative Reasoning」とは、物事を探求していく際に、主に量的な面からアプローチしていく分析方法である。数字を使うという意味で、数学と関係のある AP 科目が単位認定の対象となっているのである。

「Foreign Language」については、UCLA では全部で 34 の外国語の科目を提供しているが、大学が単位認定を行う AP 科目は、「スペイン語」, 「ドイツ語」, 「フランス語」, 「イタリア語・文化」, 「中国語・文化」, 「日本語・文化」, 「ラテン文学」, 「ラテン;ウェルギリウス」である。「ラテン文学」と「ラテン;ウェルギリウス」の単位取得のためには、AP 試験の成績が 4 以上でなくてはならないが、それ以外の科目については AP 試験の成績が 3 以上であれば単位として認定される。

「General Education」は、「Foundation of Arts and Humanities」, 「Foundation of Society and Culture」, 「Foundation of Scientific Inquiry」のいわゆる「人文」, 「社会」, 「自然」の 3 つの分野に分けられる。そして、「Foundation of Arts and Humanities」, 「Foundation of Society and Culture」については、最低 15 単位を取得しなければならず、「Foundation of Scientific Inquiry」では 18 単位が必要単位となる。ただし、これらの分野においては、AP 試験の結果に基づく単位認定措置は行われず、大学の科目を履修して単位を取得する必要がある。

(2) AP 試験による単位認定

そして、これまで見てきた UCLA 文理学部における必修単位について、認定される AP 試験の科目と成績、そしてそれが UCLA において該当する科目名を示したものが表 5-2 である。表中の「EW」は「Entry-Level Writing」, 「W I」は「Writing I」, 「QR」は「Quantitative Reasoning」, 「FL」は「Foreign Language」を表している。また、UCLA での単位には該当科目がないものも含まれている。これは例えば「英文学・作文」についてみると、その AP 試験において 3 の成績と同レベルの授業は UCLA では提供されていないが、「Entry-Level Writing」の単位としては認定するという意味である。さらに、同科目の AP 試験の成績が 4

以上であれば、「英語・作文 3 (レベル)」という名称で「Entry-Level Writing」と「Writing I」の単位を同時に取得することができるのである。したがって、AP 試験の成績が 3 の生徒は大学で「Writing I」の授業を履修しなければならないことになる。

表 5-2 UCLA 文理学部における AP の単位認定

AP 試験		UCLA での単位		AP 試験		UCLA での単位	
試験科目	成績	科目名		試験科目	成績	科目名	
英語・作文	3	該当科目なし	EW	中国語・文化	3~5	初級中国語	FL
	4, 5	英語・作文 3	EW,W1	日本語・文化	3~5	初級日本語	FL
英文学・作文	3	該当科目なし	EW	ラテン文学	4, 5	ラテン文学 3	FL
	4, 5	英文学・作文 3	EW,W1	ラテン; ウェルギリウス	4, 5	ラテン; ウェルギリウス 3	FL
情報科学 AB	3~5	該当科目なし	QR	ドイツ語	3	ドイツ語 3	FL
微積分 AB	3, 4	微積分	QR		4	ドイツ語 4	FL
	5	微積分 31A	QR		5	ドイツ語 5	FL
微積分 BC	3	微積分	QR	イタリア語・文化	3	イタリア語・文化 3	FL
	4	微積分 31A	QR		4	イタリア語・文化 4	FL
	5	微積分 31A,31B	QR		5	イタリア語・文化 6	FL
統計学	3~5	該当科目なし	QR	スペイン語	3	スペイン語 4	FL
フランス語	3	フランス語 4	FL		4	スペイン語 5	FL
	4	フランス語 5	FL		5	スペイン語 6	FL
	5	フランス語 6	FL				

出所) UCLA (2008). UCLA Undergraduate Admission & Relations with Schools: AP Credit-College of Letters and Science. <<http://www.admissions.ucla.edu/Prospect/APCreditLS.htm>> をもとに筆者作成。

また「外国語」は高校生のうちに AP 試験で 3 以上の成績を収めれば、大学入学後の負担が軽くなるのがわかる。例えば「フランス語」の場合、AP 試験で 5 の成績を収めると大学において「フランス語 6 (レベル)」の単位を取得したことになり、時間的余裕がかなり生まれることになる。

このように、AP 試験の結果次第では多くの単位を高校生の段階で取得することができるため、場合によっては 3 年間で大学を卒業することも可能になる。これは、生徒にとって時間と学費の節約を意味する。この表に示したものは必修科目についてであるが、大学を卒業するためには、それ以外に選択科目の単位も必要である。そこでも単位が認定される AP 科目は数多くあり、UCLA 文理学部ではカレッジボードが AP 科目として提供しているほとんどの科目について単位認定の措置を講じている(表として掲載すると非常に大きなものになってしまうので割愛する)。UCLA では、どの AP 科目も選択科目として加えられるため、高校でどの AP 科

目を履修したとしても「損はない」ことになる。その意味でも、高校時代にできるだけ多くの AP 科目を履修しようとするのは理にかなった行動であると言えるのである。

(3) 入学者選抜時における配慮

AP プログラムへ参加することによって生徒が得るメリットは、以上のような AP 試験結果が大学で単位として認定されることだけではなく、それが大学入学者選抜の際に有利に働くことでもある。これは高校生にとっては単位認定以上に重要であるかもしれない。

アメリカにおいて 90%以上の大学が入学者を選抜する際に AP 試験の結果を考慮していることはすでに示したが、いずれの大学でも AP 試験で好成績をあげた生徒を積極的に評価している。さらに、AP 試験の結果に関わらず、AP 試験の受験あるいは AP 科目履修自体を評価する大学もある。また、スムーズに卒業していける生徒を選抜したい大学では、AP 科目のような大学レベルの科目を高校で経験している生徒は大学の学士号を取得する可能性が高いと考え、高校において AP 科目を履修してきたことを大学入試における最も重要な要因として捉えているのである²。したがって、たとえ AP 試験の結果が 1 や 2 であったとしても、AP 科目を履修しなかった生徒よりも好ましいととらえる大学もあるのである³。このように AP プログラムへ参加することは、高校生にとって入学者選抜の際に有利に働く効果も持っているのである。

また、生徒が AP プログラムへ参加する別の理由としては、成績平均点 (GPA) の上昇というメリットがある。GPA とは、高校における生徒の成績平均点を示し、大学入学者選抜の際に生徒の可否を決定する重要な指標の一つとなるが、各科目の最高値は 4 点であり、したがって平均点の最高値も 4 点となる。ただし、AP 科目の場合は最高値が 4 点よりも高くなっているのである。実はこれは UCLA だけのことではなく、カリフォルニア州全体の大学に関係することである。例えば、AP 科目を履修し、真面目に授業に出席し、予習復習も十分にしていた生徒には (AP 試験の結果とは無関係に) 高校の成績表に A が記入され、それが 5 点としてカウントされることになるのである⁴。それは AP 試験を受験したか否かに関わらず、AP 科目を履修したことに対するボーナスポイントを意味する。これによって、1997-98 年におけるカリフォルニア大学バークレー校の新入生のうち、41%の生徒の GPA の値が 4 であったという⁵。もちろん、高校における全ての授業で A を獲得した生徒もいたが、多くは AP 科目によるボーナスポイントが加算されたために、入学者選抜の際の GPA が 4 であったのである⁶。なぜ生徒が AP 科目を履修したがるかのカラクリがここにある。したがって、非常に多くの生徒が AP 試験を受験せずに科目履修のみをしていたとしても何ら不思議ではない。実際、AP プログラム将来委員会 (The Commission on the Future of the Advanced Placement Program) は、科目や州によって異なるが、AP 科目を履修した生徒のうち 3 分の 1 以上が AP 試験を受けていないと 2001 年に推定しているのである。

3. カリフォルニア州立大学の例

(1) 学士教育課程

次に、第二の事例としてカリフォルニア州立大学 (CSU) ロサンゼルス校をみていくことにする。このロサンゼルス校に限らずカリフォルニア州立大学の学士の種類には文学士 (Bachelor of Arts), 理学士 (Bachelor of Science), 音楽学士 (Bachelor of Music), 職業教育学士 (Bachelor of Vocational Education) の 4 種類があり, それぞれの学士について取得すべき単位数は異なっている。すなわち, 文学士と職業教育学士については 180 から 186 単位を取得する必要がある, 音楽学士については 189 単位, 理学士については 180 から 204 単位を取得しなくてはならない。

また, カリフォルニア州立大学の学生は, 卒業要件として, 「Writing Proficiency Examination (WPE)」に合格することによって, 「Graduation Writing Assessment Requirement (GWAR)」を満たす必要がある。学生は「WPE」を受ける前に, まずは「英語 101」と「英語 102」を履修し, 最低 C を取得しなくてはならない。そして, 135 単位を取得する前に「WPE」を受け, 合格する必要がある。135 単位を取得するまでに「WPE」に合格していない学生は, 成績書に保留と記され, 「WPE」に合格するまでどのコースを履修することもできない。「WPE」に不合格であった学生は, 「WPE」のコンサルタントと相談し, 試験で不足していた点について話し合い, その不足している部分を正すための助言をもらう。その助言に基づいて, 学生は「WPE」を再受験するか, あるいは The Upper Division Writing Proficiency コースである UNIV401 を履修することになる。

それぞれの卒業総単位数に含まれるものは, 「一般教育 (General Education)」での単位と「専攻」での単位, それに「選択科目」での単位である。「一般教育」については 72 単位が必要で, それは Lower Division コースで 60 単位, Upper Division Theme (関連のあるテーマの科目を履修する) で 12 単位をそれぞれ満たさなければならない。Lower Division コースとは, 100 から 299 の番号がついたコースを指し, Upper Division Theme コースは 300 から 499 までの番号がついたコースを指している。

次に「専攻」での単位については, 必要単位数が専攻によって異なっているが, 最低 60 単位を専攻が指定する上級科目 (Upper Division : 300 から 499 の番号がつく科目) で取得しなくてはならない。なお 500 以上の番号のコースは, 大学院生向けのコースであるため学士課程の学生は履修することができない。

最後に「選択科目」については, 自由に選ぶことができるが, 卒業に必要な総単位数 180 単位程度 (専攻により異なる) を満たすように一般教育と専攻で取得した単位数を差し引いた分だけ取得しなければならないことになる。

(2) AP 試験による単位の認定

カリフォルニア州立大学では, AP 試験で 3 以上の成績を収めた場合, 9 単位 (quarter units)

まで選択科目としての単位を認めている。選択科目以外の AP 試験による単位認定は、学部ごとに異なっている。表 5-3 は、AP 科目と大学で認定する科目名と単位数を示している。

表 5-3 カリフォルニア州立大学における AP の単位認定

AP 試験科目	成績	大学での科目 (単位数)	選択科目としての単位数
芸術史	3, 4, 5	芸術 101A (4)	5
化学	3, 4, 5	化学 101 (5)	4
ミクロ経済学	3	経済学 201 (4)	5
	4, 5	専攻による	
統計学	3	経済学 109 (4)	5
	4, 5	経済学 109 (4) と 209 (4)	1
英語・作文	3, 4, 5	英語 101 (4)	5
英文学・作文	3	英語 101 (4)	5
	4, 5	英語 101 (4) と 英語 250 (4)	1
フランス語	4	フランス語 200A (4)	5
	5	フランス語 200B (4) と フランス語 201 (4)	1
ドイツ語	5	ドイツ語 100C (4)	5
アメリカ史	3	歴史 202A (4) か 歴史 202B (4)	5
	4, 5	歴史 202A (4) と 歴史 202B (4)	1
ラテン; ウェルギリウス	4	ラテン 100C (4)	5
	5	ラテン 100C (4) と ラテン 222 (4)	1
微積分 AB	3, 4	数学 206 (4)	5
	5	数学 206 (4) と 数学 207 (4)	1
音楽理論	3, 4, 5	専攻による	
心理学	3, 4, 5	専攻による	
日本語・文化	4	日本語 200A (4)	5
	5	日本語 200B & C (8)	1
中国語・文化	4	中国語 200A	5
	5	中国語 200B & C (8)	1

出所) CSULA (2008). Admissions General Information.

<[http://catalog.calstatela.edu/NXT/gateway.dll?f=templates\\$fn=default.htm\\$3.0\\$vid=calstate:current](http://catalog.calstatela.edu/NXT/gateway.dll?f=templates$fn=default.htm$3.0$vid=calstate:current)> をもとに筆者作成。

AP 試験の成績に応じて単位の認定を行う場合、カリフォルニア州立大学は、1 科目に関して 9 単位を認めているところがユニークである。そのため、受験した科目について大学で相当する科目の単位が 9 以下である場合は、その残りの単位数が選択科目に加算される仕組みとなっている。例えば、表の「英文学・作文」をみると、AP 試験の成績が 3 である場合、それによ

って「英語 101」の 4 単位を認定され、残りの 5 単位は選択科目の単位数として加算されることになる。また同一 AP 科目の試験の成績が 4 あるいは 5 の場合、「英語 101」と「英語 250」についてそれぞれ 4 単位の合計 8 単位を認められるため、選択科目としての認定単位数は 1 となる。同様に、「微積分 AB」に関しては、AP 試験の成績が 3 もしくは 4 の場合、「数学 206」の 4 単位が認定され、同じ AP 科目の試験成績が 5 の場合には「数学 206」と「数学 207」についてそれぞれ 4 単位の合計 8 単位が認められることになる。そして残り 1 単位は選択科目の単位として認められることになるのである。

また「ミクロ経済学」の AP 試験で 4 もしくは 5 を取った場合、「一般教育」ではなく、「専攻」の単位として認定してもらえるため、ここでは記されていない。いずれにせよ、カリフォルニア州立大学の場合は、UCLA のケースよりも、多く AP 単位を大学の単位として認定してもらえることがわかる。多くの科目の AP 試験で優秀な成績をとっている生徒がこの大学に入学した場合、入学時点でかなりの単位が認められ、3 年間で卒業することも夢ではない。

4. スタンフォード大学の例

(1) 学士教育課程

さらに、第三の事例としてスタンフォード大学を取り上げる。スタンフォード大学の学士には、文学士 (Bachelor of Arts)、理学士 (Bachelor of Science)、そして文理学士 (Bachelor of Arts and Science) がある。これらの学士を取得するためには、スタンフォード大学で少なくとも 135 単位取得したうえで、(他大学での単位をも含めて) 180 単位取得しなくてはならない。その内訳は、「一般教育 (General Education)」、「ライティング (Writing)」、「言語 (Language)」、「主専攻科目」、「選択科目」で構成されている。「選択科目」については自由に科目を選択することができる⁷。

スタンフォード大学の学生は、クォーター (1 学期 10 週間) ごとに最低 12 単位を履修する必要がある。さらに、そのうち最低 9 単位は取得すること、最近の 3 クォーターにおいて最低 36 単位取得すること、GPA については最低 2.0 である点を満たしていく必要がある。そしてこうした条件を満たしていく中で合計 180 単位を取得すれば卒業できることになる。

なお、「一般教育」に含まれる科目は、次のとおりである。まず、「人文科学概論」は、人類の思想、価値、信条、創造性、そして文化に関する勉強の基礎を作り上げるもので、3 クォーター連続の科目となっている。「専門横断科 (Disciplinary Breadth)」は、工学、応用科学、人文科学、数学、自然科学、そして社会科学の分野での経験を積むことによって、学生の教育の幅 (Educational Breadth) を広げるコースである。それぞれのコースは各分野の 5 つのコースを履修すれば単位を取得することができる。さらに「市民権教育」は、異なる分野で 2 つのコースを履修するか、あるいは 2 つの「専門横断科」を履修することによって単位を取得することができる。市民権のコースは、「道徳推論」、「グローバルコミュニティ」、「アメリカ文化」、「ジェンダー学」の 4 つの分野から構成される。

(2) AP プログラムの単位認定

スタンフォード大学は、カレッジボードと連携して AP プログラムの発展に貢献している大学であるため、比較的積極的に AP 試験の成績に基づいて単位の認定を行っている。その AP 試験については、成績に基づき分野ごとに 10 単位まで単位を認め、最大 45 単位まで決められる。

「一般教育」に含まれる科目のなかでは、「外国語」以外の科目に関する単位は AP 試験によって取得することはできない。その「外国語」については AP 試験の成績が 4 あるいは 5 であれば、University Foreign Language の単位として認定される。AP 試験の成績によって認定される単位は卒業単位として認められたり、主専攻学科によっては、その選択科目として認められたりする場合もある。AP プログラムによって単位取得した科目に対応する科目をスタンフォード大学で履修した場合は、大学での成績を優先するという規程もある。

上述したとおり、AP 試験の成績によって認められる学士学位取得のための単位数は、最高で 45 単位である。それ以上の数の単位を取得した場合、スタンフォード大学の成績証明書には記載されるが、45 単位までしか学士号取得のための単位数としてカウントされない。スタンフォード大学における AP プログラムを含む外部からの単位認定は、毎年見直されるが、2008 年において、スタンフォード大学が単位認定を行う AP 科目は表 5-4 のとおりである。

2008 年にはスタンフォード大学は、以上の 15 科目の AP 試験成績に応じて単位認定して上級クラスへの配置を行っている。まず、言語科目については、「中国語」、「フランス語」、「ドイツ語」、「日本語」、「スペイン語」の 5 科目に関して単位の認定を行っている。この 5 つの言語科目の AP 試験で成績が 5 である場合は 10 単位を取得し、高いレベルの科目から出発することができる。ただし改めてクラス分け試験を受けなくてはならないことになっている。こうした点から、同大学が先の 2 校のケースよりもかなりハードルが高いことがわかる。また、AP 科目には、言語に関する科目として「文学」の科目も設けているが、スタンフォード大学の場合は、そのような文学に関連する AP 科目については単位の認定をしないところがユニークである。

次に、理系の科目についてみると、「化学」の AP 試験で 5 を獲得すると 4 単位を認定され、さらに大学でも「化学」のコースを専攻する場合は、「化学」の初級コースを飛ばして上級コースである 31X か、それ以上のコースを履修することが許可される。「情報科学 AB」は、AP 試験の成績が 4 あるいは 5 であれば、5 単位認定され、さらに大学でも同科目コースを履修する場合は、「CS106B」か「CS106X」、あるいは、「CS107」を履修することができる。

「情報科学 A」も同様に、AP 試験の成績が 4 あるいは 5 であれば 5 単位を認定され、さらに大学でもその科目を履修する場合は「CS106B」または「CS106X」から履修することが可能である。「微積分 AB」は、AP 試験の成績が 5 であれば 10 単位を認定され、さらに大学で数学を履修する者は「MATH51」から履修可能であるが、AP 試験の成績が 4 である者については、5 単位を認定し、さらに大学でも同科目を履修する際は「MATH42」から履修可能となっている。

表5-4 スタンフォード大学が単位認定を行う AP 科目

試験科目	成績	配置	単位
化学	5	CHEM 31X or above	4
中国語	5	クラス分け試験を受験する。	10
情報科学 AB	4, 5	CS 106B, CS 106X, or CS 107	5
情報科学 A	4, 5	CS 106B, or CS 106X	5
フランス語	5	クラス分け試験を受験する。	10
ドイツ語	5	クラス分け試験を受験する。	10
日本語	5	クラス分け試験を受験する。	10
微積分 AB	5	MATH 51	10
	4	MATH 42	5
微積分 BC	4, 5	MATH 51	10
	3	MATH 42	5
微積分 AB サブスコア	5	MATH 51	10
	4	MATH 42	5
物理学 B	5	PHYSICS 25	8
	4	PHYSICS 23 and 25	4
物理学 C (力学)	4, 5	PHYSICS 43 and 45; or PHYSICS 23 and 25	4
	3	PHYSICS 41, 43, and 45; or PHYSICS 23 and 25	4
物理学 C (電気学, 磁気学)	4, 5	PHYSICS 41 and 45; or PHYSICS 21 and 25	5
	3	PHYSICS 41, 43, and 45; or PHYSICS 21 and 25	4
物理学 C (力学, 電気学, 磁気学)	4, 5	PHYSICS 45; or PHYSICS 25	9
	3	PHYSICS 41, 43, and 45; or PHYSICS 25	8
スペイン語	5	クラス分け試験を受験する。	10

出所) Stanford University (2008). Stanford University Ceeb Advanced Placement (AP) Chart 2008-09.

<http://registrar.stanford.edu/pdf/AP_Chart_2008-09.pdf> をもとに筆者作成。

一方、「微積分 BC」の AP 試験で 4 あるいは 5 を獲得した生徒については 10 単位を認定し、大学でも履修する場合は「MATH51」からの履修が可能である。そして、成績が 3 であった者については、5 単位を認定し、大学での履修は「MATH42」から始めることができる。そして、「微積分 AB サブスコア」の試験で 5 を獲得すれば 10 単位を認定され、さらに大学でも履修する場合は MATH51 からの履修が可能である。成績が 4 であれば 5 単位を認定し、大学での履修は MATH42 から開始することができる。物理 B については、AP 試験の成績が 5 であれば 8 単位を認定され、大学では PHYSICS25 から履修可能である。成績が 4 であれば 4 単位を認定され、大学での履修は PHYSICS23 と 25 からの履修が可能である。

このようにスタンフォード大学は、AP 試験の成績を積極的に単位認定しているが、3 以上が

大学で単位として認定されるというカレッジボードの指針よりも、ハードルが高くなっており、若干の例外を除いて、4以上でないと単位として認められないという厳しいものとなっている。このように同じ AP 試験の成績であっても、大学によって差があることがここから見て取れるのである。

5. おわりに

以上本章では、大学での AP 試験の単位認定について具体的に言及してきた。各大学が単位として設定する AP 試験における成績や、大学の単位として認定する科目はきわめて多様であるが、以下の特徴があることがわかった。

第一に、大学によって単位の認定の仕方がかなり異なっていることが具体的に明らかになった。スタンフォード大学は3以下の成績を単位として認定しないというようにハードルを高く設定している。その一方、カリフォルニア州立大学では AP 試験での3の成績をできるだけ認めていこうという姿勢があることが見て取れた。こうした相違は、AP 試験の活用に関して大学に決定権が保証されていることを示している。このように、大学側の柔軟な対応が可能であるということも、多くの大学が AP プログラムに関わっている理由の一つであると言える。もちろんここでは言及しなかったが MIT やその他の一部の大学のように、AP 試験自体を信用しておらず、AP 試験の成績を一切単位認定しないという大学も存在することは知っておく必要がある。

第二に、カレッジボードの説明のとおり、AP 科目は大学1-2年次レベルであるため、大学の単位認定も多くは「一般教育」か、もしくはそれに類するレベルで認めていることがわかった。ただし、成績によっては、「専攻」での単位として認めている大学もあり、まさに大学によってさまざまである。

第三に、AP 試験を受けなくても、AP 科目を履修していることが GPA の上昇に貢献し、大学入学者選抜に有利に働くこともわかった。言うまでもなく高校生にとって大学進学は将来を左右する人生の転機である。それゆえ、希望の大学に入学する可能性を少しでも高めるために、AP 科目の履修を望む生徒の増加につながっていると言える。特に主導的な州立・私立大学が、AP 科目の履修を入学者選抜の際に利用することは、各高校がそれだけ AP 科目を増設しようと動くことになり、それが結果的にその州のスタンダードを高く設定することにつながり、高校に対してより質の高いカリキュラムや教授法を求めるプレッシャーにもなるという意味で肯定的な面もあるようである。

【注】

- ¹ College Board (2008). *The 4th Annual AP Report to the Nation*.
- ² National Association for College Admission Counseling's 2003 Survey of College Admission Officers.
- ³ California State University Institute for Education Reform, *The Advanced Placement Program California's 1997-98 Experience*, 1999, p.12.
- ⁴ B High School (2004). *Student Handbook*.
- ⁵ *The Chronicle of Higher Education*, January 21, 2005. Scholars Say College Admissions Offices Misuse Advanced Placement Data.
- ⁶ California State University Institute for Education Reform, *The Advanced Placement Program California's 1997-98 Experience*, 1999, p.12.
- ⁷ Stanford University (2008). Undergraduate Degree Progress and Academic Standing. <http://registrar.stanford.edu/students/academics/deg_prog_aca_stg.htm?id=1>

第6章 APプログラムの効果と課題

小野寺 香
(東北大学)

1. はじめに

APプログラムの元来の目的は、高校教育と大学教育の接続をスムーズにさせることにあった。特に優秀な高校生に大学レベルの教育を受ける機会を与え、その科目に対する関心を高めさせるとともに大学の単位としても認定するというものであったが、近年の変化は「優秀な」生徒の範囲が広がり、第4章でのAP試験成績から明らかになったとおり、結果が芳しくない生徒も多数いることがわかった。確かに、より多くの生徒がAPプログラムにアクセスできるというのはプログラムの「民主化」として肯定的に評価できる面もあるが、その一方、本来の一部の優秀な生徒を対象とする「才能教育」の面は背景に退いた観がある。こうした問題に対して、カレッジボードや教育関係者はどのように考えているのであろうか。本章では、APプログラムの拡大に伴うさまざまな問題点を明らかにしながら、APプログラムの効果と課題について、特に最近の新聞記事をもとに論じていくことにする。

2. APプログラム参加者の大学への接続

(1) APプログラムと大学卒業率の関係

アメリカの高等教育の課題の一つに、その卒業率の低さが指摘できる。カレッジボードは、APプログラムの効果の一つとして、大学卒業率の改善にも役立つという期待を寄せている。高校生のうちから大学レベルの内容に触れることによって、スムーズに大学の授業に適応することができ、そのため途中でドロップアウトすることなく大学を卒業する学生が多くなると考えているからである。現在、カレッジボードがAPプログラムを開始しておよそ50年が経過し、多くの高校生が同プログラムに参加するようになっているが、その効果は実際に表れているのであろうか。ここでは、APプログラムに参加した生徒が実際にドロップアウトすることなく大学を卒業しているかどうかを、テキサスの公立高校を卒業した生徒を追跡調査したドアティ(Dougherty, C.)、メロー(Mellor, L.)、ジエン(Jian, S.)の研究結果を基に確かめることにする。表6-1は、彼らの調査結果の一部であるが、生徒を「アフリカ系」、「ヒスパニック」、「白人」に区分し、それぞれ「AP試験の成績が3以上であった生徒」、「AP試験の成績が2以下であった生徒」、「高校でAP科目の履修はしたがAP試験は受けなかった生徒」、そして「AP科目の履修もAP試験の受験もしなかった生徒」に分けて、それぞれの「大学卒業率(5年以

内に大学を卒業)」を比較したものである。

表 6-1 AP プログラムと大学卒業率の関係

		AP 試験の成績が 3 以上の生徒	AP 試験の成績が 2 以下の生徒	AP 科目を履修したが AP 試験は受けなかつ た生徒	AP プログラム不参加 の生徒
アフリカ系 (5,831 人)	卒業率	53%	37%	30%	10%
	学生数	92	277	595	4,867
ヒスパニック (15,176 人)	卒業率	54%	29%	23%	8%
	学生数	459	1,198	1,704	11,815
白人 (44,048 人)	卒業率	65%	47%	41%	21%
	学生数	4,413	3,037	6,214	30,384

出所) Dougherty, C., Mellor, L. and Jian, S. (2006). *The Relationship between Advanced Placement and College Graduation*. National Center for Educational Accountability. p.7 をもとに筆者作成。

表 6-1 からわかることは、第一にどの人種でみても、高校で「AP プログラム不参加の生徒」、
「AP 科目を履修したが AP 試験は受けなかつた生徒」、
「AP 試験の成績が 2 以下の生徒」、
そして「AP 試験の成績が 3 以上の生徒」の順に「大学卒業率」が低下していくことである。例
えば、「白人」の生徒についてみると、「AP プログラム不参加の生徒」の卒業率は 21% (3 万
384 人) であるが、高校で「AP 科目を履修したが AP 試験は受けなかつた生徒」になると 41%
(6,214 人) にまで上昇する。また、AP 試験を受験した場合、例え「AP 試験の成績が 2 以下
の生徒」であっても「大学卒業率」は 47% (3,037 人) に上昇し、さらに「AP 試験の成績が 3
以上の生徒」になると 65% (4,413 人) まで急上昇する。この傾向は、他の「アフリカ系」、「ヒ
スパニック」の生徒にも当てはまる。

ただ、その一方で最後の 65% という数字をどう解釈するかは判断のわかれるところである。
カレッジボードによれば、「AP 試験の成績が 3 以上の生徒」は大学レベルに達しているとみな
しているが、その彼らであっても 65% しか 5 年以内に卒業できていない。このことは、例え
ば AP 試験の成績判定が甘いのか、あるいは大学側の単位認定基準が全体的に厳しいのか等、さ
まざまな原因が考えられるが、この点についてはこれ以上明らかにできない。

また、こうした傾向のなかで「AP プログラム不参加の生徒」と、「AP 科目を履修したが AP
試験は受けなかつた生徒」の卒業率の差が特に大きくなっていることがわかる。「アフリカ系」
の生徒についてみると、「AP プログラムに不参加の生徒」の「大学卒業率」は 10% であるの
に対し、「AP 科目を履修したが AP 試験は受けなかつた生徒」のそれは 30% と、その差は 20 ポ
イントもある。同様に、「ヒスパニック」の生徒の場合も「AP プログラム不参加の生徒」の「大
学卒業率」は 8%、一方「AP 科目を履修したが AP 試験は受けなかつた生徒」のそれは 23% で
15 ポイントの差が生じている。ここから、AP プログラムへ参加した生徒は、例え AP 試験を

受験しなくても、参加しなかった生徒より大学をドロップアウトせずに卒業する可能性が高くなることが言えそうである。言い換えれば、高校時代に少しでも AP プログラムに関わることで大学での学習が比較的円滑に進むのではないかと推測できる。

さらに、AP プログラムへ参加した生徒のみに注目した場合、「AP 試験の成績が 3 以上の生徒」の「大学卒業率」は特に高いことが見て取れる。例えば、「ヒスパニック」の生徒を見ると、「AP 試験の成績が 3 以上の生徒」の「大学卒業率」が 54%であるのに対して、「AP 試験の成績が 2 以下の生徒」のそれは 29%となっている。また、「白人」の生徒についても、「AP 試験の成績が 3 以上の生徒」の「大学卒業率」は 65%であるのに対し、「AP 試験の成績が 2 以下の生徒」のそれは 47%と差が大きい。このことから、AP プログラムが「大学卒業率」の改善に役立つためには、単に高校生が同プログラムに参加するだけでなく、AP 試験を受験し 3 以上の成績を収めることができるように生徒の学習を促す必要があることも大切であると言える。

ただし、以上のこうした分析には統計的な面も含めてさまざまな角度から総合的に判断する必要があるため、当然のことながらこの調査結果のみをもって AP プログラムが「大学卒業率」の向上に役立つと断言することはできない。実際、AP プログラムの効果を疑問視する意見も多数存在するのである。以下ではこうした傾向の研究を 2, 3 紹介することにする。

(2) AP 科目の履修と大学における成績の関係

AP プログラムの本来の目的は、高校生をより円滑に大学教育へと移行させることである。言い換えれば、高校生のうちに大学レベルの学習を行うことによって、彼らが大学へ入学した後もその授業に適応しやすくすることが AP プログラムの目的である。とすれば、その効果は、大学卒業率を向上させる以外に、大学の成績向上にも及んでいると推測できる。AP プログラムへの参加の有無は、大学入学後の成績に影響を与えているのであろうか。このような課題に取り組んだ研究には、1998 年から 2001 年にかけて、カリフォルニア大学の 8 つのキャンパスの 8 万 1,445 人の新生を対象としたカリフォルニア大学バークレー校のものがある。この研究では、学生の入試時のデータと、大学 1, 2 年時の GPA を比較調査している。そこでは、AP 試験の成績と大学での成績には強い相関があるが、AP 科目を受講する多くの生徒が AP 試験を受験していないという問題も同時に指摘した¹。つまり、AP 科目を受講している生徒のうち、3 分の 1 もの生徒が AP 試験を受けていないと推測され、AP 科目のような大学レベルの科目に参加する生徒でも、試験を受けなければ（つまり試験のための準備学習を十分に行わなければ）大学入学後に優れた成績を収める保証はないという結論を下したのである。

また、ハーバード大学のサドラー (Philip M. Sadler) は、バージニア大学のタイ (Robert Tai) と共に、ランダムに選んだアメリカ国内の 63 の大学において入門 (introductory) レベルの「物理学」、「生物学」、「化学」の科目を履修する 1 万 8,000 人の学生の成績を調査した。その結果、高校において AP 科目を履修してきた学生は、履修してこなかった学生よりも成績

は優れていたが、その差はわずかであった。この研究でも、単に AP 科目に参加したというだけでは、大学入学後もその成績が優秀であるとは言えないことを指摘したのである。また、彼は、連邦政府が生徒の理科の学力を向上させるための手段として AP プログラムを強調していることについても批判的である²。

さらに、テキサスキリスト教大学 (Texas Christian University) のクロプフェンスタイン (Kristin Klopfenstein) と、ミシシッピ州立大学のトーマス (M. Kathleen Thomas) は、1999 年にテキサスの高校を卒業し 4 年制の公立大学へ入学した生徒の記録を分析した。分析を行うにあたって、彼らは次の二つの課題を設定した。一つは、高校で AP 科目を履修した生徒は、履修しなかった生徒と比較して大学 1 年生時に優れた成績を収めているかというものである。もう一つは、彼らが 2 年生に進級するまでのドロップアウト率は AP 科目を履修してこなかった生徒と比して低くなっているかというものである。彼らの分析の結果、それらの課題に対して出された結論は否定的なものであった。この研究結果によれば、大学における成績とドロップアウト率は、SAT の得点、両親の学歴や収入、高校教員の経験年数等との相関がみられたが、AP 科目の履修歴とは相関がみられなかったのである³。

このように、AP 科目の履修と大学における成績には関係がみられないという研究結果が報告されてきたため、カリフォルニア州の公立大学では AP 科目を履修してきた生徒の GPA に対するボーナスポイントを廃止することが議会で提案されている⁴。この提案に対しては、各方面から賛否両論が出されているが、廃止の理由としては、ボーナスポイントは多くの AP 科目を開設する高校に在籍する生徒に有利に働き、平等な競争を妨げていることが挙げられる。別の角度から言えば、多くの生徒は GPA のボーナスポイントのためだけに AP 科目を履修しているという実態を改善するための提案であると言えるのである。

3. AP プログラムに参加する生徒の質

(1) AP 試験成績の低下

また、AP プログラムが拡大し、多くの生徒が参加するようになったことにより、その質の低下も指摘されている。具体的には、AP 試験で 3 以上の成績を収める生徒の割合が低下しているという指摘である。表 6-2 は、「AP 試験で 3 以上の成績を収めた生徒数が全受験者数に占める割合の推移」を 2004 年から 2007 年にかけて人種ごとに示したものである (人種名は訳すと混乱しやすいところが出てくるため表では原語のまま記すことにする)。

この表 6-2 から、AP 試験を受ける生徒の人数は 2004 年から 2007 年にかけて増加しているが、そのうち試験の成績が 3 以上である生徒の割合は縮小傾向にあることがわかる。AP 試験の「受験者数」をみると、2004 年には 156 万 7,259 人の生徒が AP 試験を受験したが、2007 年にはその数は 195 万 7,424 人となっており、3 年間でおよそ 40 万人増加している。また、「AP 試験受験者数」を人種別にみると、その程度に違いはあるものの、全ての人種の受験人数の増加をみることができる。

表 6-2 AP 試験で 3 以上の成績を収めた生徒数の割合の推移

年		Black or African- American	Asian, Asian- American or Pacific Islander	Mexican or Mexican- American, Puerto Rican, other Hispanic, Latino or Latin American	American Indian or Alaska Native	White	National Total
2004	受験者数	78,483	215,186	182,258	6,867	992,069	1,567,259
	成績が 3-5 の割合 (%)	29.21	63.26	48.4	44.39	63.61	59.69
2005	受験者数	80,444	213,828	179,828	6,891	984,405	1,550,475
	成績が 3-5 の割合 (%)	27.82	63.28	46.53	42.61	63.31	59.15
2006	受験者数	94,556	241,692	204,113	7,953	1,046,590	1,690,999
	成績が 3-5 の割合 (%)	26.66	63.11	45.07	43.67	62.4	58.01
2007	受験者数	113,590	277,376	240,478	8,970	1,198,053	1,957,424
	成績が 3-5 の割合 (%)	25.36	63.39	42.89	42.11	62.04	57.27

出所) *Education Week*, February 20, 2008. AP Trends: Tests Soar, Scores Slip.(部分)

一方、「AP 試験で 3 以上の成績を収めた生徒数の割合」については、全体でみると 2004 年から 2005 年の間に 59.69%から 59.15%とわずかに低下し、さらにそれが 2006 年には 58.01%となり、2007 年には 57.27%と低下してきている。つまり、この 3 年間で、「AP 試験で 3 以上の成績を収めた生徒の割合」は、全体として 2.42 ポイント下がったことになる。次に、その割合を人種別にみると、「アフリカ系」生徒については、2004 年に 29.21%であったのが、2005 年には 27.82%、2006 年には 26.66%、そして 2007 年には 25.3%と年々低下している。「ヒスパニック」の生徒や「白人」の生徒も同様に、この 3 年間で AP 試験の「成績が 3 以上の生徒の割合」は低下を続けている。「ヒスパニック」の生徒については、2004 年にその割合が 48.4%であったのが、2007 年には 42.89%となっており、「白人」の生徒についても 2004 年に 63.61%であったものが 2007 年には 62.04%まで低下しているのである。また、「ネイティブアメリカン」についても年度によっては増加している場合もあるが、全体としてみればその割合は縮小傾向にある。2004 年から 2007 年にかけて、AP 試験の成績が 3 以上である「アジア系」生徒の割合は大きくなっているが、他の人種に関しては全て小さくなっており、AP 試験受験者全体としてみてもその割合は縮小している。

そこで、AP 試験の成績の推移をさらに詳細に検討するために、2004 年から 2007 年にかけての人種ごとの AP 試験の平均成績を示すと、表 6-3 のようになる。(表 6-2 と同様に、表では人種名は原語のまま記すことにする。)

表 6-3 人種ごとにみた AP 試験平均成績の推移

人種	2004 年	2005 年	2006 年	2007 年
Black or African-American	2.03	1.99	1.96	1.91
Asian, Asian-American, or Pacific Islander	3.04	3.04	3.04	3.05
Mexican or Mexican-American	2.51	2.44	2.42	2.39
Puerto Rican	2.54	2.52	2.5	2.47
Other Hispanic, Latino, or Latin American	2.8	2.72	2.57	2.48
American Indian or Alaska Native	2.45	2.41	2.42	2.39
White	2.99	2.98	2.96	2.95
Other	2.85	2.83	2.79	2.8
Not Stated	2.89	2.88	2.83	2.76
National Total	2.9	2.88	2.85	2.83

出所) *Education Week*, February 20, 2008. AP Trends: Tests Soar, Scores Slip.

表 6-3 から、AP 試験の平均成績も全体的に低下していることがわかる。まず、受験者全体としての AP 試験の平均成績は 2004 年に 2.9 であったのが、2005 年には 2.88、2006 年には 2.85 と年々低下しており、2007 年には 2.83 となっている。さらに、人種別にみると、「アジア系」以外の全ての人種に関して、2004 年からの 3 年間で次第に AP 試験の平均成績が低下してきていることがわかる。例えば、「白人」の生徒の AP 試験の平均成績は 2004 年に 2.99 であったが、2005 年には 2.98、2006 年には 2.96、そして 2007 年には 2.95 と、わずかではあるが低下を続けている。また、2004 年における AP 試験平均成績が 2.03 で、他の人種と比較すると最も成績の低い「アフリカ系」生徒についても、2005 年には 1.99、2006 年には 1.96、2007 年には 1.91 となっており、確実に成績は低下してきている。

また、表 6-2 と表 6-3 から、AP 試験の受験者数は増加してきているが、試験で 3 以上の成績を収める生徒の割合と試験の平均成績はともに低下していることがわかる。カレッジボードや連邦政府、そして州による補助金の交付等もあり、AP プログラムは拡大し続けており、プログラムに参加する生徒の数が年々増加していることは第 2 章で指摘した。多くの生徒が AP プログラムに参加するようになれば、その平均成績が低下していくのは当然のことでもある。それでも、AP プログラムの趣旨が、高校生を高校教育から大学教育へ円滑に移行させることであることに鑑みれば、プログラムは一定の質を維持しなくてはならないはずである。

(2) 参加機会についての人種間格差問題

既述のように、AP プログラムへ参加する生徒数や学校数が増加しており、さらにその科目も増加していることから、アメリカにおいて同プログラムは広く普及しており、一見全ての高

校生に対してその機会が開かれているように見える。また、カレッジボードは、AP プログラムの対象をかつてのように一部の成績優秀者のみではなく、より多くの生徒にその機会が開かれるべきであるとしているが⁵、果たしてそれは機会均等の原則に適合していると言えるのだろうか。例えば、歴史的に平等な教育機会から閉め出されてきた人種の生徒に対しても AP プログラムへ参加する機会は十分に開かれているのだろうか。ここでは、特に「アフリカ系」生徒や「ヒスパニック」の生徒に注目し、彼らの AP プログラムへの参加状況について検討を行うことにする。

この問題に関しては、カレッジボードが刊行する『年次報告書 2007 (Report to the Nation 2007)』で、各州における高校生全体に占めるそれぞれの人種の生徒数の割合と、AP 試験受験者に占めるその割合を示しており、表 6-4 は全州のうち AP 試験受験者数の多い上位 10 州のデータを抜粋して作成したものである。

表 6-4 「アフリカ系」生徒と「ヒスパニック」の生徒の AP プログラム参加状況

	Black or African Students		Hispanic or Latino Students	
	全生徒数に占める割合	AP 試験受験者数に占める割合	全生徒数に占める割合	AP 試験受験者数に占める割合
カリフォルニア	7.3%	3.6%	36.4%	30.2%
テキサス	13.5%	6.9%	35.9%	33.7%
ニューヨーク	14.4%	7.0%	11.8%	11.1%
フロリダ	19.7%	11.0%	20.7%	24.2%
イリノイ	13.6%	8.4%	12.3%	11.2%
ヴァージニア	24.1%	10.2%	6.2%	5.7%
ノースカロライナ	27.3%	13.4%	4.6%	3.7%
ペンシルバニア	11.8%	4.7%	3.4%	2.4%
ジョージア	33.1%	20.4%	4.4%	4.0%
オハイオ	11.0%	6.4%	1.5%	1.8%
アメリカ全体	13.7%	6.9%	14.0%	14.0%

出所) College Board (2007). *Advanced Placement Report to the Nation 2007*. をもとに筆者作成。

表 6-4 の中で、「アフリカ系」生徒の AP プログラムへの参加状況についてみると、全ての州において、AP 試験受験者数に占める「アフリカ系」生徒の割合は、全生徒数に占めるその割合を下回っている。例えば、カリフォルニア州では、州全体の高校生生徒数に占める「アフリカ系」生徒の割合は 7.3%であるが、AP 試験受験者に占めるその割合は 3.6%にとどまっている。また、ジョージア州についても、全ての高校生のうち 33.1%が「アフリカ系」生徒である

が、AP 試験受験者の中で見ると、その割合は 20.4%となっている。さらに、アメリカ全体で見れば、全生徒数に占める「アフリカ系」生徒の割合は 13.7%であるが、それを AP 試験受験者でみるとそのうちの 6.9%しか占めていない。以上のような数値からみると、「アフリカ系」生徒が AP プログラムに参加するための平等な機会を与えられているとは言い難い。

次に、「ヒスパニック」の生徒についてみると、「アフリカ系」生徒の場合と比較すれば、AP 試験受験者に占める「ヒスパニック」の生徒の割合が大きいと言える。例えば、フロリダ州を見ると、全生徒数に占める「ヒスパニック」の生徒の割合は 20.7%であるが、AP 試験者数におけるその割合は 24.2%となっている。また、オハイオ州においても、全生徒数の 1.5%を「ヒスパニック」の生徒が占めているが、AP 試験受験者に占める彼らの割合はそれを上回る 1.8%となっている。そして、アメリカ全体としてみれば、全ての高校生に占める「ヒスパニック」の生徒の割合と AP 試験を受験する生徒に占めるその割合はどちらも 14.0%と等しくなっている。しかし、他の州、例えばカリフォルニア州についてみると、全生徒数に占める「ヒスパニック」の生徒の割合は 36.4%であるが、AP 試験受験者数に占めるその割合は 30.2%である。また、ジョージア州においても、高校生全体のうち 4.4%を「ヒスパニック」の生徒が占めているが、AP 試験受験者数では 4.0%しか占めていない。したがって、アメリカの高校生全体のうち「ヒスパニック」の生徒が占める割合と、AP 試験受験者数に占めるその割合とが等しくても、彼らに開かれている機会の程度は州によって差がみられ、「ヒスパニック」の生徒に対して AP プログラムに参加する機会が十分に与えられていると一概に言うことはできない。

(3) 成績の人種間格差

ここでは、AP プログラムに参加しているマイノリティの生徒に注目し、その成績の検討を行うことにする。既述のとおり、AP プログラムは、高校生をより円滑に大学教育へ移行させることを目的としている。しかしながら、多くの高校生が AP 科目へ参加し、AP 試験を受けるという、AP プログラムへの「形式的参加」を促しているだけでは、その目的を十分に達成できるとは考えにくい。確かに、生徒が AP プログラムに参加し、大学の一般教育課程で行われる授業の雰囲気に触れることは、円滑な高大接続の実現に効果的かもしれない。しかし、本来 AP プログラムが目指すのは、それよりもむしろ学力面での高大接続を円滑にすることである。すなわち、生徒が AP プログラムで大学レベルの授業を受け、それに相応しい学習能力を身につけることで、より一層円滑な大学への移行が実現できるのである。したがって、AP プログラムが生徒にとって有効に機能しているかどうかを判断するには、AP プログラムへの参加機会のみならず、その成績についても検討を行う必要があると考えられる。

表 6-5 人種別 AP 試験の平均成績

	Black or African American	Asian, Asian American, or Pacific Islander	Other Hispanic, Latino, or Latin American	American Indian or Alaska Native	White	National Total
アメリカ史	1.83	2.87	2.01	2.18	2.84	2.67
英文学・作文	2.00	2.94	2.26	2.43	2.99	2.81
英語・作文	1.90	2.79	2.09	2.28	2.81	2.63
微積分 AB	1.83	3.09	2.26	2.36	3.03	2.89
アメリカ政治学	1.87	2.77	1.99	2.33	2.84	2.64
生物学	1.95	3.32	2.26	2.47	3.09	2.97
心理学	2.11	3.26	2.47	2.73	3.24	3.08
スペイン語	1.84	2.83	3.80	2.27	2.66	3.28
ヨーロッパ史	2.08	3.02	2.38	2.60	2.96	2.88
統計学	1.70	3.03	2.10	2.39	2.90	2.78
全科目	1.91	3.05	2.48	2.39	2.95	2.83

出所) College Board (2008). *The 4th Annual AP Report to the Nation*. をもとに筆者作成。

上述のように、AP プログラムへの参加機会に関しては人種間で格差がみられるが、その科目別成績についてはどうであろうか。表 6-5 は、「アフリカ系」、「アジア系」、「ヒスパニック」、「ネイティブアメリカン」、「白人」、そしてアメリカ全体の AP 試験の平均成績を科目ごとに示したものである。表中の科目については、全 37 科目のうち AP 試験の受験者数が多い 10 科目を示している。また、全科目の平均成績に関しては、カレッジボードが提供する 37 科目全体の平均成績を示している。

表 6-5 に示した人種のなかで、全科目の AP 試験の平均成績が最も高いのは「アジア系」生徒の 3.05 であり、アメリカ全体の平均成績の 2.83 を上回る結果となっている。次に点数が高いのは「白人」の受験者で、全科目の平均成績は 2.95 となっている。この成績もまた、アメリカ全体の平均である 2.83 を上回る。アメリカ全体の平均成績を上回る人種は、「アジア系」と「白人」の生徒のみである。両者は AP プログラムへの参加人数も多く、成績も高いのである。一方、プログラムへの参加人数が少ない「ネイティブアメリカン」、「ヒスパニック」の生徒についてみると、全科目の平均成績はそれぞれ 2.39 と 2.48 であり、アメリカ全体の平均成績を下回っている。さらに、「アフリカ系」生徒については、全科目の平均成績は 1.91 で、表に示した人種のなかで最も低く、他の人種と比較しても成績の低さは顕著である。

表 6-6 「アジア系」生徒の AP 試験成績別人数

	成績が 1 の 人数	成績が 2 の 人数	成績が 3 の 人数	成績が 4 の 人数	成績が 5 の 人数	合計人数
アメリカ史	5,771	7,806	6,721	6,847	4,277	31,422
英文学・作文	1,978	7,814	8,186	5,750	2,214	25,942
英語・作文	2,364	8,341	7,206	4,293	1,866	24,070
微積分 AB	5,709	3,997	4,967	5,203	6,321	26,197
アメリカ政治学	2,653	5,668	4,717	3,419	1,191	17,648
生物学	2,571	4,093	4,317	4,633	5,678	21,292
心理学	2,178	1,448	2,290	3,237	2,843	11,996
スペイン語	983	1,232	1,341	1,050	628	5,234
ヨーロッパ史	1,451	1,465	3,372	1,968	1,301	9,557
統計学	2,740	2,001	3,273	3,319	2,283	13,616

出所) College Board (2008). *The 4th Annual AP Report to the Nation*. をもとに筆者作成。

表 6-7 「アフリカ系」生徒の AP 試験成績別人数

	成績が 1 の 人数	成績が 2 の 人数	成績が 3 の 人数	成績が 4 の 人数	成績が 5 の 人数	合計人数
アメリカ史	8,681	4,249	2,119	1,286	387	16,722
英文学・作文	6,299	8,282	3,540	1,100	190	19,411
英語・作文	5,917	6,699	2,423	708	162	15,909
微積分 AB	4,929	1,217	1,017	683	388	8,234
アメリカ政治学	3,593	2,851	1,237	486	108	8,275
生物学	3,105	1,722	883	574	255	6,539
心理学	3,159	975	1,041	944	311	6,430
スペイン語	953	384	258	142	41	1,778
ヨーロッパ史	1,129	498	724	213	67	2,631
統計学	2,468	669	529	260	74	4,000

出所) College Board (2008). *The 4th Annual AP Report to the Nation*. をもとに筆者作成。

次に、表 6-5 のなかで成績が最も高かった「アジア系」生徒と、逆に最も成績が低かった「アフリカ系」生徒について、AP 試験の成績ごとの人数を比較しながら、その特徴を明らかにする。そのため、AP 試験の成績別人数を「アジア系」生徒についてみた表 6-6 と、「アフリカ系」生徒について表した表 6-7 を用いて両者の AP 試験における成績の分析を行うことにする。

まず、「微積分 AB」の AP 試験に注目すると、表 6-6 から「アジア系」生徒の受験者 2 万 6,197 人のうち 6,321 人の成績が 5 であり、その人数は 1 から 4 までの成績を収めた生徒数のなかで一番多いことがわかる。一方、表 6-7 で「微積分 AB」の AP 試験結果を「アフリカ系」生徒についてみると、その成績が 1 である生徒の数は 4,929 人となっており、2 から 5 の成績を収めた人数と比較して最も多い。しかも、「微積分 AB」の試験を受験した生徒の合計人数が 8,234 人であることから、半数以上の生徒の成績が 1 であったことになる。

同様に、「アフリカ系」生徒については、「アメリカ史」と「統計学」の試験においてもその成績が 1 の生徒数が最も多く、さらに試験受験者数の半数以上の生徒の成績が 1 という結果である。「アメリカ史」の AP 試験受験者は 1 万 6,722 人であり、そのうち 7,514 人の成績が 1 である。「統計学」については、AP 試験の受験者数は 4,000 人であり、そのうち 2,468 人の成績が 1 となっている。また、「英文学・作文」、「英語・作文」、「アメリカ政治学」、「生物」、「心理学」、「スペイン語」、「ヨーロッパ史」に関しても、「アフリカ系」生徒の場合は成績が 1 であった生徒数が最も多くなっている。さらに、このうち「スペイン語」と「ヨーロッパ史」を除いた科目については、AP 試験受験者数は「アジア系」生徒数が「アフリカ系」生徒数を上回るが、試験成績が 1 である生徒数は「アフリカ系」生徒の方が多いたことがわかる。

このように、両者において試験を受けた合計人数には違いがあるが、試験の成績が 1 であった「アフリカ系」生徒の人数がきわめて多いことがわかるのである。こうした点も今後の重要な検討課題として登場してこよう。

4. 管理運営上の効果と課題

(1) カリキュラムの標準化

第 3 章で示したように、高校で AP プログラムの授業を行うにあたって、その実践は教員の裁量に任されている。しかし、AP 試験の成績に応じて大学側が単位の認定を行うことや、生徒の AP 試験の成績が高校の名声に直結すること等を考慮すれば、AP 科目の授業は必然的に AP 試験に標準を合わせたものとなることが予想される。また、第 3 章で触れたように、カレッジボードは 2007 年から AP 科目開設審査制度を設け、各高校で行われる AP 科目のカリキュラムを審査するようになった。したがって、それまでは州や学校ごとにばらつきのあったアメリカ国内のカリキュラムを標準化することが可能になると考えられる。

現在、アメリカでは州ごとに設定されているスタンダードと州テストが、州レベルのカリキュラム・スタンダードとして機能しているが、その科目は「英語」と「数学」しかない。その点で、さまざまな科目を提供する AP プログラムの影響は大きくなっていくと考えられる。多くの生徒が AP プログラムに参加しており、全米的なプログラムとなった現在、それが国レベルでカリキュラムを標準化させる役割を果たす可能性が高いと考えられる。カレッジボードのスポークスマンであるジョーンズ (Lee Jones) は、実際に AP プログラムは上級レベルのコースに関する唯一のナショナルスタンダードであるとさえ述べているのである⁶。

しかし、そのような効果が期待される一方で、AP科目のカリキュラムに関する批判もある。すなわち、それがAP試験で求められる膨大な量の暗記に重きを置いていることに対する批判である。アメリカ大学協会（The Association of American College and University）は、2002年の報告書の中で、「多くの大学は、1学年であってもより深く、そして研究に基礎をおいた学習を進めているが、多くのAP科目は、広範囲にわたる暗記がその中心となっている。本来、高校第12学年の生徒は大学で学ぶような深い知識スキルを重視するべきであるが、多くの生徒はそれをないがしろにしている。」と述べている。つまり、AP科目は知識の質よりもむしろその量を重視しているのである。実際、AP科目を担当した経験のある教員によれば、限られた時間の中で生徒のAP試験の成績を向上させるためには、知識を暗記させる方法がベストであると告白している⁷。

さらに、より多くの科目のAP試験を受験しようと、早い段階からAP科目を履修し始める生徒が出てきている。表4-6でも示したように、科目によっては第9学年の生徒を対象にAP科目を開設する高校もある。APプログラムにより多くの高校生を参加させるための努力は称賛に値するが、それは同時に、AP科目の授業が生徒の興味・関心を引き出し、大学への円滑な移行を促すためのものというよりも、単にテストで好成績を収めるために必要となる知識を教え込むためのものになってしまうことが懸念される。APプログラムは、経済的地位や人種に関わらず、多くの生徒にとって開放されるべきであるが、第9学年のように、高校に入学したばかりの時期から大学レベルの授業を提供することには疑問の声もある⁸。

近年、APプログラムは、教員の裁量があまり認められないという理由や、生徒にとっては得るものが少ないという理由から、APプログラムへの参加を中止する高校も登場してきている。さらに、2007年にカレッジボードが設けたAP科目開設審査制度のために、教員の自由な教授法を妨げるとして、同プログラムから撤退する学校も増えてきている⁹。実際AP科目開設審査制度を設けた2007年には全体の3分の2しか許可されなかった¹⁰ことも、同プログラムからの撤退に影響を与えていると考えられる。

そして、このようにAPプログラムから撤退した高校には、APプログラムとは別に学校独自の大学レベルのコースを開設する高校もみられる。例えば、シカゴにあるフランシス・W・パーカー・スクール（Francis W. Parker School）が実施する「公共政策をつくる（Creating Public Policy）」という科目では、学生はいくつかのチームとなって都市政策について調べ、さまざまな意見を持つ人々にインタビューを行い、そこからわかったことを市の職員に報告するものである。また、フィラデルフィアにあるジャーマンタウン・フレンズ・スクール（Germantown Friends School）では、生徒は1年間を通してゲノムに関する調査を行う。彼らは、遺伝子等を比較することによって、異なる生物同士の進化的関係を調べるのである¹¹。ただし、これらは現在のところ大学の単位として認定されるわけではないため、その拡大は今のところ不透明であると言える。

(2) 対費用効果

カレッジボードはこれまで、学生のニーズや社会状況に応じて、AP プログラムとして提供する科目を徐々に増加させてきた。しかし、2008年3月27日の理事会において、2009年5月に実施されるAP試験以降、「イタリア語・文化」、「ラテン文学」、「フランス文学」、「情報科学AB」の4科目について、AP試験を中止することを決定した。1950年代にAPプログラムが開始して以来、複数のAP科目を廃止したのは今回が初めてである。カレッジボードの副会長であるパッカー（Trevor Packer）によれば、試験廃止の主な理由は、それらの科目のAP試験を受ける生徒数が少ないことにある¹²。カレッジボードは非営利団体であるが、AP試験の受験料がプログラムを運営するにあたって必要となる貴重な財源となってきたのは確かである。これまで、参加生徒数の少ないAP科目を維持するために、AP試験の受験者数が多い科目から得られる受験料で相殺してきた。しかし、それも限界を超えたため廃止を決定したのである。代わりに、それらに費やしてきた資金を他の科目に向け、AP科目を維持するための支援を行うことを予定している。カレッジボードは、非営利団体として質の高い大学レベルのAP科目を生徒に提供するためにさまざまな支援を行っており、生徒や教員が効果的で幅広く重要なサポートを受けるためには、資源を適切に割り当てなくてはならないのである。

表6-8は、AP試験の廃止が決定した4科目について、2003年以降の受験者数の推移を示したものである。「イタリア語・文化」については、2006年からAPプログラムに新たに導入されたため、AP試験の受験者数は2006年から示してある。

表6-8 AP試験の廃止が決定された4科目の受験人数の推移

科目	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年
イタリア語・文化				1,597	1,642
ラテン文学	6,645	7,193	7,892	8,177	8,700
フランス文学	1,862	1,821	1,835	2,009	2,068
情報科学AB	21,745	20,414	19,021	19,601	20,113

出所) College Board (2008). *The 4th Annual AP Report to the Nation*. をもとに筆者作成。

この表から、「情報科学」以外の3科目に関しては、2000年から2007年にかけてAP試験の受験者数は一応増加していることがわかる。例えば、「ラテン文学」を見ると、2003年のAP試験受験者は6,645人であった。2004年には7,000人を超え、さらに2006年には8,000人まで達し、2007年には8,700人の生徒がAP試験を受験している。しかし、第2章で示した表2-4と比較すると、これらの4科目はその受験人数がきわめて少ないことがわかる。例えば、AP試験を受ける生徒数の多い「アメリカ史」についてみると、2003年には受験者数が24万2,699人となっている。また、さらに毎年およそ2万人ずつAP試験受験者数は増加し、2006

年には30万人を超え、2007年には33万3,561人の生徒が受験している。2007年の「ラテン文学」のAP試験受験者数と比較すると、およそ40倍の生徒が受験していることになる。「フランス文学」のAP試験を受験する生徒数も2003年から2007年にかけて増加しているが、2007年に「アメリカ史」の試験を受験した生徒数と比較すると、それは約160分の1でしかない。

一方、表6-8で「情報科学AB」についてみると、AP試験の受験者数は2003年から2007年にかけて減少傾向にある。2003年のAP試験受験者数は2万1,745人であったが、2005年には約1万9,000人まで減少している。2007年には2万113人まで再び増加しているが、全体的にみればAP試験を受ける生徒数は減少しているのである。このように、「情報科学AB」のAP試験を受ける生徒数が減少している要因の一つとしては、そのAP試験の内容を挙げるができる。例えば「生物学」や「物理学」、そして「経済学」といった他の科目のAP試験では最先端のトピックを題材にしているが、「情報科学」のAP試験のほとんどの部分が、プログラム言語となっており、知識的な内容に欠けているのである¹³。

以上のように、AP試験の受験者が少ないことから2009年以降の廃止が決定されたが、4科目のうち、「イタリア語・文化」については再開の可能性が示された。というのは、「イタリア語・文化」以外の3科目については、同分野で重複するAP科目がある。例えば、「フランス文学」に関しては、「フランス語」のAP試験が2009年以降も実施される。しかし、「イタリア語・文化」については同じ分野におけるAP試験は実施されておらず、重複する科目は存在しない。したがって、「イタリア語・文化」のAPプログラムについては、財政面で準備が整えば再開する可能性があることを示したのである¹⁴。2009年5月までに、カレッジボードの財政面を助ける新たなパートナーが現れた場合、「イタリア語・文化」のプログラムは2012年5月まで延長する予定である。カレッジボードは、2009年5月1日までに外部からの支援を受けることができ、3年延長することになるかどうかは、担当教員に知らせることになっている¹⁵。

5. おわりに

以上のように、APプログラムの問題点とは、その対象となる生徒を学業成績の優秀な一部の生徒のみから、より多くの生徒に機会を与えようとするに由来する矛盾の顕在化であったと言える。本章で明らかになったことは、以下のとおりである。

第一に、単にAPプログラムに参加するだけでは高大接続を促す効果は小さい。これまでの研究から明らかであることは、APプログラムはAP科目とそれを測る試験がセットになってはじめて効果を発揮するということである。確かに、試験がないとすればAP科目の普通の授業に身が入らないことも考えられる。第4章で見てきたとおり、AP試験は一夜漬けでは好ましい結果は得られない骨のある問題群である。普段から予習や復習をしたうえでさらに試験対策を万全にしなければ、おそらく3以上の成績は収めることができないだろう。学力向上という観点からすれば、試験は必要悪であるとも言えるであろう。

第二に、カレッジボードは、AP プログラムを単に拡大させることだけではなく、マイノリティにもその機会が享受されるようさまざまな努力を払っているが、研究結果からみるとこれまでのところその参加機会は人種間で均等になっていないことがわかった。また、AP 試験の成績についても、「アフリカ系」や「ヒスパニック」の生徒は、「白人」や「アジア系」の生徒に比べて低くなっていることが明らかになった。こうした現状において、今後マイノリティに対する救いの手をさらに差し伸べていく方向に進むのか、それとも質の低下の問題に関心を払って AP プログラム参加者を絞る方向に進むのかは、AP プログラムの将来にとって極めて重要な決断となろう。

第三に、AP プログラムは、AP 試験が牽引力となってカリキュラムを国レベルで標準化する可能性も孕んでいることがわかった。しかし、その一方で、AP 科目のカリキュラムが大量の内容を暗記することに重点を置いていることに対する批判もあり、こうした方向に本当に進んでいくのかは今後注視し続ける必要があるであろう。

いずれにせよ、AP プログラムがすでにアメリカの教育プログラムとして認知されていることは近年の新聞報道からも明らかである。その動向を追っていくと、肯定する者がいる一方で、それ以上にこのプログラムに批判的な者がいることがわかる。そのことは AP プログラム改革が国民にとって無視できない関心事になってきたことを意味し、行き詰まり感のあるアメリカ教育を変えていくための期待や可能性をも同時に背負った極めて重要なプログラムであるとも言えるであろう。

【注】

- 1 *Education Week*, January 5, 2005. Study: AP Courses Alone Don't Aid College Work.
- 2 *Education Week*, February 15, 2006. Scholars Warn of Overstating Gains From AP Classes Alone.
- 3 *The Chronicle of Higher Education*, January 21, 2005. Scholars Say College Admissions Office Misuse Advanced Placement Data.
- 4 *The Chronicle of Higher Education*, June 21, 2002. California May Ban Extra Points for AP Courses.
- 5 *The Chronicle of Higher Education*, August 2, 2002. College Board Plans to Broaden Mission of Advanced Placement.
- 6 *The Chronicle of Higher Education*, June 21, 2002. California May Ban Extra Points for AP Courses.
- 7 *Education Week*, January 19, 2005. On Dropping AP Courses.
- 8 *Education Week*, February 15, 2006. Scholars Warn of Overstating Gains From AP Classes Alone.
- 9 *The Chronicle of Higher Education*, November 23, 2007. High Schools Say No to AP.
- 10 *The Chronicle of Higher Education*, November 16, 2007. Two-Thirds of AP Courses Pass Official Muster.

- ¹¹ *The Chronicle of Higher Education*, May 2, 2008. Advancing Beyond AP Courses.
- ¹² *Education Week*, April 9, 2008. College Board Intends to Drop AP Programs in Four Subjects.
- ¹³ *The Chronicle of Higher Education*, June 24, 2005. The Decline and Fall of Computer Science.
- ¹⁴ *Education Week*, April 9, 2008. College Board Intends to Drop AP Programs in Four Subjects.
- ¹⁵ College Board (2008). Important Announcement about AP Italian Language and Culture.
<http://apcentral.collegeboard.com/apc/public/courses/teachers_corner/195950.html>

執筆者紹介（執筆順）

お がわ よしかず
小川 佳万 東北大学大学院教育学研究科准教授

お の であら かおり
小野寺 香 東北大学大学院教育学研究科博士課程前期



アメリカのアドバンスト・プレイスメント・プログラム
－ 高大接続の現状と課題 －
(高等教育研究叢書 102)

2009(平成 21)年 3 月 31 日 発行

著 者 小川 佳万・小野寺 香
発行所 広島大学高等教育研究開発センター
〒739-8512 広島県東広島市鏡山 1-2-2
電話 (082) 424-6240
<http://rihe.hiroshima-u.ac.jp>
印刷所 株式会社 ニシキプリント
〒739-2117 広島県東広島市高屋台 2 丁目 1-12
電話 (082) 434-6954

ISBN978-4-902808-48-3

Advanced Placement Program in the United States:
Present and Future of the Educational Articulation

**RESEARCH INSTITUTE FOR
HIGHER EDUCATION
HIROSHIMA UNIVERSITY**